サンエイムック
男の隠れ家
ベストシリーズ
男の隠れ家「城」シリーズの再録改訂版
明治維新150年
「江戸城」を
図解で徹底解剖!
日本の名城を歩く
悠久の歴史を訪ねて──。
藤堂高虎
黒田官兵衛
加藤清正
築城名人が造った
城を知る
往時の面影を今に伝える
現存十二天守
犬山城・松本城・彦根城
姫路城・松江城・丸岡城
宇和島城・松山城・高知城
弘前城・丸亀城
備中松山城
三英傑が残した
名城を歩く
織田信長 岐阜城・安土城
豊臣秀吉 長浜城・伏見城
徳川家康 岡崎城・駿府城
〝戦と城〟の関係とは?
語り継がれるあの合戦と十二城
知っておきたい城の豆知識
復興への道標
「熊本城」の今

郡上八幡　清流の城下町
そこには旅人を魅了する美しき山城が在る―
奥美濃　郡上八幡　日本最古の木造再建城
郡上八幡城

Gujo-hachiman,
Gifu, Japan

積翠城の夜明け ［撮影 福田弘二］

2018年は戊辰戦争・明治維新より
150年の節目である。
激動の時代、美濃国の小国 郡上藩では
国元と江戸藩邸で藩論が割れる中、
“凌霜”の精神のもとに“義”を貫き
戊辰戦争に参戦した隊があった。

郡上藩 凌霜隊

弱冠17歳の朝比奈茂吉を隊長に
藩士39名と小者6名からなる凌霜隊は
関東・東北戦線を転戦し、
塩原や会津若松城の籠城戦では
白虎隊とともに会津降伏まで戦い抜いた。

彼らの歴史に今一度、光を照らす。

■起源は永禄二年　赤谷山城の戦いに際して、この地に陣が置かれたことに始まる山城。遠藤氏・稲葉氏・井上氏・金森氏・青山氏の興亡を経て明治四年に廃城となるが、昭和八年に木造で再建。日本最古の木造再建城として水の城下町　郡上八幡の歴史を伝えている。積み重なるみどりの山々に囲まれた姿から「積翠城」の別称を持つ。

# 日本の名城を歩く

悠久の歴史を訪ねて——。



《読者の皆様へ》
小誌は、2014年1月25日発行の雑誌「時空旅人 ニッポン築城物語」と、2017年6月11日発行の雑誌「日本の名城を巡る」に掲載された記事をベースとして、一部レイアウトと企画内容を変更、ならびに記事と追加・加筆をして再編集したベスト版です。一部情報に関しては掲載当時のものも含まれます。予めご了承ください。

発行人／星野邦久　編集人／栗原紀行　株式会社三栄書房

# 日本の名城を歩く

## 悠久の歴史を訪ねて―。

野望を抱いた武将たちが、天下を争った戦国時代。彼らが拠点とした城は、
かつて全国各地に4万あったといわれる。乱世において城主と運命をともにし、
戦火によって失くされたものもあれば、運よく戦を免れたものまで様々だ。
時代を経るにつれ建築技術は優れていき、太平の世においては権力の象徴となった。
そして今、往時の面影をまとう現存十二天守をはじめとし、個性豊かな城が各地に残る。
全国にある城や城跡を巡り、武将たちの壮大なロマンを肌で感じたい。

名族・京極氏の居城としても知られる「丸亀城」。本丸には江戸時代に建てられた御三階櫓(天守)が現存している。高さは15mあり、小規模だが品格を備えた美しい天守だ。

撮影◎島崎信一

巻頭特集

# 江戸城

## ～明治維新150年　築城から無血開城まで～

約260年続いた江戸時代に、その首府であった〝江戸〟は、世界でも類を見ない巨大城下町として発展を遂げた。その象徴であったのが、今はなき日本最大の城・江戸城だ。時代によって姿を変えたこの城の歴史と全貌を説き明かしていく。

文◎相庭泰志　イラスト◎香川元太郎

### 江戸城をめぐる歴史

長禄元年（1457）　扇谷上杉氏・上杉持朝の家臣 太田道灌が江戸城を築城
文明18年（1486）　太田道灌、扇谷上杉家当主・上杉定正の糟屋館にて暗殺される
江戸城が上杉氏の所有となる
大永4年（1524）　後北条氏が武蔵国に侵攻。城主の上杉朝興が江戸城を去る
江戸城が後北条氏の北条氏綱の支配下となる
天正18年（1590）　豊臣秀吉が小田原攻めを行い、後北条氏を征伐。江戸城開城
後北条氏の関八州を与えられた徳川家康が入城
慶長8年（1603）　江戸幕府開府。天下普請による江戸城の拡張に着手
慶長12年（1607）　徳川家康により慶長度天守が完成
元和9年（1623）　第二代将軍徳川秀忠が元和度天守を完成
寛永15年（1638）　第三代将軍徳川家光が寛永度天守を完成
明暦3年（1657）　明暦の大火により天守焼失
明治元年（1868）　明治新政府軍に明け渡され、東京城となる

### 道灌がかりの築城術で難攻不落の江戸城が完成した

江戸に初めて館が建てられたのは12世紀初めのことと思われる。武蔵国江戸郷の丘陵、つまり後の江戸城、現在の皇居がある場所周辺に関東武士だった江戸氏が館を構えたのだ。しかし、鎌倉時代末期になると江戸氏の勢力には陰りが見えはじめ、代わって台頭したのが太田氏。そのなかでも道灌の時代にもっとも勢力を伸ばした。道灌は相模国の守護大名だった扇谷上杉家の家来であったが、戦に負けたことがなく、人心を掌握する力にも長け、城造りにも才能を発揮した。そして長禄元年（1457）、道灌26歳の時に築いたのが江戸城である。

その道灌から数えて十八代目の子孫にあたる太田資暁さんは、道灌が

# 台地を3つに区切り、空堀と土塁をめぐらし 根城・中城・外城で構成された道灌の江戸城

現在の江戸城跡周辺に城を築いた理由について、次のように語った。

「赤羽や湯島、品川、馬込など候補地は色々あったようです。そのなかから道灌が選んだのが〝江戸〟。当時、この江戸は後年のような徳川幕府の城下町を指すのではなく、ある一部の土地を表す地名でした。江戸とは海水が陸地に入り込んだ入口という意味であり、江戸周辺には多くの入江があって、そのなかでも日比谷入江は最も大きな入江。それに接した土地が江戸なのです。入江が多ければ水運を使うことができ、攻めるに難しい難攻不落の城が築けます。当時、隅田川を挟んで勢力を張っていた武将に千葉氏がいましたが、道灌はそれに備えるためもあって江戸が最適の築城場所と考えました」

道灌は城を堀で囲み、外城や子城が占領されても中城や本丸で敵を迎え撃つことができる、いわゆる「道灌がかり」と呼ぶ築城術を考案した人物で、『徳川実記』によると、道灌が造った入江を見下ろす台地の上に築いた城が江戸城の始まりとされ

上／東京国際フォーラム内にある太田道灌公の銅像の前に立つ、第18代目の子孫・太田資暁さん。道灌の視線の先には江戸城（現在の皇居）がある。左／平川門にかかる平川橋近くに、江戸城の石に刻まれた道灌を偲ぶ記念碑が建っている。

左／奥女中の通用門である平川門。上右／道灌が植えた梅の木々が由来という皇居東御苑の梅林坂。上左／平川門のかたわらには不浄門がある。城内から死者や罪人などを運び出すのに使われた。松の廊下での刃傷事件を起こした浅野内匠頭も、この門から出された。

## 日本の新しいシンボル 江戸城天守を再建する

現在は天守台（写真）しか存在しないが、そこに江戸城天守を再建しようと活動を続けるのが「江戸城天守を再建する会」（会長・太田資暁さん）。少子高齢化社会の閉塞状況を打破し、元気な日本を回復するためには、経済成長を続けるアジアの観光需要を取り込む必要がある。歴史と伝統を代表し、新たな日本の文化と技術を発信するためのシンボルタワーとなりえるのが、首都東京における江戸城天守の再建だとしている。

江戸城天守を再建する会　npo-edojo.org

ている。

江戸城は台地を3つに区切り、根城(本丸)・中城(二ノ丸)・外城(三ノ丸)で構成されていた。本丸には金閣寺を模して築いた寄棟造り御殿建築の豪壮な道灌の館・静勝軒があり、富士山を眺めることができる含雪斎、城下の日比谷入江に浮かぶ船を見張る泊船亭などが建てられた。そして多くの蔵や厩がならび、2つの櫓と5つの石門も備えられた結果、関東一の名城といわれるまでになる。

「台地を3つに区切ったのは、城の全てを占領されにくくするためでした。つまり、根城と中城、外城の間に空堀を掘り、土塁を盛って堅固な守りとした。外城を占拠されても中城へ逃げ込めば交戦することができ、中城を占領されても根城がありました。根城は崖のきわにあったので、直接、攻めることはできません」

それでは、この城からの眺めはどのようなものだったのだろう。寛正6年(1465)に道灌は上洛し、後土御門天皇に謁見している。その時、天皇に江戸城からの風景を尋ねられているが、道灌は和歌で答えている。それが、

わがいほは　松原つづき海近く
富士の高嶺をのきばにぞ見る

それほど江戸城からの眺めは素晴らしかったのだろう。

「静勝軒の扁額に京都五山の詩僧、蕭庵竜統が書いた作品を現代語訳すると、次のようになります。『大小の商船の帆と漁夫の小舟のかがり火が、竹林の間や霧のかなたに見え隠れする。これらの船は高橋の下にいたって停泊する。その集うさまは日々鱗のごとく蟻のごとくで、また兵員・物資が陸揚げされる』。米や茶、武器用の銅などあらゆる物が江戸に運ばれてきました」

京の都が戦場と化す応仁の乱が始まったのは、江戸城ができた10年後のこと。多くの学者や僧侶は荒れた都を後にして江戸城下に移り住んだこともあり、江戸は文武と経済にわたって賑わっていく。

「しかし、道灌が手塩にかけた江戸城と城下町の繁栄は30年ほどで終わりを告げます。文明18年(1486)の道灌の死後、江戸は急速に寂れていきました。再び、江戸が新たに再生されるのは、徳川家康が幕府を開く慶長8年(1603)まで約120年待たなければなりませんでした」

## 天下人の都市と城郭に相応しい江戸城と城下町が設計された

道灌亡き後、江戸を支配したのは扇谷上杉氏だが、ほどなく小田原を掌握した北条早雲の子・氏綱に仕えることとなり、江戸城は北条氏による武蔵・上野方面攻略の拠点、つまり支城扱いとなっていった。その北

条氏も豊臣秀吉によって五代で滅ぼされ、天正18年（1590）に江戸城を明け渡している。江戸城が北条氏の支城だったのは66年間。その後は、278年間続く徳川氏の時代へと移っていくのである。

秀吉の命令によって家康の関東転封が決まり、関八州250万石を統治することになった。本拠としたのは江戸城である。北条氏時代の江戸城は支城扱いであったため道灌時代のものをそのまま利用したと考えられるが、家康が見たのは荒れ果てるにまかせた江戸城の姿だったという。

「しかも当時の江戸城周辺は、葦や茅が生い茂る湿地帯で、江戸城のすぐ南東には日比谷入江が迫り、その東には江戸前島という半島があって、江戸湾と呼ばれていた東京湾がたゆたっていました。しかも平坦な土地は少なく、谷や坂がいくつもある。つまり、当時の江戸は現在の東京の地形とはまったく違ったものだったのです。さらに問題となったのは江戸城が天下随一の大大名の居城にしては手狭であったという点でした」

秀吉が伏見に隠居城を築いた時、家康は抜け目なく便乗し、隠居城として西の丸を造っている。慶長3年（1598）に秀吉が亡くなると、天下は家康のものとなり、2年後に起こった関ヶ原の戦いに勝利した家康は、慶長8年（1603）、江戸に幕府を開いた。

「江戸と江戸城は、それまでの一大名のものではなく、国の政治、経済上の中心としての位置づけが加わったため、天下人の都市と城郭に相応しいものでなければならなくなりました。そこで家康は、中断させていた江戸城の大改修と城下町の工事を再開します。これが諸大名に命じて行わせた天下普請と呼ばれるもので、人工水路を造って千葉方面からの塩や米などの運搬を行えるようにし、神田周辺の山を切り崩して日比谷入江を埋め立てました。また、道灌時代の子城、中城、外城に分かれていた曲輪をひとつにまとめてこれを本丸とし、二の丸や三の丸を新たに設けるなどの大改修に着手しました。それにより江戸城は近世的大城郭へと脱皮していったのです」

## 明暦の大火で焼け落ちた巨大な城と天守

家康の江戸城築城計画からうかがえるのは、将軍としての権威を広く天下に示しつつ、今後、待ち受けている豊臣家との決戦に備えた城造り。江戸城には、それまでにはなかった敵兵をおいそれと寄せ付けぬ連続外枡形などが備えられた。本丸は将軍職を退いた大御所の隠居所となった。本丸に付属する二の丸、三の丸の城塁や19の櫓なども完成していく。

もちろん工事は家康の代で終わっ



城主の権力の象徴

## 三代にわたり建て替えられた天守

江戸城の天守は、慶長12年（1607）の徳川家康に始まり、元和9年（1623）の二代将軍・秀忠、寛永15年（1638）の三代将軍・家光と、将軍の代替わりごとに築き直された。家康の時は5層の天守で、国会議事堂とほぼ同じ高さを誇り、現存する天守台より南方に築かれていたことがわかっている。一方、秀忠は本丸の改造に際して家康が築いた天守を撤去し、現在の天守台とほぼ同じ場所に築いたとされ、それまでの天守よりさらに高いものとなった。

そして家光の時、初めて現存する天守台に建てられた。「江戸図屏風」によると金の鯱をのせた5層の天守だったことがわかる。

徳川秀忠
天正7年（1579）～寛永9年（1632）
「徳川秀忠画像」東京大学史料編纂所所蔵模写

徳川家康
天文11年（1543）～元和2年（1616）
「徳川家康画像」東京大学史料編纂所所蔵模写

徳川家光
慶長9年（1604）～慶安4年（1651）
「徳川家光画像」東京大学史料編纂所所蔵模写

太田道灌が築いたとされる江戸城の復元図。
大地の高低差を巧みに利用した城だった。
（イラスト◎香川元太郎、監修◎西ヶ谷恭弘）

# 江戸の地に城を築いた、江戸城の祖
# 武将・太田道灌

太田道灌
永享4年（1432）～
天明18年（1486）
室町時代中期から後期にかけて活躍した30数戦負け知らずの名将。
太田道灌画像（大慈寺蔵）

永享4年（1432）　太田資清の子として生まれる。
文安3年（1446）　元服し、資長となる
享徳2年（1453）　従五位上となる
康正2年（1456）　家督を継ぐ
長禄元年（1457）　武蔵国入間郡に河越城を築く
　武蔵国豊嶋郡に江戸城を築く
文明3年（1471）　この頃に出家し、道灌と名乗る
文明18年（1486）　上杉定正邸にて暗殺。享年55。

江戸城にあった静勝軒を移築したと伝えられる佐倉城の銅櫓。
（佐倉市教育委員会蔵）

太田道灌にまつわる逸話で有名なのは「山吹伝説」だ。鷹狩りで雨に遭い、ある家で蓑を貸してくれと頼むと、出てきた娘は山吹の花一枝を差し出した。怒って立ち去った道灌だが、娘が『後拾遺和歌集』の歌になぞらえ、雨をしのぐ蓑ひとつない貧しさを奥ゆかしく山吹に例えたことを知る。己を恥じた道灌は、この日を境に歌道に精進し、達人の域まで達した。そして、その娘を江戸城に呼び、和歌の友としたという。

道灌は戦・築城・財政などのあらゆる面で功績を残した。しかし、主君の扇谷上杉定正はそんな道灌に恐れを抱く。そして、自邸に招き、執拗に入浴を勧めて、風呂場で暗殺してしまう。主君に取って変わろうとする思いは道灌にはなかったが、あまりに不用心だった。戦国の世に生きる武将としては潔白すぎたともいえるだろう。

## 五階の天井

五階部分の天井は書院風に造られていて、主室には、太い木を井桁状に組み、上に板を張った上に、中央部を一段高くしつらえた、豪奢な折上格天井となっていた。

屋根の斜面の小さな三角形の部分を千鳥破風という。戦の危険性が少なくなった寛永期には千鳥破風に攻撃部屋は必要なく、装飾性が重んじられた。

五重六階建て（地上5階、地下1階）の天守の部屋割りは極めてシンプルだった。すべての階には入側（座敷を囲む廊下）が巡らされていた。

現存する天守台は明暦の大火後のもので、瀬戸内海の大島産の花崗岩を用いて造られた。上部ほど小さな石を使って遠近感を際立たせている。

## 2017年に発見された「江戸始図」（部分） 松江歴史館蔵

徳川家康が築いた江戸城の平面設計を描いた最古級の絵図で、豊臣氏との決戦をひかえ、要塞機能を備えていたことがわかる。

## 5連続外枡形

大天守と2つの小天守があり、石垣の上に建てられた多聞櫓でつないだ連立式天守。詰丸（曲輪）の四方を囲む厳重な構造。本丸の南側出入口部分には、城壁を互い違いにする5カ所の連続外枡形が設けられていた。

たわけではない。慶長10年（1605）には、将軍職を息子の秀忠に譲ったが、工事は受け継がれた。さらに、豊臣家が滅亡した慶長20年（1615）の大坂夏の陣を経て、三代将軍・家光の時代にも続けられ、寛永13年（1636）に内郭と外郭が出来上がった。本丸の内部は、将軍と重臣たちが政治を行う場所である「表」の隣に、将軍と家族の私的な生活の場である「中奥」、そして、さらに将軍の正室や側室たちが暮らす「大奥」があった。それらを含む江戸城の規模は最終的には、東西5・72㎞、南北4㎞、濠の総延長26㎞。面積は35万坪におよび、まさに他に類を見ない日本最大の城となった。

「江戸城には5層の天守が3度建造されました。最初は家康の手による棟高48ｍ、白漆喰塗りの巨大天守で、面積は織田信長が築いた安土城や秀吉の大坂城の2倍以上にものぼります。秀忠や家光もそれぞれ天守を造営しますが、家光の寛永天守は棟高51ｍの壁を銅板黒塗りにした見事なものでした。しかし、大火によって灰燼に帰してしまいます」

それが明暦3年（1657）の明暦の大火だ。いったん収まった火の手は北風にあおられて燃え上がり、内堀を越えて紀州藩邸や水戸藩邸などを次々に焼き、本丸や二の丸、三の丸御殿と燃え広がっていった。その時、冷静な判断で将軍・家綱を火の

# 寛永期の天守

三代将軍・家光時代の江戸城天守の姿は、
平面図や姿図、立面図などから正確に復元できる。
それが、その天守断面図。石垣を含めると高さは60mにもおよび、
江戸城がいかに巨大な城であったかがうかがえる。

イラスト◎香川元太郎

5 屋根は、当時、神社仏閣などでもよく使われていた銅を薄くした板で葺いた銅板葺が用いられていたと思われる。軒先の瓦には金箔が押してあった。

6 寛永期の天守は高さが45〜50mほどと思われる。1階の平面は東西約35m、南北約40mで、天井の高さは約8mにもおよぶものだった。

7 銅板は千鳥破風の中にも張られていた。その銅板には、魚の鱗のような、あるいは波の模様を表現したような青海波が刻まれていた。

9 現存する天守台の手前には小天守台があるが、寛永期の江戸城には小天守が建てられていない。その周囲には塀が廻らされていたという。

8 天守の下部は腰と呼ぶが、その外壁部分に張られていたのは黒漆銅板。この銅板は高い強度を誇り、傷も付きにくいという特性を持っていた。

## 江戸の町と天守を焼き尽くした明暦の大火

江戸の町は何度も大火に見舞われているが、そのなかでも10万人以上の死者を出し、町を瀕死の状態に陥れたのが明暦の大火。別名、振袖火事といわれるのは、若衆を見初めた娘がそれがもとで亡くなったことに起因する。その娘が着ていた紫縮緬の振袖の古着を着た娘が2人も病死しており、その因縁を恐れて、問題の振袖を本郷丸山の本妙寺での法会の際、焼き捨てたところ、火が付いたまま舞い上がり、本堂へ燃え移ったという。

国立国会図書館蔵

**「江戸城明渡」** 神宮徴古館蔵　幕府の陸軍総裁の任にあった勝海舟と、官軍参謀として東征してきた西郷による直接交渉は2度行われた。

手から遠い西の丸御殿に移したのが、家光の異母弟で会津23万石の藩主であった保科(ほしな)正之だ。

「江戸の町は半分以上が焦土と化しました。江戸城も西の丸を残して、すべて瓦礫となってしまいます。次の課題は新しい都市の復興にありました。その過程で持ち上がったのが、江戸城天守の再建です。多くの幕閣が、軍事施設の象徴であり徳川幕府の威光を示すためにも天守は必要であると訴えました。そんななか、ただ一人だけ異議を唱えたのが正之でした」

正之はこう力説したという。「時代が変わり、城は戦のためのものではなくなった。しかも徳川の権勢は城によって発揮されるものではなく、上様のご威光によって示されるもの。天守が必要となれば、上様より天守が重要ということにもなりはしませぬか」

以来、江戸城に天守が造営されることはなかった。三代にわたった天守の建て替えや日光東照宮の建造などの出費によって、すでに幕府の財政は逼迫していたという側面がある。一方、明暦の大火後、江戸の町の各所には防火堤や火除け空き地などが設けられ、後の百万都市の土台が出来上がっていく。しかし、江戸城はたびたび火災で焼け、文久3年(1863)には本丸が全焼。以後、西の丸に仮御殿が造営された。

## ぎりぎりの折衝の末の江戸城無血開城

時は流れて幕末。すでに徳川幕府に国の舵取りをしていく力はなく、薩摩・長州による倒幕運動が激化するなか、十五代将軍・慶喜は慶応3年(1867)に大政を奉還した。

「それでも旧幕府軍の軍事力はあなどれないものがあり、薩長両藩を中心とする官軍と旧幕府軍の間に鳥羽・伏見の戦いが起こりました。結果は兵力を誇った旧幕府軍の惨敗。そのさなか慶喜は軍艦で江戸に逃げ帰り、恭順の姿勢をとりますが、江戸には旧幕府の息の根を止めようとする官軍が迫っていました。もしも江戸で戦が起これば、江戸城も町も破壊尽くされたでしょう。しかし現在、皇居には富士見櫓、伏見櫓、巽(たつみ)櫓と多聞櫓3基、大手門、平川門、桜田門など多数の城門が残り、石垣と内堀も保存されています。それは戦火から江戸を守った人々の力があったからです」

この時、幕府の代表となったのが勝海舟である。慶喜は勝海舟を嫌っていたが、他に適任者がいないため陸軍総裁に任命し、官軍の代表である西郷隆盛との交渉役に立てた。薩長諸藩の要人と面識があり、徳川家を存続させることを切に願った勝海舟の登用は、事態を破局に陥らせないための人事であった。

# 江戸城無血開城に関わる主要人物

江戸城を攻めようとする官軍と一部の幕府軍との間の戦は、避けられそうにない状況にあった。その窮地を打破し、江戸城と江戸の町民を守った人々がいた。

国立国会図書館蔵

勝海舟

文政10年(1828)～明治10年(1877)

旗本小普請組の微禄の家に生まれたが、先見性に富んだ海防意見書により幕府に重く用いられた。陸軍総裁として西郷と会談。江戸城無血開城へと導く。

国立国会図書館蔵

西郷隆盛

文政6年(1823)～明治32年(1899)

薩摩藩の下級武士。藩主・島津斉彬に見出だされ藩の重鎮となる。官軍参謀として江戸へと進撃するが、勝との会談によって江戸総攻撃をとどまった。

国立国会図書館蔵

山岡鉄舟

天保7年(1836)～明治21年(1888)

慶喜を護衛する精鋭隊頭。勝と西郷の直接会談に先立ち、西郷と面会。無血開城の条件を取りまとめた。

国立国会図書館蔵

徳川慶喜

天保8年(1837)～大正2年(1913)

幕府最後の将軍。鳥羽・伏見の戦の後、寛永寺から水戸へ謹慎の場を移した日、江戸城は無血開城された。

勝は旧幕府軍を暴発させないため奔走し、江戸を離れることができなかった。そこで、折衝の糸口を創り出すため、幕府・精鋭隊隊長の山岡鉄舟に西郷との事前交渉役がまわってきた。駿府で山岡は西郷と面談し、勝の書状を渡す。そこに書かれていたのは、慶喜は絶対恭順の姿勢を続けているが、旧幕府軍の暴発を抑えるのは困難な状況にあり、ひとたび暴発すれば十四代将軍家茂に降嫁した静寛院宮(皇女和宮)の命も保証できないということ。

対する西郷は謝罪条目7カ条を山岡に示した。山岡は、慶喜を備前藩に御預けの項目に強硬に抗議し、薩摩藩藩主が他家へ御預けとなったら、どのような気持ちになるかと訴えた。山岡は江戸の勝のもとに帰るのだが、西郷が高輪の薩摩屋敷に入ったのは、江戸城総攻撃のタイムリミットである3月15日の2日前のこと。勝と西郷はただちに会談に入ったが、決着がつかない。そこで翌14日も継続して協議に入った。

後日、勝は「罪もない江戸百万の精霊(人間)の命と財産を守ることに一番苦心した」と語っている。その思いに西郷も、「いろいろむつかしい議論もありましょうが、私が一身にかけてお引き受けします」と返答したという。ここに、江戸城と江戸の城下町が戦火から救われた江戸城無血開城が決まった。

**罪もない江戸百万の精霊(人間)の命と財産を守ることに一番苦心した**

### 西郷や勝も訪れた要人の密談の場

幕末当時、現在の東京都港区芝で造り酒屋を営み、薩摩藩の御用商人も務めた若松屋は、多くの要人の密談の場だった。奥座敷の裏は寺院と墓地で、その先には江戸湾に注ぐ堀があったため、逃げるのに適していたからだ。この奥座敷で西郷と勝が江戸無血開城の密談を行ったとする説がある。若松屋には多くの歴史上の偉人たちの書があったが、そのひとつが、「人皆炎熱に苦しむ我夏の日の永きを愛す」としたためられた西郷の書(写真)。若松屋は惜しまれつつ酒造業を明治44年(1911)に廃業した。しかしそれから百年後の平成23年、東京港醸造としてよみがえり、「江戸開城」などの銘酒を生み出している。

東京港醸造
tokyoportbrewery.wkmty.com

第一章

# 現存十二天守

## 往時の面影を今に伝える

弘前城（青森県）
丸岡城（福井県）
犬山城（愛知県）
松本城（長野県）
彦根城（滋賀県）
姫路城（兵庫県）
備中松山城（岡山県）
松江城（島根県）
丸亀城（香川県）
松山城（愛媛県）
高知城（高知県）
宇和島城（愛媛県）

### 戦国時代の姿を留める奇跡の城郭群

戦国末期から江戸時代に建造された天守のうち、明治時代の廃城危機や、戦争による被害を乗り越えて現在まで往時の姿を残しているのはわずか十二城。国宝や重要文化財、世界遺産にも指定されている名城を歴史の物語を紐解きながら訪ね、歩いてみたい。

# 犬山城

愛知県犬山市　国宝　天文6年（1537）築城

## 木曽川のほとりで美濃をにらむ 国盗りの要諦となった名城

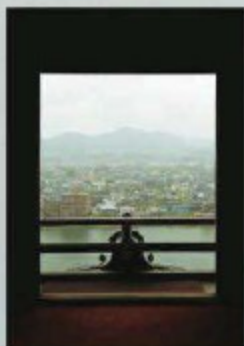
美濃との国境である木曽川沿いに位置する尾張国犬山は、羽柴勢と織田・徳川勢が覇権を競った場所である。対岸からの雄姿が特に美しい国宝犬山城天守は、数多くの謎を秘めながらも日本史の転換点を今に伝える。

文◎秋川ゆか　撮影◎佐藤佳穂

### 城主が激しく入れ替わった戦国時代の犬山城

犬山城の別名を白帝城という。江戸時代の儒学者・荻生徂徠が、城の情景が李白の詩にある白帝城に似ていることを讃えて名付けたといわれる。望楼型三重四階の美しい天守が川のほとりで緑に包まれてそびえる姿は、確かに『三国志』の舞台となった古城を思わせなくもない。

木曽川を背にした後堅固の平山城である。こちら側は愛知(尾張)で対岸は岐阜(美濃)。国境に位置する犬山は、戦国時代には争奪が繰り返された国盗りの要所だった。

城の歴史は天文6年(1537)、織田信長の叔父にあたる織田信康が近くの木之下城を移したことに始まる。永禄8年(1565)には信長が奪い取り、池田恒興に与えたのち、信長の子・勝長が城主になった。次に城主が激しく入れ替わるのは天正12年(1584)の小牧・長久手の戦の時だ。織田信雄の家臣として犬山城を守った中川定成の伊勢出兵中を狙い、池田恒興が城を奪還、羽柴秀吉も入城する。しかし長久手で池田は戦死。この1年間で城主(城代)は実に4人も替わっている。

上／最上階の望楼では、現存天守として唯一、廻縁を一周できる。雨や強風の日は、高欄が低く滑ると危険なので閉鎖。
下／北側は木曽川を隔てて美濃国(現在は各務原市)。愛宕山や八木山、遠く御嶽山や岐阜城も見える。

関ヶ原後の慶長6年（1601）からは徳川方の支配下になり、元和3年（1617）に家康の側近、成瀬正成が付家老として領地を拝領。以後、成瀬家が代々の城主を務めてきた。

明治時代には県の所有となった犬山城だが、それからの歴史も興味深い。明治24年（1891）の濃尾地震で天守は大きな被害を受けた。県では改修できない。それで成瀬家に修理を条件に譲渡されたのだ。平成16年（2004）に財団法人に移管するまで、犬山城は日本で唯一の個人所有の城だった。

## 天守の創建や構成には現在も数多くの謎が残る

この城にはいくつもの謎がある。まずは天守がいつ建てられたかだ。昔は、関ヶ原の戦いの前に美濃金山城を移築したというのが定説だった。

「けれども昭和36年からの解体修理で否定されました。移築の痕跡が一切残っていなかったんです」と犬山城管理事務所長の佐々由高さん。「この時、2階までは創建時のもので、3・4階は成瀬正成の時代に増築したことも分かりました」

内部に入ってみよう。野面積みの堅牢な石垣に守られた穴蔵から1階に上がる。ここにも謎がある。2階は矩形（くけい）なのに対し、1階は東側の一辺が斜めになっているのだ。

「なんのためなのか不明ですが、入側の幅を調整することで歪んだ部分と2

「国宝犬山城天守修理工事報告書」国宝犬山城天守修理委員会刊行より

創建時からの1・2重は総塗籠の大壁造、のちに増築された3重は真壁造の天守。外観は3重だが、内部は地上4階、地下2階。高さは19mと小ぶりだ。

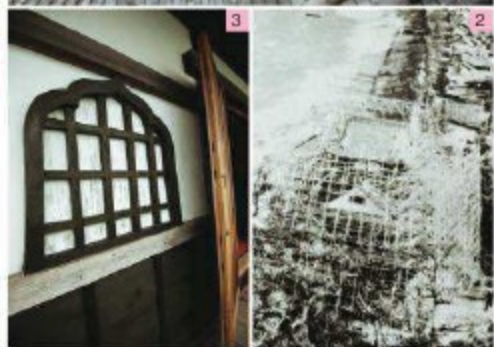
階部分を上手くつないでいます」と犬山城白帝文庫学芸員の寺岡希華さん。

武者走りには高い敷居がある。畳が敷かれていたのか。中央の「武者隠しの間」は今も畳。猿頬天井が張られ、床の間や違棚、帳台構もある。乱世を生き延びた天守にしてはあまりに優雅な造りである。2階は「武具の間」で、こちらには敷居はない。

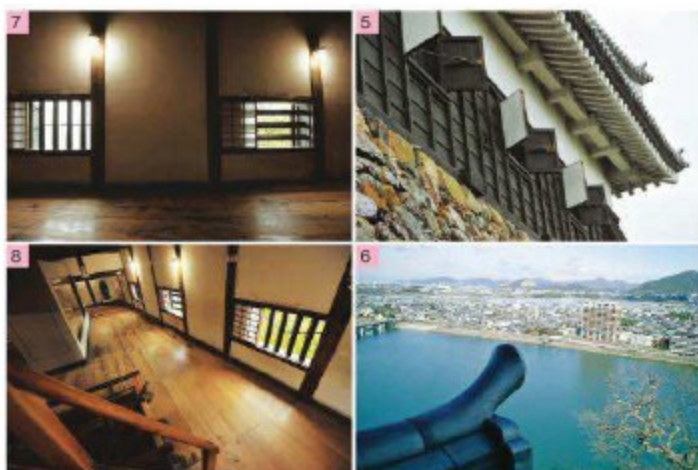
唐破風と入母屋破風を配した3階を過ぎると望楼だ。廻縁をぐるりと歩ける。眼下の木曽川や山並みの眺望が素晴らしい。壁には華頭窓が4つあるが「これもなぜか後から塗り籠められています」(寺岡さん)。

「謎が多いから面白い」と佐々さん。

「ここは美濃を威圧する城。小さな天守ですが、対岸から見るとどえりゃー美しいでしょう?」

今は天守のほかは城郭の石垣しか残っていない犬山城跡だが、歴史も景観も、また内部の謎も奥深い。時間をかけてじっくりと楽しみたい。

お話をうかがった佐々由高さんと寺岡希華さん。高欄の手すりが継ぎ目のない一本の材で作られていることもこの天守の自慢だとか。

木曽川対岸の各務ケ原市から見る天守。2009年の発掘調査では山を垂直に削った人工の崖(切岸)を発見した。

望楼は3間×4間のこぢんまりした空間。成瀬家歴代の肖像もかかる。付家老だった成瀬氏は名古屋か江戸に常駐し、犬山城天守に入ることはほとんどなかったという。

1/南の犬山市側を廻縁から見下ろす。大正期頃は名古屋城まで見えたそうだ。2/昭和36～40年に行われた解体修理。金山城移築説は否定されたが、なぜ古文書にそう記されているかは不明。3/望楼の華頭窓は建造後に塗り籠められている。4/天守のそばに残る大杉は築城前からあったとされる。樹齢650年で枯れたが今も城の守り神。5/1重目の下半分は下見板張り。6/天守から木曽川を望む。7/1階武者走りの窓。格子は一カ所だけ横向きについている。その理由もいまだ不明という。8/1階はこれも謎とされる一辺だけが斜めになった不等辺四角形。9/天守へは三光稲荷神社の鳥居をくぐると若干の近道。この神社はもとは三光寺にあったが、昭和に入ってから松の丸に移設されたもの。

いぬやまじょう
愛知県犬山市犬山北古券65-2　TEL:0568-61-1711
開場時間:9:00～17:00(入館は16:30まで)
休城日:12月29日～31日　入場料:550円
アクセス:名鉄「犬山駅」より徒歩約20分
問い合わせ先:犬山城管理事務所

現存十二天守の城

# 松本城

長野県松本市　国宝　文禄2年（1593〜94）築城

無駄を省いた実戦的な工夫が
さまざまな場所に生かされた
質実剛健な美を有する城

雪を抱いた北アルプスの高峰を背負い、天に屹立する黒い城。戦国の空気を今もなおその身にまとった松本城は、豪華な飾りは施されていないが、その姿は人々の耳目を集める。

文◎野田伊豆守　撮影◎菊田香太郎

案内人　**後藤芳孝**　ごとう・よしたか

松本城管理事務所 研究専門員
1948年、松本市生まれ。小学校、中学校の教員を経て現職に。専門教科は社会科で地方史、主に松本に関する歴史を研究。長野県史、松本市史にて執筆。松本市教育委員会発行『わたしたちの松本城』の編集委員長。

## 天守を傾けた怨念の伝説を生んだ加助騒動

冷たく晴れ渡った冬の空に、まるで呪文のような「二斗五升、二斗五升、二斗五升……」という声が響き渡る。その刹那、加助の身体を槍の穂先が貫いた。最後の力を振り絞り「皆の衆！年貢は五斗入れ、二斗五升だぞ！」と加助は叫んだ。同時に、カッと目を見開いた凄まじい形相で、松本城天守を睨みつけたのだ。その瞬間、大地が揺れるとともに、天守がグラリと西に傾いたのである。

これは加助騒動とも呼ばれている、貞享3年（1686）に松本藩で起こった大規模な一揆、貞享騒動の顛末である。事の起こりは例年に比べて不作だったこの年、松本藩は年貢一俵あたりの容量を、三斗から三斗五升に引き上げる決定を下したことにあった。実は松本藩の従来基準である三斗でも、近隣藩が採用している二斗五升の1・4倍以上の重税なのだ。

農民たちの困窮を見かねた中萱村の庄屋・多田加助を中心とした同志は中萱の熊野神社で協議して、二斗五升挽きの要求など五カ条の訴状を認め、郡奉行に訴え出た。この企てが村々へ伝わると、農民たちはこれに加勢しようと、四方から城下へと押し寄せたのである。

当時、藩主・水野忠直は参勤交代で江戸に滞在中で不在。事態を重く見た

内堀越しに大天守と北アルプスの山々を望む。真ん中あたりにある尖った頂は、右が横通岳（よこどおしだけ）、左は常念岳（じょうねんだけ）。太陽が西の山陰に沈む頃、天守のライトアップが始まった。漆黒に塗られた下見板と白壁の対比が美しい。

慶長5年(1600)に起こった関ヶ原の戦い前に築かれた城だけあって、実戦的な設計となっている。窓は全体的に小さめにできている。天守の3階部分にはまったく窓がなく、明かりは南側の千鳥破風に設けられた木連格子から入るわずかなものだけ。普段は倉庫、有事には武者溜として使われる階であった。

上／天守1階は東西南の三方に多くの窓が配されている。当初は壁があって4部屋に分割されていたようである。食糧・武器・弾薬の倉庫だったと考えられる。現在は間仕切りがないため、柱の配置がよくわかる。下／渡櫓2階に使われている大きな梁は、自然の木の湾曲をうまく利用している。かつては展示コーナーとして天守で使われていた瓦や和釘などを展示していたが、現在は見学不可。

城代家老は策を弄し、一旦は年貢減免を約束する。納得した農民たちが引き揚げると、多田加助をはじめとする首謀者8名とその家族20名を捕らえ、磔や獄門という極刑に処したのだ。その際、加助の怨念が松本城天守を傾けたのだというのである。

## 破却の危機をくぐり抜け 往時の姿を取り戻した天守

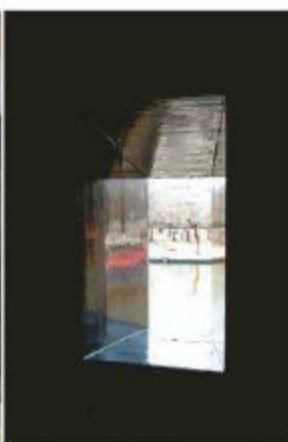
「明治の古写真に天守が傾いたように映ったものがありますが、ただしこれは怨念ではなく、老朽化が原因です」

とは、松本城管理事務所の研究専門員、後藤芳孝氏。明治期になると、松本城天守の荒廃は進み、倒壊の危険性もでてきた。

明治5年(1872)、競売にかけられ、235両余(米価計算で約400万円)で落札される。松本地方初の新聞である信飛新聞社社長の市川量造は、新聞で人々に天守を残すことの大切さを知らせ、新しい産業をおこす知識を広めることをねらって、天守を会場にして博覧会を開き、その収益で天守を買い戻すことに成功した。

右／松本平を治めるために、今の松本城が建つ場所に城を築くことをすすめた武田信玄。戦国時代に領国経営を考え、平城を築かせた信玄の慧眼(けいがん)には驚かされる。当初は深志城と呼ばれていた。左／天守最上階の天井部には、二十六夜神と呼ばれる神が祀られている。毎月26日の晩、三石三斗三升三合三勺の米を餅にして、供えて祀れば城は栄えるという言い伝えがある。戸田康長の代に祀られた。

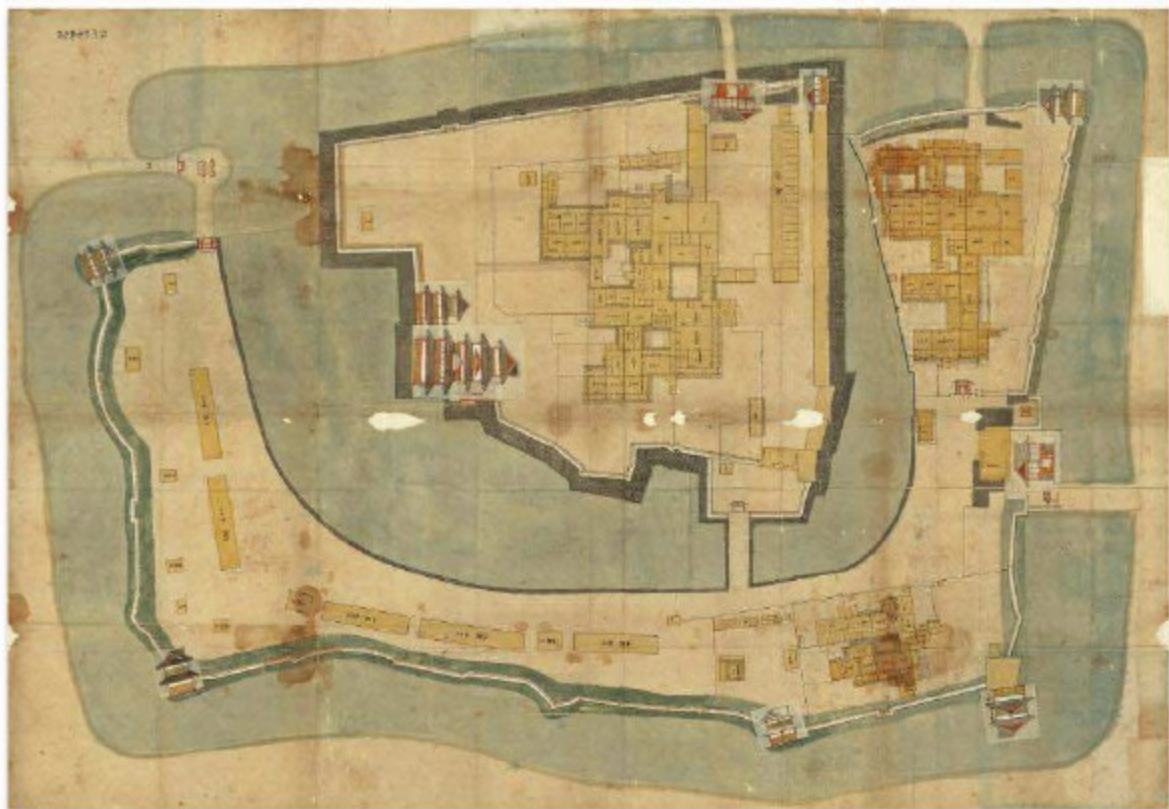
「市川は各地の博覧会を松本でも開いて文明開化を伝えたいと考えていました。会場として天守は格好の場所でした。明治9年（1876）まで5回開催され多くの人が見学にきました。その結果、天守は取り壊しを免れることができました」と後藤さん。

天守は鉄砲狭間が37、矢狭間が40、乾小天守には同12と16、渡櫓は同3と2、辰巳附櫓は同3と2ある。窓には太さ15cmの竪格子が入っている。

## 現存十二天守の城

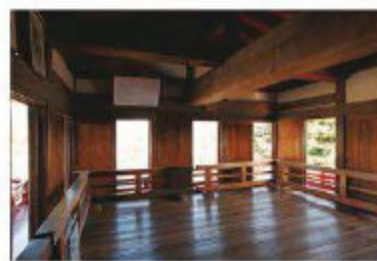
現在の東京理科大学創立者でもあり、明治19年（1886）に初代松本中学校校長として当地に赴任。以後、大正3年（1914）に没するまでその職を勤めた小林有也も、松本城にとっての恩人のひとりだ。小林は荒廃した天守を憂い、明治34年（1901）に松本城天守閣保存会を発足。明治36年から修理に入ったが資金難に見舞われ、しかも日露戦争もあって工事はたびたび中断。しかし小林は募金に心血を注ぎ、大正2年、着工から足かけ11年で竣工した。

　この明治の大修理の工事記録はあまり見つかってはいないため、その工法については不明な点が多い。一説には天守の傾きを直すために、柱に綱をかけて引き起こしたともいわれている。真偽はともかく、この修理のおかげで天守の歪みを直すことができたのは確かだ。さらに昭和25年（1950）から昭和30年にかけて、大規模な解体復元工事（昭和の大修理）が行われた。おかげで現在も勇壮な姿を見ることができるのである。

### 様々な部分に籠もる<br>先人たちの叡智の結晶

　現在残っている松本城は天正18年（1590）、石川数正が松本に封ぜられた時から普請が始まっている。数正は領内が安定するとただちに城普請にかかったが、豊臣秀吉による朝鮮出兵に従い、九州の名護屋城に出陣。出先で病死してしまう。

正徳2年(1712)頃の図面。ここに描かれている建物の多くは焼失したり、取り壊されたりした。内堀も現在よりも広かったことがわかる。
「信州松本城之図」
松本城管理事務所蔵

資材などを階上へ持ち上げるため、3階分が吹き抜けのようになっている場所も残されている。

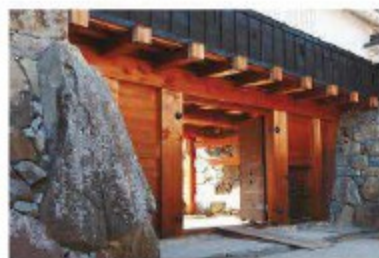
天守1階の武者走り。壁際に立つと、外側(右)が緩くカーブしているのがわかる。

月見櫓は松平直政が城主であった頃、三代将軍・徳川家光を迎えるために、辰巳附櫓とともに1630年代に建てられたもの。天守などと違い、戦いのための設備は一切ない、優雅な雰囲気の櫓なのだ。

城主の御座所として使われていたと考えられている天守4階。3間四方の書院造り風の部屋になっている。

天守の階段は7カ所ある。どれも55〜61度という急勾配。蹴上げが約40cmの箇所もある。

外から見た場合、どこにあるかわからない天守3階。明かりは南側の千鳥破風から入るのみ。

左／石垣は野面積み。自然石を無造作に積んでいるように見えるが、石と石はしっかり組み合わさっている。隅の部分には算木積みが採用されている。開口部は石落とし。右／天守1階の石落としを内部から見たもの。

屋根の棟の端に付いている鬼瓦や端に使われている丸瓦には、城主の家紋が入っているものもある。

平成11年(1999)に復元された太鼓門。左の巨大な石は築城者の官途名が付いた「玄蕃石」。重さ22・5トン。

松本城天守を建てたのは、数正の子・康長であった。康長は名護屋から帰陣するとすぐに天守の築造に取りかかり、文禄2、3年頃（1593〜94）に大天守と乾小天守、さらにこの二つを結ぶ渡櫓を完成させたという。大天守は外観が5重で、内部は6階となっている。石垣上端からの高さは25mもある。木造でこれだけの高さの建造物を建てるために、さまざまな工夫を見ることができる。

「石垣の下には土台を支持する16本の柱が埋められていて、天守の重みを支えています。地盤が軟弱なので、土を盛り固めて石垣で押さえるだけでは持たないのでしょう。そのため今でいうパイル工法のような形になっているのです。それから櫓部分を一体化するために、1階と2階、3階と4階、5階と6階をそれぞれ通しでつないでいる柱が多用されています。さらに柱の位置を揃えて、重さを支えているのです」と後藤さんは話す

実際、天守内部を見学している際に、よく注意すれば通しの柱になっていることがわかる。さらにこうした資材を上部階に引き上げるために設けられた、吹き抜けのような設備も残されている。

また天守1階の武者走りに立つと、壁が中央に向かって少し内側に反っているように見える。これは天守を載せている石垣が、両端を外側に反らせて強度と安定を図った、糸巻きのような形をしているから。1階部分は石垣の端の形に合わせてあるために、そのようなスタイルになっているのだ。

天守の通し柱は角材、柱間は京間（6尺5寸＝1間）なのに対し、3重4階の乾小天守は1階から2階の通し柱10本、3階から4階の通し柱12本全てが丸太材。柱間は江戸間（6尺＝1間）となっている。こうした構造の違いも、見逃さないようにしたい。

よく「松本城は決して華美ではないが、無駄を省いた質実剛健な美しさがある」といわれる。それは単に外観から受ける印象だけではなく、見えない部分にまで凝縮されている、先人たちの叡智が放つ光芒なのかもしれない。

天守から本丸を見下ろしたところ。かつて本丸御殿が建っていた場所には、瓦で印が付けられている。向かって右手が客を接待する場所、真ん中が政務を行う場所、左手は城主の生活空間であった。

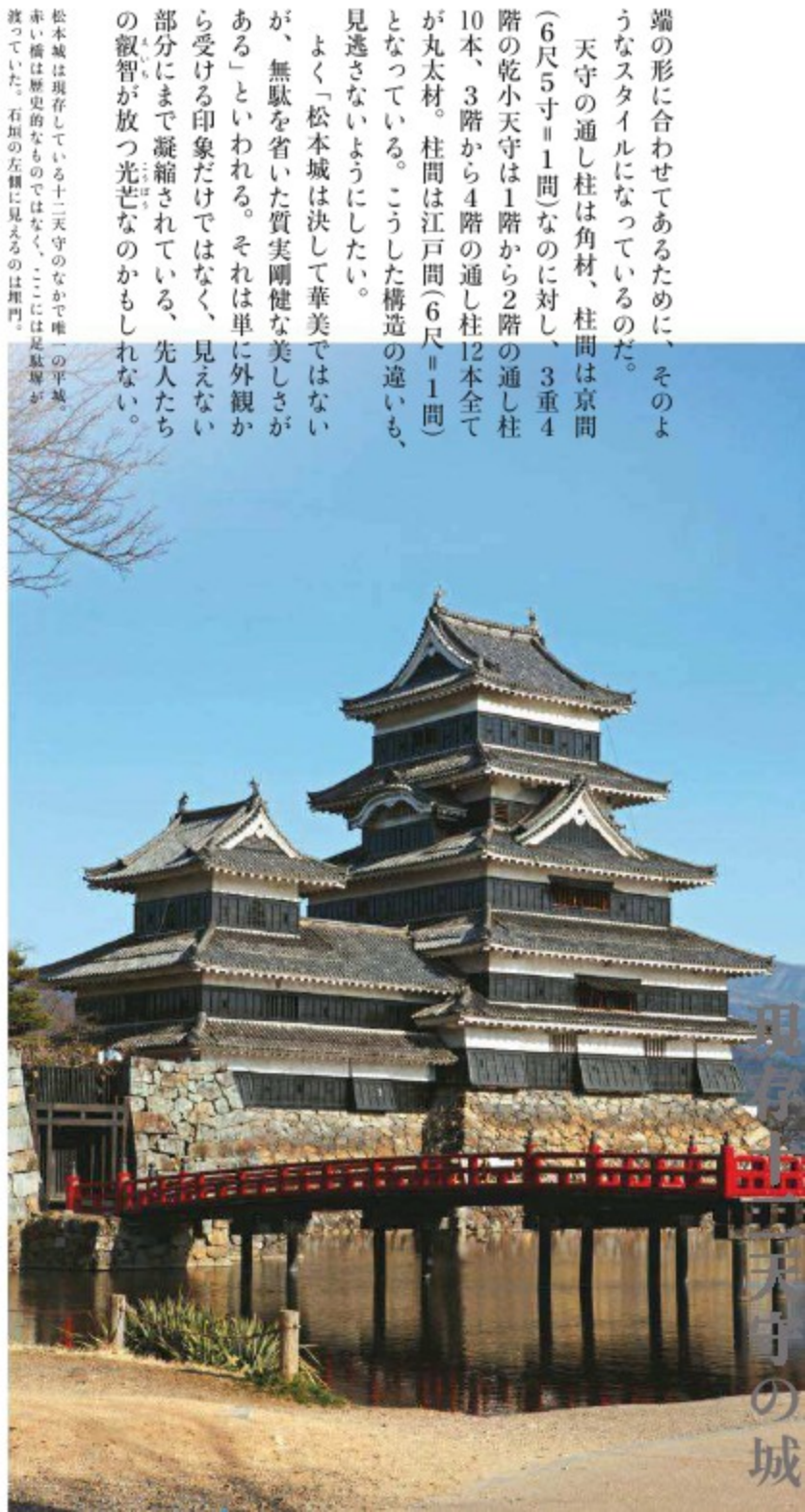
松本城は現存している十二天守のなかで唯一の平城。赤い橋は歴史的なものではなく、ここには足駄塀が渡っていた。石垣の左側に見えるのは埋門。

現存十二天守の城

まつもとじょう
長野県松本市丸の内4-1
TEL:0263-32-2902
開館時間：8:30〜17:00（入城は16:30まで。夏期・GWは延長あり）
休館日：12月29日〜31日
入館料：610円（松本市立博物館と共通券）
アクセス：JR「松本駅」より徒歩約15分。
タウンスニーカー 北コース「松本城・市役所前」下車すぐ
問い合わせ：松本市観光案内所　TEL:0263-32-2814

# 彦根城

## 琵琶湖を見下ろす彦根山頂に多種多様な破風が彩る3層の天守

滋賀県彦根市　国宝　慶長12年（1607）築城

大坂の陣を挟んで前後2期、約20年にわたる工事の末、近世城郭と中世城郭の手法を融合して造られた井伊家の居城。琵琶湖のほとり、彦根山上に頂く天守は小規模ながら、意匠性・戦略性に富む国宝5天守のひとつとして今も君臨する。

文◎萩木博幸　撮影◎尾上達也

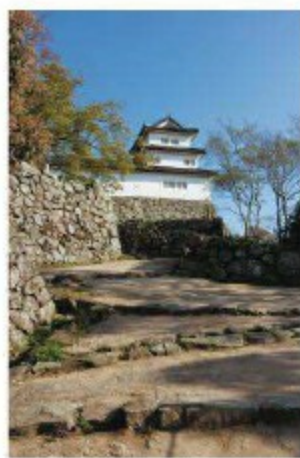
天守の前面を広く確保している東側や南側に対し、左へ坂道が続く天守北側は搦手の黒門山道を見下ろす形で密接。仮に敵が攻め上ってきた時には天守自体も攻撃施設と化す。

### 天下普請で着工され足かけ約20年がかりで完成

関ヶ原の合戦後、上野国から石田三成の居城だった佐和山城へ入り、後の彦根初代藩主となる井伊直政は、三成の残像を払拭すべく佐和山に代わる城の建造を計画するも、関ヶ原での戦傷がもとで入城の翌年あえなく死去してしまう。その遺志を継ぎ、佐和山から約2km西方、琵琶湖岸に寄り添う彦根山で築城に着手したのが、嫡男である直継だった。

慶長9年（1604）の着工当時、まだ戦乱の火種がくすぶり、豊臣恩顧の大名が多い西国への睨みを利かせ、また大坂城包囲網のひとつとして、彦根城は軍事的な要。そのため幕府から6名の普請奉行が派遣され、近隣大名が助役として動員される、諸国あげての天下普請となった。

周辺の古城や廃寺からも資材をかき集め、急ピッチで築城が進められた結果、本丸など主要部は数年で完成する。その後、大坂の陣での中断を経て、直継の後を受けた弟・直孝の時代にも藩単独で工事が続けられ、元和8年（1622）に城郭全体が整う。以降、譜代大名筆頭・井伊氏の居城として受け継がれていく。

右／彦根山の斜面5カ所に設けられた登り石垣。中／当初は鐘の丸にあり、後に城下に音が響きやすい太鼓門櫓下に移されたと伝わる時報鐘。今も1日5回、時を告げる。左／山崎山道から上がると頭上に西の丸三重櫓が見えてくる。その手前では深い大堀切が行く手を阻む。

臨池閣や鳳翔台を配した玄宮園の池越しに見晴らす天守。彦根山を覆う木々と回遊式庭園の風景が一体になり、雅な風情にあふれる。11月の紅葉時期には園内のライトアップと併せて観賞も可能。

### 戦国的な登り石垣と大堀切が本丸への侵攻を厳しく阻む

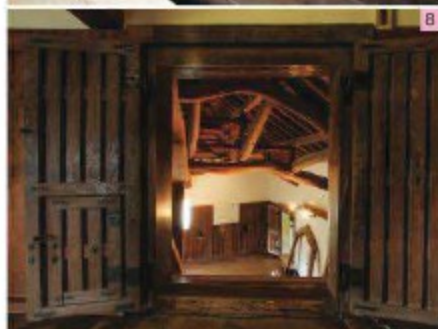
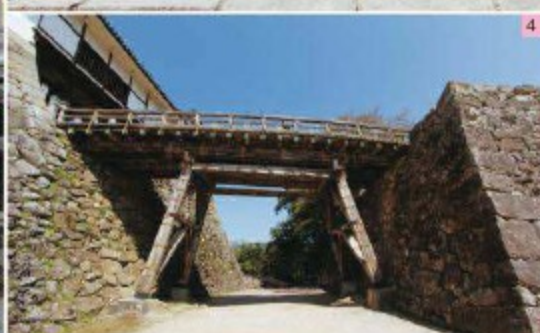
人工的に付け替えた芹川を第一防衛線にして、その北側に構築された縄張は、今はない外堀を含む3重の堀が巡らされ、南北に広がる彦根山全体を第一郭として活用。麓を縁取る内堀やその外周の中堀は現在も残り、往時の面影を偲ばせる。

中堀に開かれた4つの門のうち、南側の京橋口が大手であるが、五街道のひとつ・中山道が整備されて以降、表門へ通じる南東部の佐和口が最寄りということで、実質的な正門として機能するようになった。いろは松と呼ばれる中堀沿いの通りを進むと現れる佐和口多聞櫓は、その名残である。桝形の左翼に連なる建物は、明和8年（1771）頃に再建されたものとはいえ、重厚な佇まいが玄関口にふさわしい風格を漂わせている。

内堀の表門橋を渡った表門跡の奥、復元されて彦根城博物館として公開される表御殿の脇を経て、山上への急勾配が続く表門山道へ。すぐ左手の斜面をはうように設けられた高さ1m余りの登り石垣は、秀吉の朝鮮出兵時に各地で築かれた倭城の手法の流用とされ、戦国時代の竪堀や竪土塁を石垣化したもの。斜面から本丸への接近を試みる敵の横移動を封じる狙いがあり、ここを含めて計5カ所に設けられている。

表門山道を登りきると、もうひとつの特徴である大堀切。南北の尾根を深

天守から城内北東部の玄宮園を見下ろす。四代藩主・直興が延宝5年（1677）から造営を始めた彦根藩下屋敷で、建物として楽々園などを併設する。

1／天守の最上層は、奥と手前の2間からなる。大きく湾曲した梁の木材は、あえて意匠として選定したものか。四方に開かれた窓の外からは城下はもちろん、琵琶湖や近江平野などを一望できる。2／鐘の丸の向こうに待ち構える天秤櫓。『井伊年譜』は長浜城大手門の移築と記すが定かでない。手前の橋は人馬通行が見えないよう屋根・腰壁付きの廊下橋になっていたという。3／現在はコンクリート補強しているが、いざというとき橋脚を抜いて崩せる「落とし橋」になっていた。4／橋の下は尾根を分断した大堀切。5 6／無数にある狭間の一部を利用して、天守内に設けられた隠し部屋。3階の南・北のほか、2階の東・西を合わせた計4カ所に設けられているという。小さな引違戸が付いた開口は狭く、天井も低いものの、中は4〜5人が入れるほどの広さがあり、隠し狭間も用意されている。普段は扉に鍵が掛けられ、内部の公開はしていない。7／天守内の武者走り。外壁側の要所に狭間があるが外からは見えない。8／奥の多聞櫓からは階段と扉を経て手前の天守1階へと続いている。9／太鼓門櫓の裏側は壁がなく、高欄を付けた廊下になっているのが珍しい。登城合図の太鼓の音を響かせる工夫とも、門を突破した敵を背後から攻撃するためともされている。

く掘り下げた空堀で、天秤櫓などから集中攻撃を浴びせかけられるだけでなく、頭上の鐘の丸と太鼓丸を分断している。大手門側からの合流地点でもあり、本丸へ向かうには奥の坂を上がって鐘の丸へ回り込む必要がある上、その先の橋を落とされると、そそり立つ石垣を這い上がるしかない。同様の大堀切は本丸の北西部、西の丸の外側にも設けられ、行く手を阻む。近世城郭の代表といわれながら、これら戦国的手法を併せ持つのは彦根城ならではだろう。

そして、長浜城大手門の移築との説もある天秤櫓をくぐると、石垣に囲まれた斜面に広がるのが太鼓丸。最後の難関である太鼓門櫓を越えて、ようやく本丸へとたどり着く。

## 多彩な破風で飾られた天守は城本来の機能性も併せ持つ

藩主の居館である御広間や城下を見下ろす着見櫓などもあったという本丸だが、今は附櫓と多聞櫓が付設された3層3階の天守のみが佇む。最盛期には30万石規模の大藩にしては天守が小ぶりに見えるのは、築城当時まだ18万石だったから。一見すると粗雑な打ち込みハギの石垣は、重心が内下に向くように長大な自然石がかみ合わされ、隙間に小さな石をはめ込んだもので、見栄えよりも堅固さを重視した。

対照的に建物外観は意匠が凝らされ、とりわけ象徴的な装飾が4面を取り巻く多種多様な破風屋根だ。小規模な天守でありながら18もの破風が施され、どの方角からでも見劣りしない。例えば、正面側の東面は入母屋破風・唐破風・切妻破風が組み合わされ、シャープで端正。南面は最上層に唐破風が採用され、下層に切妻破風などを交え、建物幅が東西面の倍ほどあることと相まって重量感ある趣も。さらに、3階部分には高欄付き廻縁がぐるりと巡らされ、3階に加えて2階部分にまで花頭窓があしらわれているのも目を引く。

昭和30年代の解体修理により、天守は別の城郭からの移築と判明。井伊家の歴史書『井伊年譜』にある記述や、発見された墨書などから、4層5階の大津城天守の資材が使われた可能性が高いと考えられている。天守内部へ入ると柱や梁の所々に現在使われていない〝ほぞ穴〟が見られるのも、まさにその証しだろう。

石落としが一切見られないのも彦根城の大きな特徴だが、代わりに鉄砲・矢狭間は天守内に全部で75カ所。しかも外側からは見えないように漆喰で塗り込められ、隠し狭間に仕立てられている。ほかにも、一部の破風内部は隠し部屋になっていたり、城外側の外壁は栗石を詰めた太鼓壁にして防弾性能を高めていたり、極めて実戦的な工夫が数多い。

江戸時代のほかの城郭同様、戦の舞台になることはなく、廃藩置県後に各地で進められた解体の危機も、明治天皇への大隈重信の奏上などにより回避。鬱蒼と茂る樹木が覆う彦根山頂に今なお鎮座する美しい天守は、「月明・彦根の古城」として琵琶湖八景のひとつにも数えられている。

上／太鼓門櫓外側の壁面は、もともとの岩盤を生かして鏡石代わりに。下／太鼓門櫓をくぐると、石垣越しに天守が顔をのぞかせる。ここまで来ても四方を囲む石垣や櫓の上から攻撃を浴び、簡単に先へ進めない。

多聞櫓のすぐ内側、天守石垣の北側から突き出している小さな蔵状の建物が、実は本来の天守の出入り口。この内部に設けられた階段によって天守の1階部分へと通じている。

ひこねじょう
滋賀県彦根市金亀町1-1　TEL:0749-22-2742（彦根城管理事務所）
入館時間:8:30～17:00　休館日:無　入場料:大人800円（玄宮園含む）
アクセス:JR東海道本線「彦根駅」より徒歩15分

5年半に及ぶ
平成の保存修理を経て
生まれ変わった白亜の連立式大守
甦った美しい白鷺の城を巡る

現存十二天守の城

# 姫路城

兵庫県姫路市

国宝

慶長14年（1609）築城

江戸時代に池田氏によって近世城郭として整備されて以来、天下の名城として受け継がれてきた姫路城。「平成の保存修理工事」を経て往時の勇姿を取り戻した。

撮影◎木下清隆　写真提供◎姫路フィルムコミッション

三の丸から二の丸へと続く城内最大の門として知られる「菱の門」。柱の上の冠木に菱の紋があることが名の由来となっている。また上部には寺院などにみられる美しい華頭窓があしらわれている。これは城郭では珍しい装飾である。

**姫路城が辿った歴史**

- 貞和2年（1346）　赤松貞範、姫山に城を築く。
- 天正8年（1580）　羽柴秀吉の中国攻略のため黒田孝高が城を秀吉に献上。秀吉は3層の天守閣を築く。
- 天正13年（1585）　木下家定が姫路城主となり16年間治める。
- 慶長5年（1600）　関ヶ原の戦いの後、池田輝政が姫路城主になる。
- 慶長6年（1601）　池田輝政が城の大改築を開始。9年後に完成。
- 元和3年（1617）　池田光政が鳥取城へ移り、本多忠政が姫路城主になる。三の丸、西の丸などを造営。
- 寛延2年（1749）　酒井忠恭が前橋から姫路へ。以後、明治維新まで酒井氏が城主を務める。
- 昭和6年（1931）　姫路城天守閣が国宝に指定される。
- 昭和31年（1956）　国費により天守閣を8カ年計画で解体修理（昭和の大修理）
- 平成5年（1993）　ユネスコの世界遺産に登録される。
- 平成21年（2009）　大天守保存修理工事着工（平成の修理）。2015年3月に全工事完了。

## 威風堂々とした白亜の大天守に400年の歴史が刻まれている

平成27年（2015）3月に大天守保存修理工事が竣工して以降、多くの人々が生まれ変わった白亜の城を訪れてきた。姫路城は「昭和の大修理」から45年を経て、白漆喰など劣化が目立つようになっていた。そこで平成の修理では、大天守の漆喰の塗り替えや屋根瓦の全面葺き替えが行われ、加えて耐震補強が施された。そして5年半を経て、天守閣は往時の姿を取り戻した。

屋根瓦の総数は7万5000枚。その全てに番号を振って下ろし、屋根の反り具合や歪みなどが丹念に調査された。そして漆喰の塗り方や材料もあらためて確認された。

7万5000枚の屋根瓦は全て番付を行ってから下ろした。屋根の調査後に、瓦を全て葺き直して漆喰を3回に分けて塗り重ねていった。また、鯱瓦も解体され保存状態が調査された。

「昭和の工事は時間がないなかで進められましたが、今回は比較的丁寧に漆喰を塗り直せました。瓦を元に戻す際に職人の方々が、反りが大きい物は軒先に、小さいものは壁際にと位置を調整してくれました。これによって水はけがよくなったのでさらに保存状態も良くなるでしょう」

　そう話すのは姫路城総合管理室改修担当の小林正治さんだ。修理後の状態を長く保つためには十分な工期をとることがとても大切なのだという。姫路で生まれた小林さんは、昔は自宅の窓から姫路城を眺めることができたと懐かしそうに語る。町の象徴である姫路城は400年間、この場所に静かに佇んできた。町の人々は城を見上げてその姿を誇らしく感じてきたのだろう。そして平成の修理を終えた城の周辺では、3月27日のグランドオープンを控えて最終チェックが行われていた。

上／「はの門」を抜けて本丸へと進む。その一角、備前丸には池田輝政の居館があった。下／二重になった分厚い扉は大天守への入り口で、創建当時のものである。

　姫路城の歴史は、鎌倉時代に赤松氏によって姫山に築かれた城に始まる。天正5年（1577）、織田信長の命によって羽柴秀吉は中国攻めに出向いた。播磨へと入った秀吉を迎えたのが当時、姫路城主だった黒田官兵衛として有名な孝高である。孝高は秀吉の播磨平定に協力し、西国進出の拠点として姫路城を献上した。入城した秀吉は城の改築にとりかかった。地下に穴蔵を設け、外観は3層だが内部は4階建てになった天守閣を完成させたのである。

　織田信長、豊臣秀吉が死去すると、時代は関ヶ原の戦いへと突き進んで行った。その際、徳川家康について功績をあげたのが新しい姫路城主に任命された池田輝政である。西国へ圧力をかけるために姫路へ入城した輝政は、秀吉時代の天守を解体した。そして9年の歳月をかけて大規模な城づくりを開始。築城のために動員された人々は延べ2430万人に及んだといわれている。こうして慶長14年（1609）に連立式の大天守群が完成し、近世城郭としての姫路城が誕生した。現在、城門や天守の屋根瓦に見られる揚羽蝶の家紋は、この池田氏の時代の遺構であ

威風堂々とした白亜の連立式天守。美しい外見とは裏腹に実戦を想定した複雑な縄張りに驚かされる。

右から／火除けの意味が込められた鯱瓦は、高さ1・86mと巨大。重さも約300kgである。今回、白漆喰には耐久性を高めるために防カビ剤が塗布された。改修工事を担当した姫路城総合管理室の小林正治さんと天守。

右／菱の門をくぐると目の前に現れる堀。二の丸へと続く要所にあり、多方向から監視できるようになっている。左／縄張りは故意に迂回させるように造られている。天守閣に近づくことは容易ではない。

ることを伝えている。さらに元和3年（1617）、本田忠政が姫路城主となると、姫山に連なる鷺山に西の丸を造り、三の丸に居館を設けるなどした。こうして広大な縄張りを持つ、他に類を見ない城郭が出来上がった。

城はその頃から何度も補修が行われて保存されてきたが、明治時代になると全国の城が解体され、競売にかけられた。姫路城も廃城かと思われたが、天下の名城を残そうと当時陸軍大佐であった中村重遠が、山縣有朋に訴えた。

そして城は後世に保存されることになったのである。

**巧妙に張り巡らされた縄張りから難攻不落の天守閣内へ向かう**

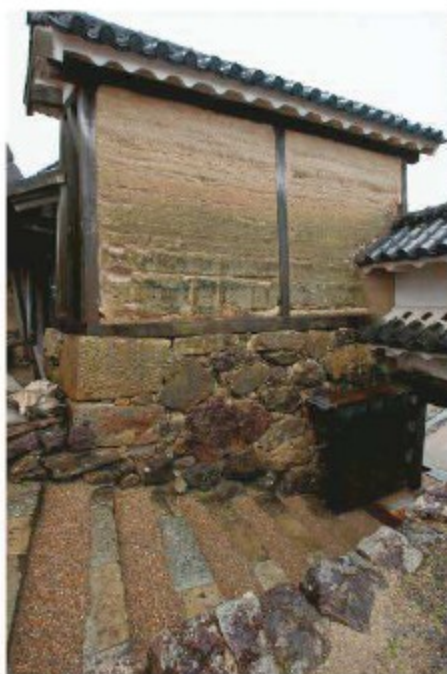
まず、天守へと近づくには多くの門

大天守最上階から西方の二の丸、西の丸を見下ろす。複雑に張り巡らされた縄張りの様子がよくわかる。新しく塗り直された屋根の目地漆喰の整然とした直線美も美しい。

をくぐり抜けなければならない。城壁の至る所には狭間と呼ばれる穴が設けられており、侵入者をどこからでも狙えるようになっている。狭間の穴を下から見上げると、思わず矢で射すくめられているような感覚に陥る。天守に近づいたと思えば遠ざかり、まるで迷路のようである。ようやく本丸である備前丸へと入ると、高さ31・5mの大天守がそびえている。大天守を囲うように乾小天守、東小天守、西小天守が並び、それぞれが渡櫓でつながった連立式天守になっている。

天守閣内部に入ると張りつめた緊張感が漂っている。静謐な空間には床板を踏みしめる音だけが聞こえる。大天守の外見は5層であるが、実は地階があり、内部は7階である。これが敵の感覚を狂わせるのである。空間の中心には2本の大柱がある。これが大天守を支えている大柱である。高さ24・6m、根元の直径95cmで東大柱は最上階の床下まで延びている。この大柱は創建当時のもので樹齢600年だったといわれるモミの木である。

「以前は鎧などの展示物を飾っていたのですが、今回の工事を機会に全て撤去しました。今後は、そのものずばり天守閣の空間を観て、感じていただきたいと思っています」

一緒に案内をしてくれた姫路観光コンベンションビューローの石田智亮さんがスマートフォンを窓にかざすと、同じ場所で火縄銃を構える武者姿の人

左上／天守閣の地下1階。左右の太い柱は天守を支える大柱である。左右の奥は武器や食糧などの貯蔵庫であった。右上／それぞれの天守閣をつなぐ渡り櫓へと続く扉もある。右中／大天守最上部の柱は全てヒノキが用いられた。右下／修理の際などに屋根に出るための扉。

左／「ほの門」の内側にある油壁は豊臣秀吉時代の遺構といわれる。右上／城内にある切り込みハギの石垣。右中／天井が極端に低い「にの門」は天井をはずして上から侵入者を攻撃できる。右下／「いの門」から縄張りは複雑になっていく。

物が映し出された。ARという技術を利用したもので、城内のポイントで当時の様子を再現したCGや映像が楽しめる。これもグランドオープン後に実施されていく企画で、往時の城の姿を知るための一助となる。

大天守を1階ずつ上がっていくと徐々に空間が狭くなっていく。床には所々新しい床板がはめ込まれている。これは今回の工事で補強されたものだ。窓の縁などにも朽ちてしまった木材に当て木が施されているのがわかる。城は長い歴史のなかで、こうして何度も修理を重ねて受け継がれてきた。薄暗い内部を進むと、ついに最上階にたどり着く。これまでの階とは打って変わって書院風の造りになっていて、開放的で明るい。全方位に窓が設けられ、窓の外には姫路の町並みが広がっている。

「今の大天守の姿が見られるのは、そんなに長い期間ではありません。自然にさらされることで漆喰なども傷んでいきます。だから今、美しい姫路城を少しでも多く目に焼きつけてほしいと願っています」

小林さんは工事を振り返りながらそう話す。窓から外を見ると目の前には生まれ変わった屋根瓦と、新たに施された目地漆喰の直線美が連なっている。眼下には張り巡らされた広大な縄張りも見えていた。そして数年が経った現在、小林さんの思い通り、白鷺城の美が人々を魅了している。

屋根瓦には歴代当主の家紋が刻まれている。池田氏の揚羽蝶や本多氏の三葉立葵が多い。「にの門」の破風上には珍しい十字の紋があり、これはキリスト教徒であった黒田孝高(官兵衛)を連想させる。

右／大天守の各階を突き抜けるように立つ東の大柱。400年前の遺構であり、樹齢600年といわれるモミの木が利用されている。下／5階にある屋根の柱には組み立てる位置が刻まれている。

城壁に空けられた丸や三角形の穴は「狭間」と呼ばれ、ここから侵入者を鉄砲や矢で狙い撃ちした。数千カ所の狭間があったが現在は997カ所が残るのみだ。

姫路城(ひめじじょう)
別名:白鷺城　築城年:南北朝時代(1346)
形態:渦郭式平山城　主な城主:黒田官兵衛、池田輝政、酒井忠邦
主な遺構:現存天守、櫓、門、塀、石垣、堀、土塁
所在地:兵庫県姫路市本町68　TEL:079-285-1146(姫路城管理事務所)
入城時間:9:00～16:00　休城日:12月29・30日
入城料:1000円
アクセス:JR「姫路駅」より徒歩20分
www.city.himeji.lg.jp/guide/castle/

右／松江城の濠を利用した「堀川遊覧船」が運航しており、それに乗れば濠から天守などを仰ぎ見ることができる。中／三ノ門跡付近から見上げた天守。左／松江城に現存する建物は天守のみ。3棟の櫓は近年復元されたものだが、当時の偉観がよく再現されている。

# 松江城

島根県松江市

国宝

慶長16年（1611）築城

## 築城当時から残る内濠を悠々と小舟が進む

２０１５年7月、国宝に指定された松江城。その本丸や二の丸を囲む堀川を小舟が静かに漕ぎ出して行く。

「この濠は松江城の築城と同時に造られました。江戸時代の絵図と比較しても、濠や町の構造は今もほとんど変わらないんです」

堀川遊覧船の船頭、片山正美さん（P41）が、のんびりした口調で話す。城郭と濠が、このように当時のまま現存する例は極めて珍しい。

「島根の名所は？」と人に問えば、やはり出雲大社、世界遺産の石見銀山ときて、その次に、この松江城を挙げる人が多かろう。いや「シジミで有名な宍道湖」という人もいるかもしれない。その宍道湖は日本海とつながり、湖水は川となって松江城の内濠、つまりこの堀川にも流れ込んでいる。城下には内濠のほかに外濠が残り、幾筋もの川が流れ、それらは昔から庶民の生活用水や水遊びの場、そして交通路としても使われてきた。こうして舟に乗ってみると、松江が「水の都」と呼ばれてきた理由がよくわかる。

「この川には16もの橋が架かっています」と片山さん。舟はその橋の下をかいくぐって進む。濠の中から見上げる松江城下は、まさに古き良き日本の風景。意外なことに木々や石垣に遮られ、天守の姿はあまり見えない。乗船して40分ほど、そろそろ一周して戻ろうかという時、左手に漆黒の天守が見えてきたが、改めてその美しさを実感した。舟を降り、その天守をめざして大手門へと向かう。太鼓櫓脇の階段、三ノ門、二ノ門を経て一ノ門をくぐると目の前に天守の姿がある。市街から見上げるのと、真下から仰ぎ見るのとでは、やはり迫力が違う。

## 宍道湖の湖水を濠に湛える国宝となった現存天守

山陰地方で唯一、現存する天守として、その名を知られる松江城。「関ヶ原」の後に築かれながら、その漆黒の外観や、極めて実戦的な構造が特徴である。織田信長の安土城、豊臣大坂城の面影を宿した、その重厚さに武士の魂を見るようだ。

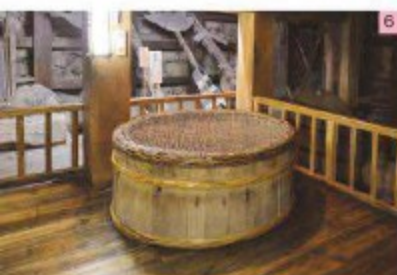
文◎上永哲矢（哲舟）　撮影◎島崎信一

# 現存十二天守の城

慶長16年（1611）に完成した天守がそのまま残る。外観は4重だが内部は地上5階、地下1階の構造。入口に平屋の附櫓があるのが特徴。高さは、本丸地上より約30m。

上／天守最上階から南に宍道湖を望む。築城者の堀尾吉晴が松江を選んだ理由は水運が発達していることが第一であった。

1／北ノ門側からは、苔むした古い石垣越しに天守が見える。2／1階附櫓にある「石落とし」と狭間。3／城内に展示された明治4年（廃藩置県の年）の廃城願い。4／屋根にあった鯱。昭和25年～30年の解体修理のとき新しいものと交換され、地階で保存中。5／芯柱に板をかぶせて頑丈にした柱が多数あって天守を支える。6／全国で唯一現存天守内に残る井戸。7／4階と5階を結ぶ階段途中の踊り場。8／城内にある意味深な階段。屋根の上に出られる構造。9／附櫓と天守1階を結ぶ通路も堅牢。

天守最上階の望楼は、四方に視界が開けた珍しい造り。遮る壁がなく、360度の眺望が楽しめるようになっている。

松江城天守の特徴。それは何といっても「黒さ」だろう。白漆喰の優雅な壁面が特徴的な姫路城や彦根城に比べ、松江城は、松本城や熊本城天守のような黒い板張りが目立ち、古武士のように武骨な外観を持つ。それでも部分的に用いられた白壁、入母屋破風や寺院形式の華頭窓などが、独特の優美な風格を生んでいる。

## 信長・秀吉の城の流れを汲む実戦向け天守の特徴とは？

「黒い壁は『下見板張り』と呼ばれ、黒煤と柿渋を混ぜた墨で塗られています。月山富田城から移ってきた、築城者の堀尾吉晴が豊臣系大名だったことも関係しているでしょうね。秀吉は金箔が映える黒色の城を好んだといいます」。そう話すのは松江歴史館学芸員・西島太郎さん。

色ばかりでなく、大坂城天守を正当に受け継いだ全国唯一の現存天守。2重2階の入母屋造りの櫓の上に2階建ての望楼（物見櫓）を載せる構造は、織田信長の安土城の流れも汲む。江戸時代の城ながら、安土桃山の伝統を継いでおり、また極めて実戦的だ。中に入るとわかるが、城内に井戸や厠（便所）まで備えたあたり、徹底的に籠城を意識して設計されたことがわかる。

「天守内に井戸がある例は極めて珍しく、現存天守では松江城が全国唯一です。地下には床板のない『穴蔵の間』があって、そこに米や塩などを長期貯蔵できるようになっていました」と西島さん。

入口は防備を堅くするために据えられた附櫓があり、最上階は「天狗の間」と名付けられ、四方すべてを見渡せる構造。結局、実戦には一度も使われなかった松江城だが、この周到さを見ていると「備えあれば憂いなし」という言葉がしっくりくる。

松江城を築いた堀尾氏は三代で終わったが、その後は京極氏、松平氏に受け継がれ、城は18万6000石の象徴であり続けた。明治に入り、櫓などは解体されたが、天守だけは地元の豪農と旧藩士が買い取り、昭和初期に松江市に寄贈されて残った。人々の思いのこもった後世への置き土産は、何度見上げても見飽きることはない。

堀川遊覧船の船頭、片山正美さん。船は堀川を約50分かけてゆっくりと遊覧。濠から眺める「水の都」の眺めはまた違った味わいがある。（1日券1230円）

もともと国宝だったが昭和25年の文化財保護法制定より重要文化財と呼称。そして2015年に正式に国宝となった。

現存十二天守の城

まつえじょう
島根県松江市殿町1-5　TEL:0852-21-4030（城山公園管理事務所）
入館時間:8:30～18:30（10月～3月は～17:00）　休館日:無　入場料:560円
アクセス:JR山陰本線「松江駅」からレイクラインバス10分、「松江城大手前」下車

福井県坂井市

重要文化財

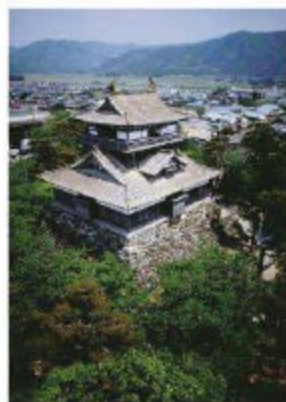
# 丸岡城

天正4年（1576）築城

## 越前平定の要となった最古級の天守

穏やかな坂井の町を見下ろす山頂に、悠然と構える武骨な丸岡城天守。越前攻略の要であったこの天守は、かつて繰り返された戦の面影を今に伝える。

### 天守や野面積みの石垣に城郭最古の建築様式を見る

天下統一を目指す織田信長にとって、北陸の平定は反抗勢力の他国に越前一向一揆も抱える有数の難関であった。そしてようやく天正3年（1575）にこの地を制圧し、右腕の柴田勝家を越前領主に置くと、その勝家は甥の勝豊を丸岡に派遣。当初、一向一揆の拠点跡である豊原寺に居を構えた勝豊であったが、翌年に「まるこの丘」と呼ばれる東方の山に城を移転する。これ

標高17mの小高い山頂に建つ丸岡城。「霞ヶ城」とも呼ばれる。一層に大きな入母屋破風を有する平山城で、石台の登り口からそのまま天守に入るという構造もこの城特有のもの。

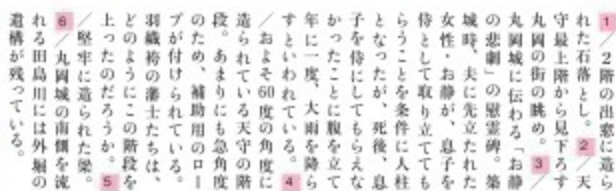
が丸岡城である。往時は二の丸や三の丸、五角形の内堀も有した丸岡城だが、廃藩後に建物の多くは解体され資材として売却、堀も埋め立てられてしまった。そのため、現在の城にかつての威容を見ることはできないが、日本最古級400年以上の歴史を刻む現存天守は、ほかの天守とは一線を画する歴史的な魅力に満ちている。

高さ12・6m、2層3階の望楼型天守は、手斧の跡が各所に見られ、武骨な印象を抱かせる板張りの建物である。

別名・霞ヶ城と呼ばれる最古の建築様式を持つ平山城。

太平の世には程遠い時代の天守であったため、鉄砲狭間や石落としといった戦への備えが各所に施され、急角度で造られた階段は訪れる者を圧倒。また、豪雪地の気候に合わせた創意工夫もなされており、天守の足場を支える石垣は最も古い工法とされる野面積み。石を乱雑に積み上げただけにも見えるが、すき間が多くて水はけが良いため、雪や豪雨に強いといわれている。さらに、天守台は石垣よりもひと回り狭く造られており、これは雨水の流入を防ぐためだと伝えられている。なお、近隣に並び立つ山などがないため俯瞰するのは難しいが、ぜひ屋根瓦にも着目してほしい。石瓦葺きの屋根は、全国の天守の中でもここだけのもの。足羽山（福井市）の笏谷石による瓦屋根は、この城の価値を高める稀有な要素である。

さて、天下の覇権が変遷する過程で丸岡城の城主の座も移り変わったが、なかでも語るべきは、慶長17年（1612）から36年にわたって領主を務めた本多成重であろう。成重は家康がまだ三河の一大名だった頃からの忠臣で、天野康景、高力清長と並び、三河三奉行と称された人物。戦では傷を負っても鬼気迫る戦いぶりを見せ、「鬼作左」の異名をとった。戦の陣中で妻に書いた「一筆啓上 火の用心 お仙泣かすな 馬肥やせ」という手紙はつとに有名。天守の東側に書簡碑が建ち、丸岡城に伝わる逸話となっている。

1／2階の出窓に造られた石落とし。2／天守最上階から見下ろす丸岡の街の眺め。3／丸岡城に伝わる「お静の悲劇」の慰霊碑。築城時、夫に先立たれた女性・お静が、息子を侍として取り立ててもらうことを条件に人柱となったが、死後、息子を侍にしてもらえなかったことに腹を立て、年に一度、大雨を降らすといわれている。4／およそ60度の角度に造られている天守の階段。あまりにも急角度のため、補助用のロープが付けられている。羽織袴の藩士たちは、どのようにこの階段を上ったのだろうか。5／堅牢に造られた梁。6／丸岡城の南側を流れる田島川には外堀の遺構が残っている。

まるおかじょう
福井県坂井市丸岡町霞町1-59TEL:0776-66-0303（霞ヶ城公園事務所）
入館時間:8:30～17:00
入場料:大人450円
アクセス:JR北陸本線「芦原温泉駅」より京福バス長屋線で約20分「丸岡城」下車

愛媛県宇和島市

重要文化財 慶長6年（1601）築城

# 宇和島城

## 戦国期を経て泰平の世に修築
## 海を望みつつ静かに佇む孤高の城

「凝然と青い空を支えていて、その孤独さは悲痛なほど」。司馬遼太郎は宇和島城の姿を評してそう書いた。築城の名手といわれる藤堂高虎が築いた海城をもとに伊達家二代目が再建した天守は、今も往時のままに美しい。

文◎秋川ゆか

### 不等辺五角形の城郭は敵をあざむく築城術の精華

城は宇和島市の中心部の小高い丘に建っている。第二次世界大戦中、幾度となく空襲を受けた市街には城下町の面影はほとんどない。そして天守だけが城山の鬱蒼とした緑の頂上に往古の姿を見せている。

江戸時代の新田開発で埋め立てられるまで、宇和島は深い入り江になっていた。城の総郭の西側半分が海に接し、東側は海水を引き込んだ濠が囲む海城だったという。縄張は不等辺五角形。

宇和島の港を間近に、市街地の丘にそびえる天守。かつては城山の左側麓は海になっていた。瀬戸内の水軍との深いつながりも感じさせる立地である。

# 現存十二天守の城

この特異な形状は築城の名手といわれた藤堂高虎の設計によるものだ。

在地領主が築いた中世山城・丸串城の地に、秀吉から宇和郡7万石に封ぜられた藤堂高虎が入城したのは文禄4年（1595）のことだ。高虎は6年間かけて濠を造り石垣を回し、天守以下大小数十の櫓を持つ強固な城郭を築いた。五角形の縄張「空角の経始」は、敵に四角形と錯覚させて、残る一辺を出撃口や物資の搬入口とする策だ。また天守からは原生林を抜ける間道がいくつもあり、海岸の舟小屋や水軍基地にも通じていたともいわれている。本丸の岩盤の上には複合式望楼型の天守が建っていた。

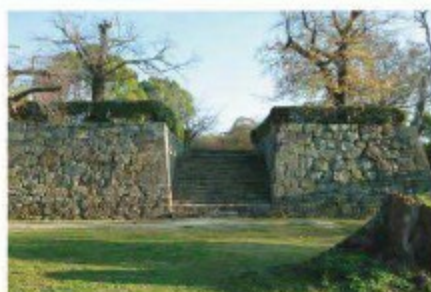
高虎が宇和島城の完成と同時に今治に移封した後には、伊達政宗の子・伊達秀宗が入城した。以後、明治維新まで伊達家の居城となる。そして八代藩主・伊達宗城は藩内改革や殖産興業を進め、島津久光、松平春嶽、山内容堂とともに「幕末の四賢侯」に数えられた一人だ。

現存する天守は二代伊達宗利が1662〜71年に城全体を改修した際に建て替えたものだ。装飾性の高い破風や懸魚がちりばめられた外観はいかにも格式高い。窓の下に鉄砲掛けは設けてあるが、石落としや狭間はない。軍備の必要性の薄れた泰平の時代らしい造りといえよう。

周囲の櫓や門はすべて失われている。国宝であった追手門は焼け、濠はみな埋められた。天守のほかに現存するのは搦手口にある上り立ち門だけ。どちらもよくぞ残ったものである。

天守へと向かう登城道の風情も見どころだ。400種を超える樹木が茂る中に、苔むした石垣が見え隠れする幽玄の世界。野面積み、打ち込みハギなど石の積み方も様々である。高虎の時代の遺構も見える。そして本丸に上がれば視界は大きく開け、天守から眺める宇和島の海が美しい。

上／本丸跡に天守だけが残る。独立式層塔型、3層3階総塗籠式の天守は高さ約15.7mと小ぶりながら、各重に配した千鳥破風、唐破風も美しい。1860年と1960年に大修理を施しているが、姿は築造時のまま。下右／1階武者走り。頭上の梁には1860年に行われた大修理の際の人名や材料などが記録されている。下左／2階の武者走り。障子戸があるのは、ほかの天守では見られない造りである。平和な時代らしく、身舎に光を入れるためだったとされている。

下右／南登城口城門である上り立ち門。天守以外で唯一現存する遺構だ。薬医門形式の切妻。戦前には追手門もあったが空襲で焼失した。下中／石段、石垣とも苔むし、樹木に覆われた登城道。ここから井戸丸、二の丸と上がっていくと、天守が見えてくる。下左／この櫓形門（一の門）を上がれば本丸に出る。土塀は失われている。

うわじまじょう
愛媛県宇和島市丸之内1　TEL:0895-22-2832
開館時間:9:00～17:00（10月～3月は～16:00）　休館日:無　入場料:200円
アクセス:JR予讃線「宇和島駅」より徒歩約25分
問い合わせ先:宇和島市観光物産協会　TEL:0895-22-3934

　写真提供◎宇和島市教育委員会

# 松山城

愛媛県松山市

重要文化財 慶長7年（1602）築城

## 勇猛な戦国武将が築城した実戦さながらの城構えと連立式城郭の比類なき美

賤ヶ岳七本槍の ひとり、加藤嘉明が城造りの情熱を注いだ松山城は、標高132mの勝山山頂に築いた、連立式天守を持つ平山城である。珍しい登り石垣に象徴される、戦いへの飽くなき備えを見よ。

文◎阿部文枝　撮影◎遠藤純

右／松山城からは三津浜、港山城跡の方角を望む。中／松山城の連立式天守。各隅櫓の一部は木造復元だが、天守は江戸時代の姿を留めている。左／天守最上階の内部。

### 丸25年の歳月をかけて築城した壮大な平山城

堀端から仰ぎ見ると、松山城の天守は遠い天空にある。標高132m。勝山の山頂に白壁と黒い腰板の天守や小天守が小さく見える。中腹の二之丸と共に天守が織り成す城の造形はとてつもなく力強い。

「現在よりも大きな堀、土塁、石垣……。松山城は一大名が築いた城としては壮大な平山城です」と松山市の学芸

案内人 森 正経 もり・まさつね

1951年、愛媛県東温市生まれ。國學院大學文学部卒業。専攻は近世史。78年、学芸員として松山市に入庁。松山市立子規記念博物館、坂の上の雲ミュージアムの設立に携わるなど、松山市の文化事業に尽力する。2004年より3年間、松山城担当の学芸員となり、2012年春、松山市を退職。現在は実家である東温市・三奈良神社の宮司のかたわら愛媛大学でも教鞭をとる。

左／松山城を築城した戦国武将、加藤嘉明の騎馬像。兜に輝くのは、蛇の目紋。右／天守に展示されている松平家九代・定国の書。落雷による焼失で天守を失った後の心境を、五言絶句で表した。

員を長年勤めた森正経さん。築城には経始（縄張り＝設計）、普請（土木工事）、作事（建築工事）の3要素が必要だが、すべてに優れたバランスのよい城としては、松山城が現存十二天守のなかでも一番であろう。

この広大なる平山城を築城したのは加藤嘉明。羽柴秀吉と柴田勝家が戦い織田勢力を二分した「賤ヶ岳の戦い」で秀吉につき浅井則政を討ち取り、嘉明は後世に「賤ヶ岳の七本槍」の一人と呼ばれるようになる。父・教明は三河一向一揆に際して一揆側に属し、三河を出奔。秀吉の死後、嘉明は徳川家康に接近し、関ヶ原の戦いで奮戦。家康の許可を得て慶長7年（1602）に城造りに着手した。

「幕府による天下普請の城ではない。丸25年の歳月をかけてコツコツと造り上げた。おたたさんという、魚売りの女性たちが石などを頭に載せて運び、普請を手伝ったという逸話が残っています」

そこには嘉明を見出した豊臣秀吉の城造りに似て、馬子から身を興した人間の城への憑かれたような情熱があったのかもしれない。

「本丸に行く前に見てほしい」と教えられ、まず向かったのは南側の県庁裏登山道。山道を少し登ると山麓から本丸に向かって、斜面を這うように「登り石垣」が延びている。総延長230ｍ。「敵の侵入を防御するための石垣です。

現存十二天守の城

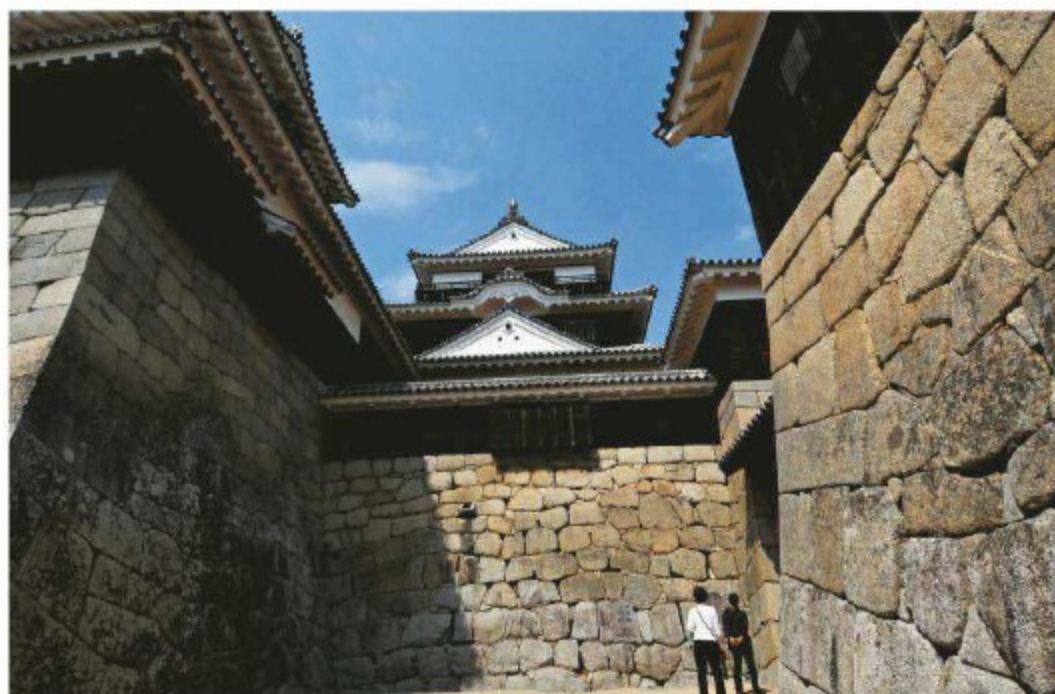
朝鮮の倭城で使った石垣と似た造りで、日本の城では彦根城、洲本城にもありますが、松山城の登り石垣が最大規模です」

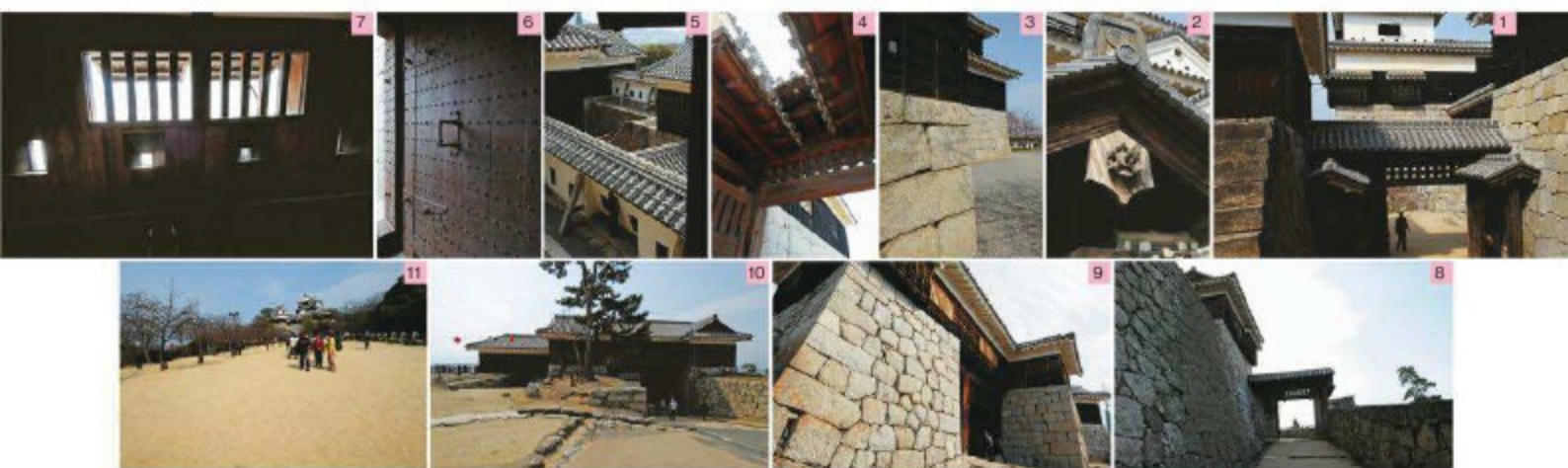
　中世の山城を思わせる高さといい、珍しい登り石垣といい、戦闘への備えが強く現れている。

「当時はまだ、秀吉の前に伊予を支配していた河野氏の残党もくすぶって、本拠地である道後の湯築城と緊張関係にありましたから」

　そのような緊迫した状況を勇猛で知られた嘉明はむしろ楽しんでいたのではないか。腕を撫して城造りに邁進していたに違いない。

　本丸には往時と同じく、二之丸脇の黒門跡から本丸の大手門跡を目指す。20分ほど登って、大手門跡、戸無門、筒井門を抜けると、ようやく本丸の中に入る。ここで天守が正面に見えてきた。天守や隅櫓を渡櫓で結んだ連立式城郭である。天守は三代藩主・松平定行が寛永19年（1642）に改築している。

「5層だったのを3層に直したといわれていますが、言い伝えだけでよくわかっていません。今の天守は松平氏が

虎口から仰ぎ見る天守の威容。黒船来航翌年に落成した江戸時代最後の完全な城郭建築である。

1／本壇入り口を守る重要文化財の一ノ門。2／三つ葉葵紋の屋根瓦。3／二ノ門を入ると二つの建物の腰板の線が一本に見えて直進しそうになる。4 5／筋鉄門では屋根の上から攻撃できる。6／米蔵（穴蔵）の扉は鉄板で補強。7／矢狭間と鉄砲狭間が並ぶ渡櫓。8／本丸の最初にある戸無門。9／筒井門の隣には奇襲のために使用する隠門がある。10／本丸櫛からの筒井門と隠門。11／広々とした本丸広場に出る。

左2点／最後の藩主・松平勝成・定昭父子が新政府に恭順の意を表した「赤心報国」の書。観光用の入口（穴蔵）は、本来階段はなく落城時に藩主が自害するための場所だった。

右から／籠城の備えまたは防火のために設けた大井戸跡。二之丸は松平四代目までの住居だった。現在は二之丸史跡庭園として公開。二之丸の堀越しに見た山上の天守。二之丸付近に残る石垣。

造った徳川の城です」

徳川の城の証のように、天守の瓦には葵紋が入っている。現存天守では松山城だけだ。松平家九代藩主・定国は八代将軍・徳川吉宗の孫であり、御三卿・田安家の出身。幕末に再建した時に徳川家との関係を誇示したと考えられる。

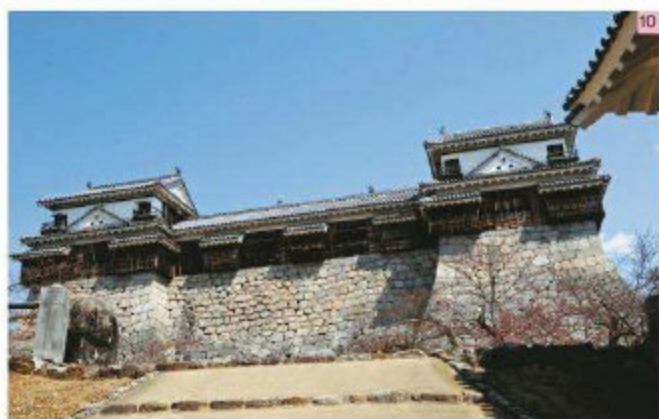
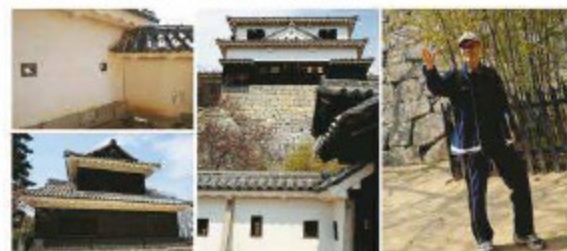
さて、いよいよ天守の中に入ろう。森さんは天守ではなく、北隅櫓へと案内してくれた。隅櫓は展示物もなく、がらんとしている。

「南北の隅櫓には天守最上階と同様に高覧や、格式が高い長押(なげし)がある。重要な建物ではないか」と言う。隅櫓を小天守、小天守を二重櫓と書いた古図があるそうだ。「城の正面はどこか、考えてみると面白い」と森さんが悪戯っぽく笑った。なるほど。言われてみると、本丸広場から見るよりも、南北隅櫓から眺める天守の方が、すっきりと美しく見える。南北隅櫓のある搦(から)め手側は観光客の姿も少なく、連立式城郭の美をじっくり観賞できる場所となっている。

「城の中に身を潜ませながら〝私の城〟をどう探すか。自分の物語を創るのが城の醍醐味といえる」

ここも隠れ家のような場所と案内してくれたのが本丸の石垣の下。人影のない道を歩きながら石垣を見上げると、その美しさに驚かされた。松山城では、戦に備えた城の美のツボを〝私の城〟のように探し歩きたい。

右／登り石垣。本丸・二之丸間を寄せ手から防御するため、万里の長城のような石垣を南北に造った。加藤嘉明が朝鮮で築いた安骨浦倭城の石垣をまねる。左／本丸を支える屏風折れ石垣が美しい。

1／北隅櫓の戸を開ける案内人の森さん。2／狭間を見て遊ぶ子供。3／屋根瓦の向こうに天守が見える連立式の面白さ。4／連立式櫓の遠くの森は松山総合公園。5／北隅櫓から屋根瓦越しに南隅櫓を見る。6／狭間には築城時から蓋が付いていた。7／城では「裸足で歩き、床に寝転がると新たな発見がある」と森さん。8／図面以外にも消失した北隅櫓跡から出土した刀剣類。藩主のものと思われる。隅櫓の重要性を実証している。9／天守への玄関を内側より見る。10／北隅櫓(左)と南隅櫓(右)の華麗なるシンメトリー。中央の十間廊下の向こうに天守の鯱が見える。

右／城下町案内人・小宮政雄さん。中／右に写る紫竹門は搦め手を守る重要な門。内側と外側(左上)の両方で対処できるように、内外2種類の狭間が作られている。左下／築城時から残る野原櫓。日本で唯一現存する望楼型二重櫓は古い天守の原型ともされる。

まつやまじょう
愛媛県松山市丸之内　天守見学時間:9:00～17:00(8月は～17:30 、12月～1月は～16:30)
※入場は閉門30分前まで　休館日:12月第3水曜　天守観覧料:510円
アクセス:JR「松山駅」より伊予鉄道市内電車・道後温泉行きで「大街道電停」下車、徒歩約5分
問い合わせ:松山城総合事務所　TEL:089-921-4873

高知県高知市

重要文化財

慶長16年（1611）築城

# 高知城

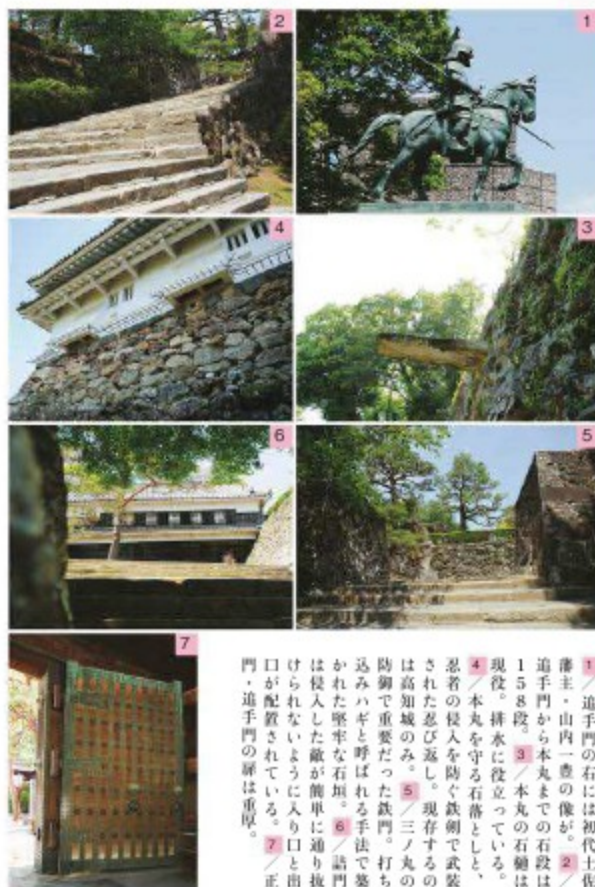
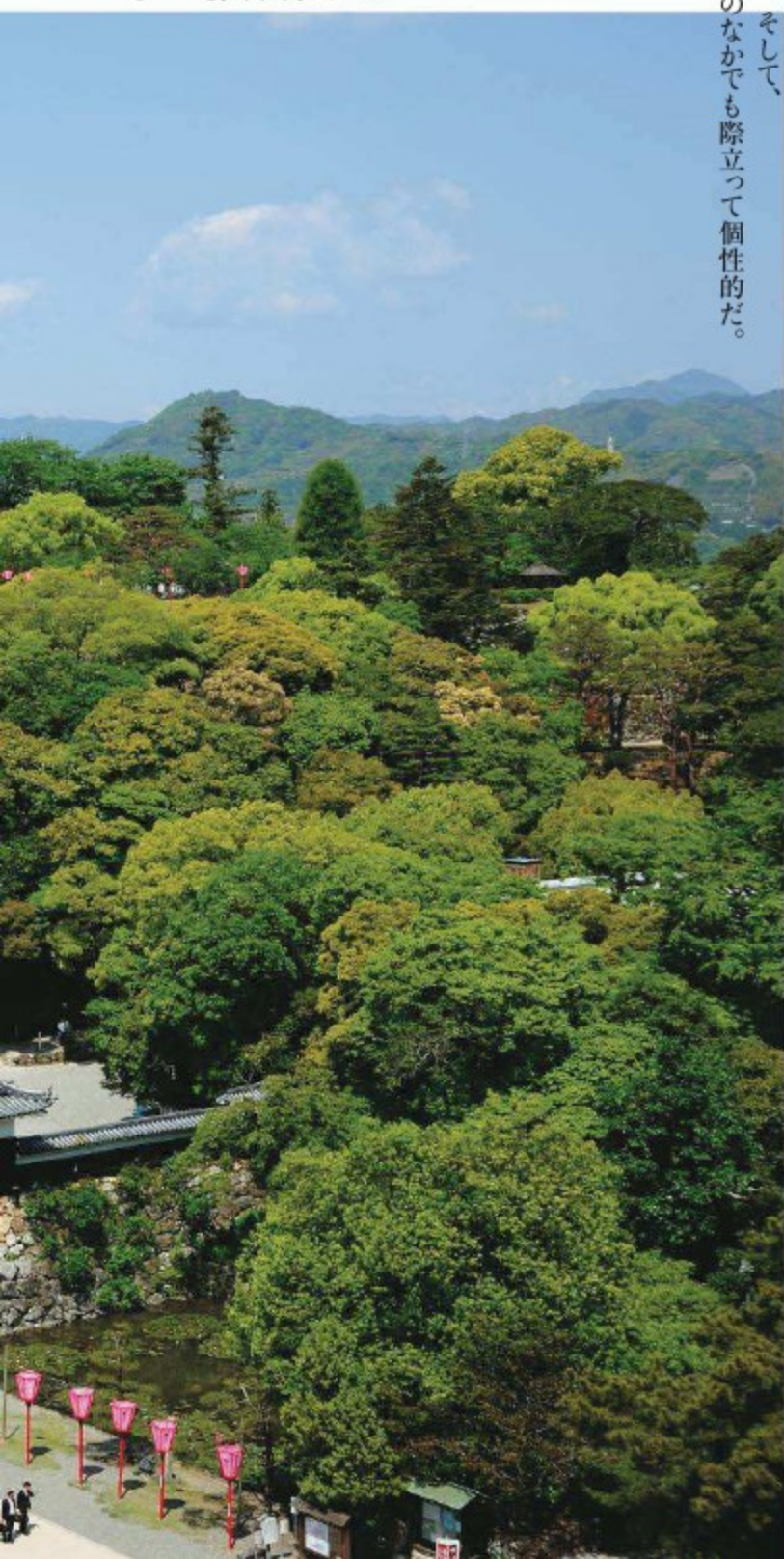
## 堅い防御と心地よい開放感を併せ持つ南国土佐の名城

関ヶ原の戦いの功績によって土佐24万石を与えられた山内一豊が築城した高知城。日本で唯一、本丸の建築群がすべて現存する四国の名城だ。堅固な防御と雨の多い気候への工夫、そして、南国ならではの開放感は、現存天守のなかでも際立って個性的だ。

文◎浅川俊文　撮影◎目黒 MEGURO.8

### 高低差40mの天守閣へ攻め登る気分を堪能

日本で唯一、本丸の建築群がすべて残っている城郭、高知城。高知平野のほぼ中央に位置する大高坂山（標高44・4m）の上に築かれた梯郭式平山城は、江戸時代と変わらない美しい姿で、街を見下ろしている。

関ヶ原の戦いの功績で遠州掛川から

1／追手門の右には初代土佐藩主・山内一豊の像が。2／追手門から本丸までの石段は158段。3／本丸の石樋は現役。排水に役立っている。4／本丸を守る石落としと、忍者の侵入を防ぐ鉄剣で武装された忍び返し。現存するのは高知城のみ。5／三ノ丸の防御で重要だった鉄門。打ち込みハギと呼ばれる手法で築かれた堅牢な石垣。6／詰門は侵入した敵が簡単に通り抜けられないように入り口と出口が配置されている。7／正門・追手門の扉は重厚。

入国した山内一豊は、地の利の良いこの地を城地に定めた。当時、周辺には湿原が広がり、鏡川や江の口川の水害に悩まされた。慶長6年（1601）に始まった工事は難航するが、10年の歳月をかけてほぼ全容が完成する。その後、享保12年（1727）に一部の建物を残し焼失するものの、20年以上かけて復興を遂げ、今に至っている。

「高知城は約40mの高低差があるので、天守閣へ向けて攻め登る気分を味わいながら、散策することができますよ」

高知県教育委員会事務局文化財課の中内勝さんの案内で、堂々たる構えの追手門（写真中央）をくぐる。天守閣は遥か上にそびえている。決して大きくはないが、人を寄せ付けない威圧感を放っている。

石段を上っていくと、その幅が一様ではない。上りにくく下りやすいようにわざと変えてあるのだという。こうした防御のための工夫はその後、随所に見られるのだが、敵からの防御と同様に施されているのが「雨仕舞い」、すなわち雨からの防御。降雨量の多い高知ならではの工夫である。

城内には多くの水路が設けられ、石垣から飛び出した石樋で排水するようになっている。土佐漆喰は硬くなるよう稲藁をつなぎに使い、塗り方も押し込めるように塗られている。石垣も崩れにくく排水能力の高い野面積みが多く採用されている。

そんな細部のこだわりを見ながら杉ノ段を過ぎ、鉄門跡へと上っていく。堅牢な石垣の残る鉄門跡を抜け、階段を越えると右手前に三ノ丸、右手に二ノ丸、左手に本丸と天守閣が迫ってくる。そして、真正面には数段の石段越しに黒塗りの詰門がそびえている。

　ここから天守閣を目指すには、詰門を通るよう誘導されているが、門への石段を上ると三方から矢と鉄砲が見舞われるようになっている。しかも門は、簡単に通り抜けられないよう入口と出口の扉の位置が筋違いに設置されている。天守閣を仰ぎ見れば、石を中から落とせる石落としや、忍者の侵入を防ぐ忍び返しの鉄剣がぐるりと張り巡らされていて、この城の防御の堅さを実感した。

　詰門は二ノ丸と本丸をつなぐ役割を果たしていて、2階にある廊下を通って本丸へとたどり着けるようになっている。その廊下を抜けると、高知城最大の見どころ、本丸が目の前に飛び込んできた。不思議なことに、上ってきた時に感じた威圧感がほとんどない。落ち着いた雰囲気の大入母屋の本丸御殿、花びらの装飾が施された天守閣の懸魚など、日本建築らしい繊細な佇まいが美しい。「ようこそ、本丸へ」と迎えられたような感じさえする。

「本丸の外からと中からでは、天守閣の見える雰囲気が全然違う。これも高知城の面白さです。そんな天守閣をはじめ本丸がすべて残っていることが素晴らしい。造った人、今に伝えてきた人に感謝したいですね」

　高知の宝を前にした中内さんの顔も自然とほころぶ。本丸御殿へと入ると、初夏の日差しが差し込み、暖かな風がそよいでいて気持ちがいい。天守閣の階段を上り、最上階へとたどり着くと、鮮やかな新緑と賑やかな高知の街並みが広がっている。吹き抜ける心地よい風と光に、ここは南国なのだと改めて感じた。

「高知の人はおおらかで、開放的な気質、そして酒と議論が大好きです」

　そう言って笑う中内さん。城もまた同様。望楼には土佐のおおらかさ、開放感があふれている。南国の明るい気質に触れた気がした。

破風の懸魚には漆喰で作られた美しい花びらが。職人の技術の高さを物語る。

高知城を案内してくださった中内勝さん。生粋の土佐っ子で、高知城について語る言葉に城への愛情がにじむ。

# 現存十二天守の城

1／青銅製の鯱。大暴風雨で2度墜落。2／黒鉄門。その名のとおり扉は黒い鉄で覆われている。3／雨に強い土佐漆喰。稲藁のスサを醗酵させ石灰と練り合わせることによって硬くしている。4／本丸御殿・懐徳館の玄関。右へ進むと正殿、左へ進むと天守閣へ。5／書院造に欠かせない上段の間。他の部屋より床が一段高く、藩主が座った。6／本丸から見た本丸御殿と天守閣。大入母屋とその上の唐破風、黒漆で塗られた高欄が特徴的。7／天守閣らしく階段は急。8／上層階を支える下層階の柱や梁は太い。9／波の透彫欄間。高知らしく黒潮の波がモチーフ。名工・武市高明の作と伝えられている。10／矢狭間塀。穴から弓矢を放って敵を駆逐する。11／格調高い上段の間の格天井。12／敵兵全体の動きを見るために造られた物見窓。現存するのは高知城のみ。

天守閣の最上階から望む高知港方面と、光と風が吹き込む開放的な最上階の室内。望楼の高欄は贅沢な漆塗りだ。

こうちじょう
高知県高知市丸ノ内1-2-1　TEL:088-824-5701(高知城管理事務所)
入館時間:二ノ丸以下は終日立ち入り可能。9:00～17:00(天守・懐徳館)※通常・入場は16:30まで
入場料:二ノ丸以下無料。天守・懐徳館は18歳以上420円
アクセス:JR土讃線「高知駅」より路面電車(とさでん交通伊野線)10分、「高知城前」下車

# 丸亀城

香川県丸亀市

重要文化財　万治3年（1660）築城

## 日本一の高さを誇る巨大な石垣と最小天守

讃岐国の拠点として、長い年月をかけて築き上げられた亀山の城。技術の粋を集めた美しい石垣に小さな天守が凛と佇む。

右／京極高和の肖像画（部分、丸亀市立資料館蔵）。敷地内にある資料館では京極家ゆかりの品を多数展示。下／寛文年間に城を改修した際に、幕府に提出したとされる丸亀城木図（市指定文化財）。こちらも資料館に所蔵されている。

万治3年（1660）に完成した高さ約15m、3層3階の木造天守。唐破風や千鳥破風の意匠が目を引く。丸亀城は石垣の高さと、その美しさから、日本城郭協会によって「日本の100名城」に選出。

## 山をそのまま生かした迫力ある石垣が見る者の目を奪う

大手門から城を仰ぎ見ると、その堂々たる姿に圧倒される。丸亀城は、標高66mの亀山の山麓から山頂まで、幾重にもわたって積み上げられた日本一の高石垣が最大の見どころ。「扇の勾配」と称えられる曲線が美しく、二重三重の螺旋を描いて天守へとつながっている。また、打ち込みハギや切り込みハギ、野面積みなど、石積みの方法も多彩。最も多いのは打ち込みハギで、石と石の隙間に小石を詰めているのが特徴だ。さらに石垣の出隅部分は算木積みによって整然と組まれており、石垣をより堅固なものにしている。部分的な石垣の違いを見比べてみるのも一興だ。現在、城周辺は公園として整備され、ジョギングや散歩を楽しむ地元住民の憩いの場となっている。

かつて豊臣秀吉に讃岐15万石を与えられた生駒親正は、高松城を本城としていた。そして慶長2年(1597)、さらに西讃岐を押さえるため、支城として築き始めたのが丸亀城である。しかし、元和元年(1615)に一国一城令が下されると、丸亀城は一度廃城となった。その後、寛永17年(1640)に生駒氏がお家騒動によって転封されると、丸亀藩が新しく立藩。入封した山崎家治が、丸亀城の大改修に着手することになる。丸亀城の代名詞である石垣は、築城技術が成熟した山崎氏の時代にほとんどが築き上げられた。生駒氏の時代は安山岩が用いられたが、山崎氏はより質の高い花崗岩を使用。瀬戸内海の本島などの石切り場から石を運んだのではないかと推測されている。残念ながら、跡継ぎに恵まれなかった山崎氏は改易となるが、代わって京極高和が当地へ。数十年の間、目まぐるしく城主は変わったが、万治3年(1660)に城は現在の形に整えられた。そして、明治時代まで七代にわたって、京極氏の居城として歴史を刻むことになる。

明治時代になると、役目を終えた城は再び廃城となった。明治9年(1876)頃には、天守や大手門を除いて、櫓や城壁などの建物が取り壊され、敷地内は陸軍の歩兵第12連隊駐屯地として利用されることになる。しかし、大正8年(1919)に丸亀市が城周辺を公園として整備すると、城は市民が集う公共の場へと変わっていく。敗戦まもない昭和25年(1950)には、天守閣の解体修理を記念して、第1回丸亀お城まつりが開催された。それ以降、平和を象徴するように毎年まつりが行われている。

天守に入ると、讃岐平野と瀬戸内海のすがすがしい絶景が広がる。城主たちはこの風景を眺めながら、それぞれどんな想いを抱いていたのだろうか。

右／街の中心部に位置する丸亀城。空から眺めると、本丸、二の丸、三の丸にわたって石垣が3～4段に積まれている様子がわかる。左／寛文10年(1670)頃に完成した大手一の門から天守を望む。櫓内にある太鼓で時刻を知らせていたため、太鼓門とも呼ばれる。上／長方体の石を交互に積み上げた算木積みの石垣が曲線を描く。

まるがめじょう
香川県丸亀市一番丁　TEL:0877-22-0331(丸亀市観光協会)
入館時間:9:00～16:30(入館は16:00まで)
休館日:無　入場料:大人200円、小人100円
アクセス:JR予讃線「丸亀駅」より徒歩10分

岡山県高梁市

重要文化財

天和3年（1683）築城

# 備中松山城

## 備中国を統治する難攻不落の天空の城

現存天守のなかでは、最高所に建つ日本三大山城のひとつ、備中松山城。山陽山陰の戦略上の拠点となった城の長い歴史は中世の砦に始まる。

文◎秋川ゆか

右／天守とともに築かれた二重櫓も現存。2層2階建ての櫓造で、南側入り口は天守裏、北の入り口は後曲輪に通じている。左／三の平櫓東土塀は1683年に水谷勝宗が修築した時のまま。丸い筒狭間と四角い矢狭間が並ぶ。

天然の岸壁と石垣からなる大手門櫓跡。大河ドラマ「真田丸」のオープニング映像にも使用された。

1／豪壮な梁を見せた大広間。壁には連子窓が並ぶ。2／天守内には長さ1間幅3尺の囲炉裏がある。煮炊きや暖房用として籠城に備えたもので全国でも珍しい。3／天守1階の「装束の間」は、籠城時の城主一家の居室。床下にすき間なく石を埋め、忍びなどの侵入を防いでいる。落城の際の自決の場でもある。

左／小松山の山頂に建つ2層2階建天守。西側には半地下の付櫓が附属している。高さは約11mと、現存天守のなかでは最も低いのだが、大ぶりの唐破風を持ち、独特の安定感がある。

# 現存十二天守の城

## 備中の覇権をめぐって争奪の歴史を展開した山城

備中松山城は典型的な山城だ。高梁市の市街地北端にそびえる臥牛山には大松山、天神の丸、小松山、前山の4つの峰がある。かつてはこの臥牛山全体に21丸の砦が展開していたという。本丸は標高約430mの小松山の頂。現存天守を持つ唯一の山城である。

城の歴史は鎌倉時代までさかのぼる。備中国のほぼ中央に位置し、国を南北につらぬく高梁川の中流でもある交通の要衝に、相模出身の豪族・秋庭三郎重信が砦を築いたのは延応2年（1240）。その後の戦乱の世、城主は高橋氏、秋庭氏、上野氏、庄氏、三村氏と移り変わり、城塞の強化も進んだ。

やがて〝備中兵乱〟によって三村氏は滅び、備中を支配した毛利氏も関ヶ原の戦いの後、後退。次いで小堀正次・遠州父子が備中国奉行として城を守った。そしてさらに城主は池田氏、水谷氏と変わる。現在残る天守は、天和3年（1683）に二代・水谷勝宗が築城したとも、1600年頃に遠州が建てたものを勝宗が改修したともいわれる。

水谷氏は三代で家が絶え、領地は没収された。この時、受け取り談判に乗り込んだのが赤穂藩の大石内蔵助だ。その7年後に赤穂藩もお家断絶となり、大石らの討ち入りに至るのはなんとも皮肉な巡り合わせだ。

駅前から出る乗合タクシーは、8合目のふいご峠（シャトルバス運行日は下の駐車場に自家用車を駐車してバスを利用）までしか上がらない。後は古びた石段の登城道をひたすら歩く。約20分の道のりだ。山裾の登山口からも行くことができる。それだと急坂を1時間は登ることになるが、途中には談判に向かう大石が休んだと伝わる腰掛け石も残っている。

高い石垣に囲まれた三の丸を過ぎ、二の丸に入るとようやく二重櫓を控えた天守が見えてくる。大きく広がった唐破風や壁を覆う連子窓が美しい。外観は三重だが内部は2階建。1階には大きな囲炉裏や「装束の間」、2階にはご神体を祀った「御社壇」がある。

この険しい山頂まで日常的に登城するのは困難なことだ。江戸時代の松山藩では麓に「御根小屋」を設けて政務の場にしていたという。天空の山城は秋から冬の早朝、雲海に包まれる。その幻想的な風景は、中世の昔から今もなお変わらない。

びっちゅうまつやまじょう
岡山県高梁市内山下1　TEL:0866-22-1487　開館時間:9:00～17:30(10月～3月は～16:30)
休館日:12月28日～1月3日　入城料:300円
アクセス:JR「備中高梁駅」より乗合タクシー(要予約)で「ふいご峠」下車、徒歩約20分
問い合わせ先:高梁市観光協会　TEL:0866-21-0461

　写真提供◎高梁市観光協会、高梁市教育委員会

青森県弘前市

重要文化財　文化8年(1811)築城

# 弘前城

## 津軽家十二代の歴史を物語る総構えの壮大なる名城

現存天守の中で最北端に位置する弘前城。広大な城内には築城時の縄張や郭、城門が今も残る。藩祖・津軽為信は何ゆえこの壮大な城を構えたのか。津軽の人々がしたたかに生き抜いてきた歴史に思いを馳せる。

文◎阿部文枝　撮影◎須貝智行

本丸石垣の上に建つ弘前城の天守。小ぶりながら、どっしりとした風格を感じさせる天守だ。濠に面した南側・東側は本丸側と違い、切妻破風と矢狭間の華やかな意匠が施されている。窓が無く、石垣の上に石落としの張り出しが見える。弘前城は別名・高岡城、鷹岡城。東北地方で唯一の現存天守である。

左・右上／南側にある追手門。築城時は搦手だったが、四代藩主の時から大手口に。ほかの城門と同じく江戸初期の建造とされる。天守と城門の屋根には鯱が載る。右下／城門の扉には鉄製の金具。堅牢な造りである。

# 現存十二天守の城

弘前藩は当初4万5千石。家格から考えると破格といってよい規模の城である。雪深い北の地にこの壮大なる城を構想した人物は初代藩主である津軽為信だ。元は大浦氏といい、当時、津軽を支配していた南部氏に反旗を翻して独立に成功した。これがもとで、南部と津軽の不仲は今に至るまで続いているともいわれる。

為信は南部氏との抗争の一方、いち早く豊臣秀吉に認められ所領を安堵された。関ヶ原の戦いでは東軍につき、二代藩主・信枚が徳川家康の養女を正室に迎え、天海大僧正と師弟関係を結ぶなど、徳川幕府の時代になっても外交努力を重ねた。

「中世以来の支配基盤を持つ南部家に対し、津軽家は成り上がり者の小藩。それで、事あるごとに自らの存在をアピールしようとしました」

津軽家が幕末まで津軽一国を支配できたのは、津軽の地理的なポジションが大きい。古くはアイヌ、その後はロシアという北方勢力の脅威に対する国防の拠点としての役割を強調できた。また、南部、伊達など東北地方の外様大藩に北から睨みを利かす存在でもあった。壮大な総構えの城は分不相応だったわけではない。

「津軽人の気質もあるでしょう。『津軽の三ふり』といって見栄を張ったんです」と案内人は多少の自虐も込めて語る。ちなみに三ふりはえふり（いい

## 東北唯一の現存天守は 江戸時代後期の建造

豊かな水をたたえる外濠、その内側に巡らせた土塁。弘前城で最初に目にしたのは穏やかな静の風景であった。土塁は東日本に多い、古い時代の城郭の特徴だ。水と土と草木が織りなす素朴な城周りは、最北端の現存天守・弘前城に似つかわしい。

土塁上に植えられた桜が満開になる頃、城は大勢の観光客で賑わう。

「弘前城のソメイヨシノは明治維新後に旧藩士が植えたもので、江戸時代は松の木が多い城でした」

と言うのは案内人の弘前市観光振興部の宮川慎一郎さんだ。華やかな桜でなく松の緑。土塁の城にはふさわしい色彩かもしれない。

南側中央にある追手門から城内に入った。三の丸、二の丸と進む。

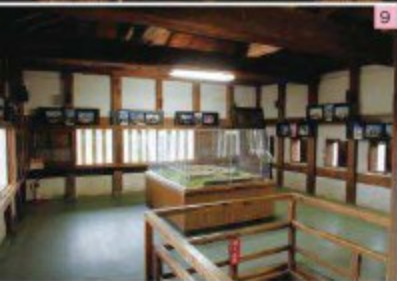
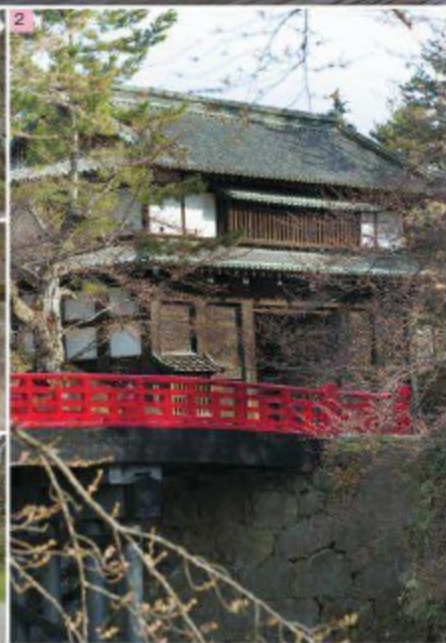
弘前城は本丸を二の丸が囲み、さらにその外を三の丸で囲む、梯郭式の平山城である。史跡の総面積約15万坪の広大な敷地には、6つの郭、3櫓、5城門が現在も残り、その周りを3重の濠が囲んでいる。築城当時の縄張りをほとんどそのままの状態で残している、全国でも珍しい城郭である。城外に目を転じると、町の東側を流れる土淵川、西の岩木川。北東には八幡宮を置き、南には南溜池、南西には長勝寺構を配置した。見事な総構えの城である。

格好しい）、あるふり（無いのにあるふりをする）、おべだふり（知ったかぶり）。寡黙のイメージがある津軽人の意外な素顔である。

町割は一代の英雄・為信によって慶長8年（1603）に始まり、二代・信枚に引き継がれ、弘前城は慶長16年（1611）に完成した。

その城跡を三の丸、二の丸と歩いて、ようやく天守を一望できる内濠端に着いた。赤く塗られた下乗橋から桜の枝越しに天守が見える。

本丸だけは土塁でなく石垣に囲まれている。天守は本丸の南東の隅。切妻

桜の開花は例年4月下旬から5月上旬頃である。

1／下乗橋から見た弘前城天守。ここからの天守の眺めが城内で最も美しいとされる。2／杉の大橋から見た南内門。二の丸南側の枡形にあり入母屋、木瓦・銅瓦葺き、鯱付き。これも築城時からの城門で重要文化財。3／本丸入り口にある亀石を含む石垣。向かいに鶴の松もある。4／城内にあるベンチの中で一番古い、大正時代に造られた石のベンチ。脚の部分にタイルが張られている。5／二の丸にある庭園跡。明治時代に料亭があった。弘前城は明治維新後、様々に活用されたが、現在は元の城郭に近い状態に戻されている。6／天守を本丸側から見た外観。白漆喰塗り籠めの外壁に灯り取りの連子窓が見える。7／天守三層の屋根の連なり。8／天守1階にある石落とし矢狭間。9／天守最上階の内部。かつては弘前城の模型や全国各地の城郭の写真が展示されていた。10／天守最上階の窓から東面の切妻破風の屋根を見る。樹木が見えるのは二の丸。

屋根、白漆喰塗り籠め（しっくい）の3層の独立式天守である。

「この天守も津軽のえふりの一つ。堀に面した南側、東側は切妻破風を設けた立派な外観。幕府の巡見使が来たときに、二の丸から見える外観にこだわったからです」と案内人。

なるほど裏側に回ると北西の2面には破風が無く、至って地味な意匠である。築城の際に建立された本来の天守は本丸の南西にあったが、寛永4年（1627）に焼失した。

「天守台の面積はもっと広かった。天辺に釣鐘が下がり、5層の天守だったと伝えられています」

釣鐘を擁した5層の天守とすると、この壮大な城にふさわしい立派な天守であったろう。その後、弘前城には長らく天守が不在であった。徳川幕府は新たな城の建設に厳しい目を向けていたが、九代藩主・寧親（やすちか）の時、幕府から三重櫓として新たな建設が許され、文化8年（1811）に竣工した。この異例ともいえる措置の背景には、弘前藩が蝦夷地警護を果たした功績が評価されたことがあるという。天守が小さく地味な造りなのは、本丸辰巳櫓を修築して三重櫓として造られたためだったのである。

本丸には天守のほかにも見るべきところがある。ひとつは司馬遼太郎が絶賛した岩木山の絶景だ。山岳信仰の山は津軽の人にとって特別な存在であり、城造りの際に岩木山の借景を取り込んだのである。

もうひとつは石垣だ。「弘前城は石垣の勉強をするには最適の城。築城当時の石垣から昭和まで1カ所でわかるところに魅力があります」。案内してくれたのは本丸東側の石垣。北東隅の算木積みから、野面（のづら）積み、谷積み、布目積み。今の天守台は堀江組が積み直したという。本丸には切り込みハギや縦に筋目を入れた「すだれ」石も残る。

天守台の石垣を前にして、「実は……」と案内人が話し始めた。

「天守台の石垣で中央部分が膨らむ『孕み』が起きているので、2年後から大修復を計画中です。天守を移動させて石垣を解体、積み直します」

そのようなことが可能なのか。

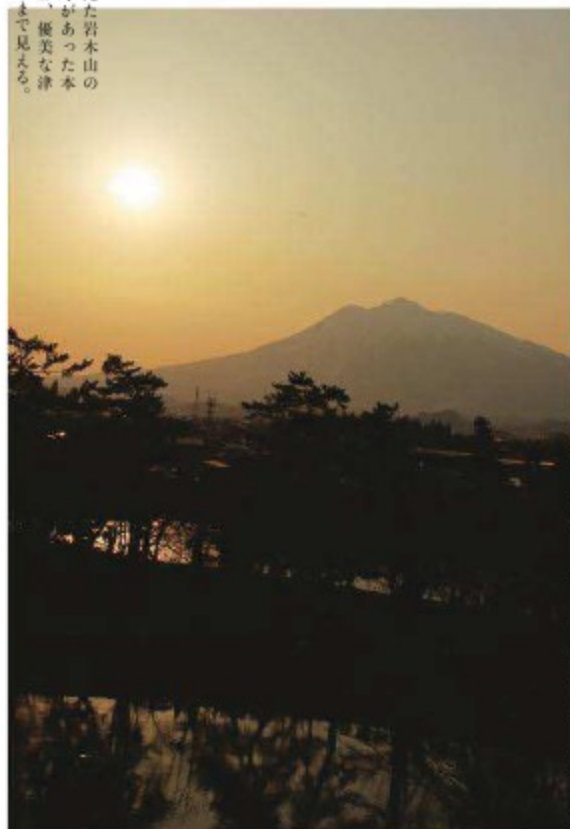
「曳き家の工法で本丸の北西に70m移動させます。明治時代にも行われました」。城の中心に鎮座する天守が曳き家の工法で動かされる。話題になることは間違いないだろう。

本丸を後にして北側に向かい、北の郭、四の丸、西の郭と6つの郭、櫓、城門をすべて見学する。時間があれば禅林街で、長勝寺構を見たいものだ。城から遠く離れた場所に残る土塁を見れば、津軽為信が思い描いた総構えの城のスケールがよくわかる。

そして現在弘前城は、天守曳き家工事を無事に終え、2017年4月9日から石垣解体工事が始まっている。

弘前城から見た岩木山の夕景。旧天守があった本丸西側からは、優美な津軽富士が山裾まで見える。

上2点／「すだれ」石の筋目が横になった、積み直しの跡。本丸東側の石垣は、城内で石垣の変遷が最もよくわかる。手前が古い野面積み、その向こうが布目積み。下／本丸旧末申櫓跡の石垣。築城時に旧天守台だったが、19世紀にはやった「すだれ」石があることから修復されているのがわかる。

案内人の弘前市観光振興部歴史・文化活用推進監の宮川慎一郎さん。先祖は弘前城築城の際、作業員の頭だったという。

ひろさきじょう
青森県弘前市下白銀町弘前公園内　TEL:0172-33-8739（弘前市公園緑地課）
入館時間：9:00～17:00（4月1日～11月23日）
入場料：310円（本丸・弘前城天守・北の郭）
※上記期間外、入場時間外は無料
アクセス：JR奥羽本線「弘前駅」よりバス約15分「市役所前公園入口」下車

# 知っておきたい 城の豆知識

城には何だか難しい専門用語が多い。そこでここでは基本的な言葉を説明する。理解を深めることで、さらに城が楽しくなる。

## 天守（てんしゅ）

天守とは戦国時代後期に登場した最後の防衛拠点となる城郭内最大の櫓のことである。また城の中心、象徴となる建物。層塔形が一般的だが初期は居館に望楼を載せた形も多かった。安土城のように天主と呼ばれる場合もある。

## 櫓（やぐら）

防御や物見、攻撃のために城郭内に建てられた建物である。中世の城では屋根がなく木材を組み上げた井楼（せいろう）のことを指したが次第に堅牢な造りに変わっていった。また矢蔵、矢倉という字が当てられることもある。

## 石垣（いしがき）

土居の表面に石を積んで覆ったものである。次第に土居の上に門や櫓が築かれるようになると石垣が多用されるようになった。特に石垣の材料となる花崗岩の産地である瀬戸内海沿岸をはじめ、西日本の城郭建築に多く見られる。

## 太閤・秀吉ゆかりの名城 大阪城天守閣（おおさかじょうてんしゅかく）

天正11年（1583）に豊臣秀吉が築いた大坂城が始まり。大坂冬と夏の陣で落城したが徳川二代将軍の秀忠によって改めて修築工事が行われた。以降は幕府直轄地として徳川将軍が城主を務めたが幕末の動乱のなかでほとんどの建物が焼失した。現在見られる復興天守は市民や住友財閥の住友氏の寄付によって昭和6年（1931）に建てられた。現在は大手門や各櫓などが往時の遺構として重要文化財に指定。また重さ130tとされる蛸石をはじめ石垣なども遺る。

## 鯱（しゃちほこ）

天守屋根の上に載せられた鯱は水を招くという縁起を担いだ防災の意味を持っている。瓦や木製、銅製など用いられる素材は様々。名古屋城天守のように金箔を貼ったものは金鯱と呼ばれる。大坂城や江戸城などにも用いられた。

## 破風（はふ）

屋根の妻側部分を指す言葉。近世城郭や寺社建築に見られる入母屋破風のほか、切妻破風や千鳥破風、唐破風など様々な造形がある。格式の高い建物には装飾が施されることも多く大阪城天守閣でもそれを見ることができる。

## 望楼（ぼうろう）

天守や櫓の最上階が遠くを見渡すための展望形式になっているもの。大阪城だけでなく基本的に天守最上階はこの形になっている。窓を大きくとって連子窓などを設けた内部望楼と外に縁と高欄を持った外部望楼に分けられる。

## 連子窓（れんじまど）

縦や横に連ねた連子（細長い木材）を一定間隔ではめ込んだ窓である。城以外でも寺社建築などでも見ることができる。城の場合は武者窓とも呼ばれ、外から内部は見えにくいが内部からは外がよく見えるようになっている。

# そもそも『城』とは何か？

## 城の変遷を見つめることでわかる現存十二天守の歴史的価値

日本で城といえば天守がそびえる威風堂々とした姿をイメージすることが多い。しかし一般的には敵から攻撃を受けた場合に防御の拠点となる構造物が広義の城なのである。また武器や糧食の集積地であり、あるいは国主の住居を兼ねている場合もある。

ヨーロッパや中国では街自体を城郭で囲む城郭都市が多いが、日本では戦闘に特化した城が発達していくことになった。弥生時代に農耕適地を巡って争いが起こっていたことから、集落自体を土塁で囲う環濠集落が生まれたが、それが城郭都市に近いものだといえる。

城の形態としては初期は山頂などに築かれた山城が主流だった。現存十二天守の備中松山城や、織田信長の岐阜城などの形態である。しかし防衛上有利だった反面、政治を行うには不向きだったため次第に平地の平城へと移行していくことになる。その代わり自然の山や川、湖などを天然の要害とした城が発達していくのである。

そして戦国時代後半になると櫓や天守を持つ壮大な城も誕生した。それは織田信長、豊臣秀吉、徳川家康の三英傑に代表されるように自らの権威を象徴させる狙いもあった。また江戸時代と前後して城の姿は過渡期を迎えることになった。松本城のように堅牢な黒壁で覆われた実戦を意識した平城が築かれる一方で、姫路城のように美しい漆喰で塗り固められた美を意識した城も登場した。まさに現存十二天守は、近世城郭の完成形を我々に伝える奇跡の遺構だといえる。

上／大阪城天守閣の外部望楼から大阪市街を見渡す。天守閣内部は現在歴史博物館となっている。中／本丸への正門となる桜門。重要文化財に指定されている。下／本丸を守る巨大な濠。空になっているのは桜門の内濠だけである。この下には豊臣時代の大坂城の遺構が埋まっている。

## 覚えておきたい城のキーワード

**野面積み**（のづらづみ）

ほとんど加工されていない自然石をそのまま積み上げていく石垣の積み方である。そのため一見隙間が多く不安定なように見えるが排水性に優れており、なおかつ頑丈である。不揃いなので敵に登られやすいのが欠点。

**打ち込みはぎ**

石垣の積み方のひとつ。表面に出る石の角を叩いて平たくして、なるべく隙間ができないように組み合わせる方法。また隙間ができたら間石(あいいし)を噛ませた。高くて急な勾配を持つ石垣を造ることが可能。

**切り込みはぎ**

石を完全に加工して隙間なく積んでいく石垣の積み方。方形に整形した石材を密着させるため間石も必要なく見た目も美しいが、高い技術が必要となる。戦国時代末期に登場したもので江戸城などで見ることができる。

**算木積み**（さんぎづみ）

これは石垣の角、つまり隅石部分に用いられる積み方。長方形の石を交互に積み上げることで見た目を美しくそして強固にすることができる。江戸時代前後に活用されて以降、ほとんどの城郭の石垣に用いられている。

**武者走り**（むしゃばしり）

城壁や城の周囲の土手の内側に設けた通路のことである。敵の動きにあわせて、兵士はこの上を移動して戦うことができる。また時代を経ると、天守閣各層の内側の長い廊下も武者走りと呼ばれるようになった。

**犬走り**（いぬばしり）

城郭の犬走りは石垣や土塁、堀の間に設けられた狭い空き地を指している。土居の見回りなどに使用された。また石垣の崩落を防ぐ意味合いもあったとされる。堀の内側にある武者走りに対応する言葉でもある。

**埋門**（うずみもん）

石垣や土塀などに埋め込まれたように造られた門。例えば姫路城の「るの門」などが挙げられる。なかには隧道(ずいどう)のような外観をしている門も多い。非常用の出入り口にもなった。穴門とも呼ばれている。

**馬出し**

まず城郭の出入り口である虎口(こぐち)。その前に土居や堀を設けて兵士が出入りする安全を確保しながら敵が侵入できないようにする小規模な曲輪。大坂の陣で築かれた出城・真田丸も馬出しを応用したもの。

**追手**（おうて）

大手門の大手と同じ意味で城の正面側を指している。初期は敵に遭遇する所なので遭手、そこから追手、さらに大手と当て字が変わった。高知城などは現在も追手門と表記している。また背面の門は搦手門と呼ばれる。

**空堀**

敵の侵入を防ぐために城の周囲に掘られた堀。水が張られていないものを空堀と呼ぶ。近世城郭は平城が多く水を張った水堀が主流となったが船で渡れるという欠点も。そのため空堀の方が防御力が高いともいえる。

**縄張り**

曲輪や堀、櫓、虎口などの配置のことを指す。昔は城を建てる際に現地に赴いて縄を張ったことが由来ともされる。本丸を中心に直線的に曲輪を配置する連郭式や円状に円塁を重ねる円郭式など様々な種類がある。

**搦手**（からめて）

城や砦の裏門、あるいは陣地の背後に当たる場所である。転じて相手の弱点を指すこともある。これは逃走する敵を背後から搦め捕らえることが由来である。城正面の大手門に対して裏門のことは搦手門とも呼ぶ。

**曲輪**（くるわ）

城を削平した部分の周りを土塁や堀で仕切った際の区画の名称。現存する姫路城のように近世城郭の主要な曲輪は本丸、続いて二の丸、三の丸と「丸」と呼ばれるようになった。これらの配置で縄張りが作られた。

**惣曲輪**（そうぐるわ）

城下町全体を土塁や石垣、堀などで囲んでいるものを指す。特に有名なのは後北条氏の小田原城や豊臣秀吉の大坂城、そして江戸城である。総構え(そうがまえ)、惣構、総郭(そうぐるわ)とも記される。

**土居**（どい）

防衛のために城や館の周囲に築かれた土手のこと。土塁とも呼ばれる。城堀を掘った際の土を盛り上げただけのものから、突き固めたものまで様々。石垣は土居の表面をさらに石積みによって強固に仕上げたもの。

**枡形**（ますがた）

虎口を防衛するための最も大切な施設形態のひとつ。直角に設けられた城門と城壁の間を四角く区切った一角のことで、敵の直進を妨げて攻めにくいようにした。虎口の外にあれば外枡形、内側にあれば内枡形と呼ぶ。

LOG RESORT
軽井沢に住もう。

第二章

# 築城名人が造った城を知る

## 地の利を生かした造り それぞれ異なる技術

戦国武将として世に名を馳せる一方で、〝築城名人〟と呼ばれた男たちがいた。藤堂高虎、黒田官兵衛そして加藤清正である。当時の建築技術の粋を極めた3人が精魂込めて造った城の数々を見ていこう。

文◎上永哲矢（P66〜71）、野田伊豆守（P72〜83）
撮影◎島崎信一、Noriy.k　イメージ俯瞰図作成◎金湖浩

# 藤堂高虎

## 戦国一の建築家。高石垣と水城造りを得意とした

加藤清正や黒田官兵衛に比べると、知名度では一歩及ばない。だが実績を比べてみれば、武将として一番大成し幸福な晩年を過ごしたのは、この高虎であろう。藤堂流築城術の極意、いま改めて世に知らしめん。

**藤堂高虎**（とうどうたかとら）

1556〜1630年。幼少期は不遇だったが羽柴秀吉の弟、秀長に仕えてから運が開け、持ち前の武勇と知略を駆使して出世。伊勢・津藩32万石を得て、徳川政権下では譜代大名並みに厚遇された。

**代表的な城郭**

伊予今治城・伊予大洲城・伊予宇和島城・伊賀上野城・伊勢津城・紀伊和歌山城・近江膳所城・武蔵江戸城

藤堂高虎肖像画（部分、吹揚神社蔵・今治城提供）

## 堂々たる体躯と武勇で人目を引いた若き高虎

藤堂高虎は幼名を「与吉」といい、現在の滋賀県にあたる近江、犬上郡は藤堂村出身の豪族・藤堂虎高の次男として生まれた。

藤堂家は本来士族の家だったが、当時は農民にまで身を落としていた。高虎は武士として功を挙げ名を高めたいと、地元近江の大名・浅井長政に仕え、姉川の戦いに参戦。見事に織田軍の兵士の首を取り、感状を与えられた。まだ15歳の時であったが、すでに堂々たる体躯で身の丈は190㎝に近かった。平均身長160㎝足らずの当時、雲を突くようなその長身はさぞ人目を引いたであろうことは想像に難くない。

しかし、浅井家は3年後に信長に攻め滅ぼされてしまい、その後は浅井の旧臣や、信長の甥である織田信澄のもとを転々とする。彼らとはどうもそりが合わなかったらしい。当時の武士は主君に不満があればいつでも暇乞いができたのであり、居心地の良い仕官先を求めて放浪する者が多かった。高虎もその一人だった。

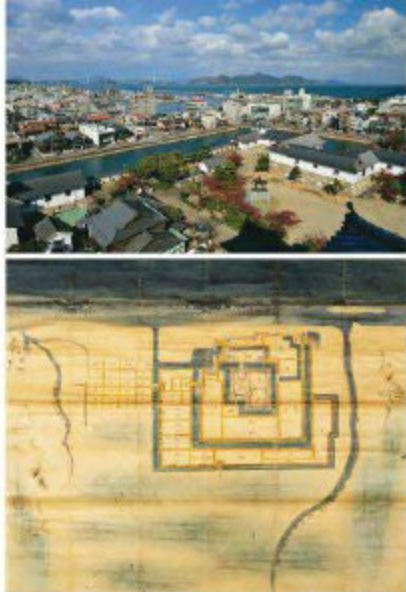
しかし、武士は食わねど高楊枝……とはいかない。誰でも腹は減るものだ。高虎はある日、空腹のあまり三河宿（豊橋市）にあった茶店で餅をたらふく喰ったが、まったく持ち合わせがなかった。しかし、それを主人に正直に話したところ「故郷に帰って親孝行しなさい」と諭され、路銀まで与えられてしまった。店の女将が近江出身であったことも幸いだった。後年、参勤交代の途中で高虎はこの店に立ち寄った。すでに22万石の大名に出世していた彼は餅代に利息をたっぷりつけて返し、主人と再会したという。高虎の旗指物は紺色を白い丸で抜いた「三つ餅」。白餅は「城持ち」にかけており、無銭飲食をした時のひもじさを忘れないようにとの思いもあるのだろう。

さて、パッとしなかった高虎が陽の目をみたのは姉川から6年後の天正4年（1576）。に信長の重臣・羽柴秀吉の弟・秀長（後の豊臣秀長）に300石で拾ってもらったのであ

背丈は6尺2、3寸(約190cm)、体重は30貫(約110kg)もあったといわれる。戦国武将として申し分のない体格をしていた。
(藤堂高虎肖像画 吹揚神社蔵・今治城提供)

高虎が得意としていたのは、海や河を天然の濠として生かす「海城」「水城」の建築だった。水堀の底に直接石垣を積んで要害とし、濠を水路にして舟での移動や物資の輸送に使うなど水を有効に活用していた。(大洲城絵図 大洲市立博物館提供)

高虎が秀吉から拝領したと伝わる、「黒漆塗唐冠形兜」(くろうるしぬりとうかんなりかぶと)。一族の藤堂良重が大坂夏の陣で着用したが討死。高虎は名誉の討死としてこれを後世に伝えたという。
(伊賀上野城提供)

「城持ち」に通じる、紺地に白の丸餅を並べた柄を旗指物にした。若い日に餅も食えなかった境遇を忘れないためでもあったという。

右／今治城の模擬天守。今治城には天守があったのかどうかハッキリわからない。解体され、丹波亀山城に転用されたとの説もある。
左上／天守から瀬戸内海と城下を望む。
左下／当時の絵図からも海が近く、水堀が周囲をめぐっていたことがわかる。
（正保今治城絵図 今治城提供）

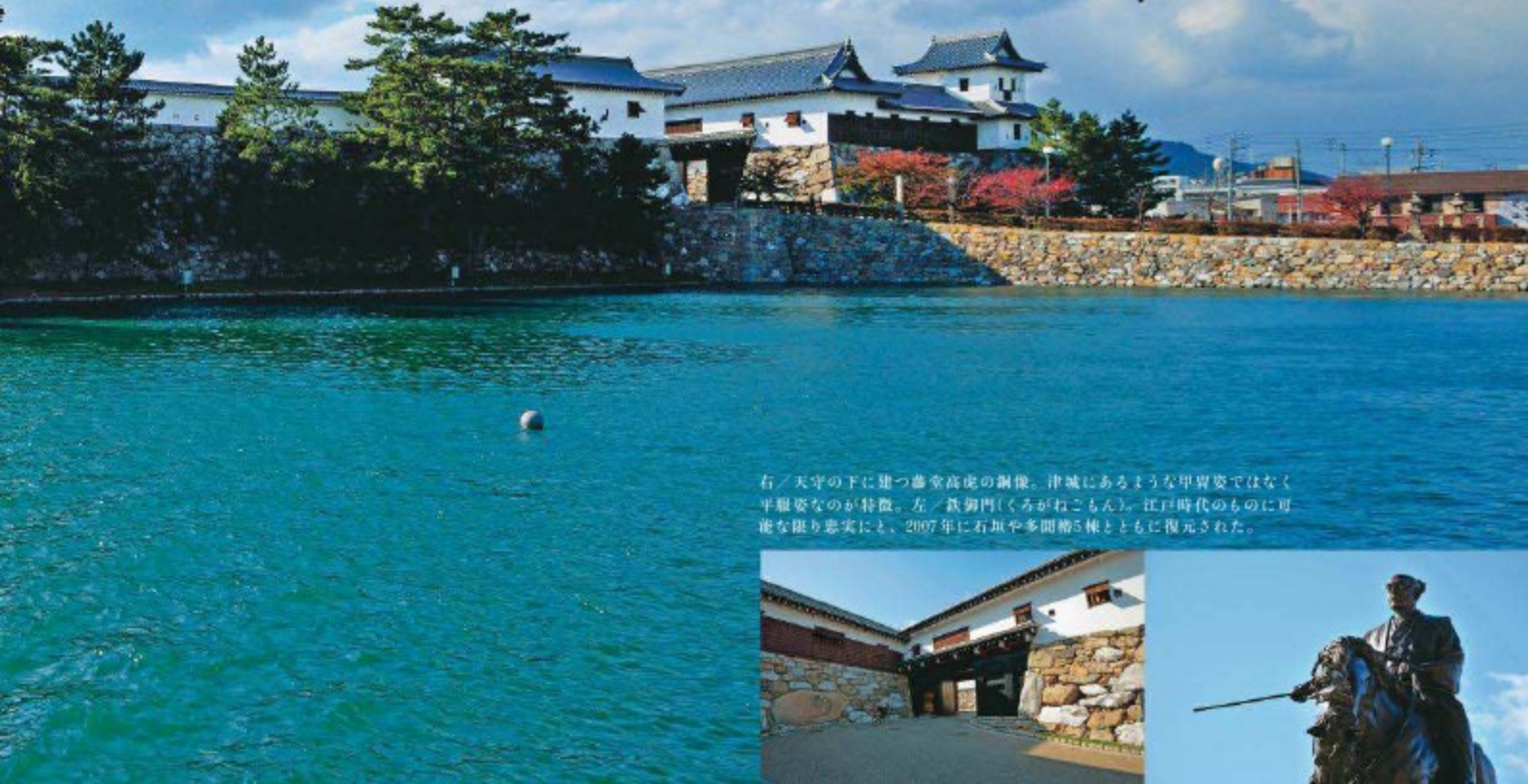
# 今治城

## 三重の堀に海水を引き入れ軍港を備えた要塞

| | |
|---|---|
| 所在地 | 愛媛県今治市 |
| 築城年 | 慶長7年（1602） |
| 別名 | 吹揚城、美須賀城 |
| 構造 | 平城（海城） |
| 主な城主 | 藤堂高虎、高吉、松平定房 |
| 遺構 | 石垣、堀 |
| 再建 | 模擬天守、鉄御門、多聞櫓5棟など |

### 今治城（いまばりじょう）

日本三大水城のひとつ。高虎が「関ヶ原の戦い」で手柄を立て、家康から与えられた領地に築いた城で、彼にとって3番目の居城。当時、今治には唐子山山頂の国分山城があったが、高虎はより有効的な都市経営を目指すため瀬戸内沿いにこの城を築いた。三重の堀に海水を引き入れ、国内最大級の城内港を設けるなど瀬戸内海を最大限に活用した軍港の城といえる。

る。名君のもとで彼はその武勇を存分に発揮し、数々の戦で手柄を立ててゆく。5年後には十倍の3000石、10年後の天正13年（1585）にはついに1万石の大名となった。参戦する戦も秀吉の中国攻め、賤ヶ岳の戦い、四国攻めに紀州征伐とメ

右／天守の下に建つ藤堂高虎の銅像。津城にあるような甲冑姿ではなく平服姿なのが特徴。左／鉄御門（くろがねごもん）。江戸時代のものに可能な限り忠実にと、2007年に石垣や多聞櫓5棟とともに復元された。

ジャーな合戦ばかりになる。

高虎は徐々に重要な仕事を与えられるようになり、紀州攻めの後に猿岡山城、和歌山城の築城を命じられ、その普請奉行を務めた。高虎にとって生涯初めての築城であった。

天正19年（1591）に大恩人ともいえる秀長が病死。嘆く暇もなくその甥で養子の豊臣秀保に仕え、秀保の代理として翌年の文禄の役、いわゆる朝鮮出兵に参加した。しかし、その3年後に秀保が17歳の若さで急死すると、さすがにショックを隠せず高虎は出家して高野山に籠もってしまった。しかし、その才能を惜しんだのはほかならぬ秀吉だった。

秀吉は高虎を呼び戻すと、その場で5万石を加増して伊予国板島（現在の宇和島市）へ派遣したのである。7万石の大名となった高虎は、2度目の朝鮮攻め（慶長の役）に水軍を率いて参加し、漆川梁海戦では元均が率いる朝鮮水軍を殲滅するなどの武功を挙げ、帰国後に大洲城1万石を与えられた。喜んだ高虎は本拠地の板島・丸串城の大規模な改修を行い、それが完成後すると「宇和島城」と名を改めた。東側に海水を引き込んだ水堀を備え、西側半分が海に接していることから、高虎が得意とした「海城」元祖である。

城域は外から見ると四角形だが、実際は五角形をしており、敵をあざむく仕掛けが施されていた。宇和島城はほかにも林道に設けた脱出路や隠し水軍基地などを備えたもので、当時としては画期的な城だった。のちに高虎は家康に加増されて今治へと移り、宇和島城は伊達政宗の長男の秀宗の家系が代々治めたが、高虎が築いた縄張りは後の城主たちがそのまま利用し続けたというから、その完成度の高さがうかがえる。

### 8度主君を変えても信念を貫いた生涯

慶長3年（1598）、豊臣秀吉が死んだ。高虎はこれに前後して徳川家康に接近。「自分を家臣と思って使ってください」と言ったのである。権力者の死は新たな乱世を生む。次の時代のリーダーが誰なのか、高虎は目星をつけたのだ。他の大名たちは己の領地を守ることしか頭にないが、家康は天下太平の志を持っていると見込んでのことであろう。はたして、秀吉の死の直後、豊臣家は分裂。武断派・文治派に分かれて政争が起きた。高虎は武断派で、加藤清正や福島正則、黒田長政とともに家康に味方した。その決断は誰よりも早かったという。

高虎は生涯に「8度も主君を変えた男」といわれる通り、当時からその姿勢は多くの大名に咎められた。それに対し「己の立場を明確にできない者こそ、いざというときに一番頼りにならない」と高虎は反論している。彼の生き方を見ればわかるが、主君を変えるとはいっても、それは



海水をそのまま堀に引き入れた珍しい城。潮風に吹かれて水が輝いている様子から、日本屈指の水城の面影を感じることができる。

節目節目のことで、戦場で裏切るといったような真似はしていない。
　かくして「関ヶ原の戦い」では東軍の主力の一員として活躍。家康の依頼を受け、脇坂安治や小川祐忠といった諸将へ寝返りの働きかけをも行った。戦後、家康から今治20万石に加増された今治城を拡張。三重の堀に海水を引き入れ、海から堀へ直接船で入ることができるよう海上交通の要所という地形を生かし、軍港の性格も備えた見事な海城に仕上げている。
　その後、高虎は徳川家の重臣とし

# 大洲城

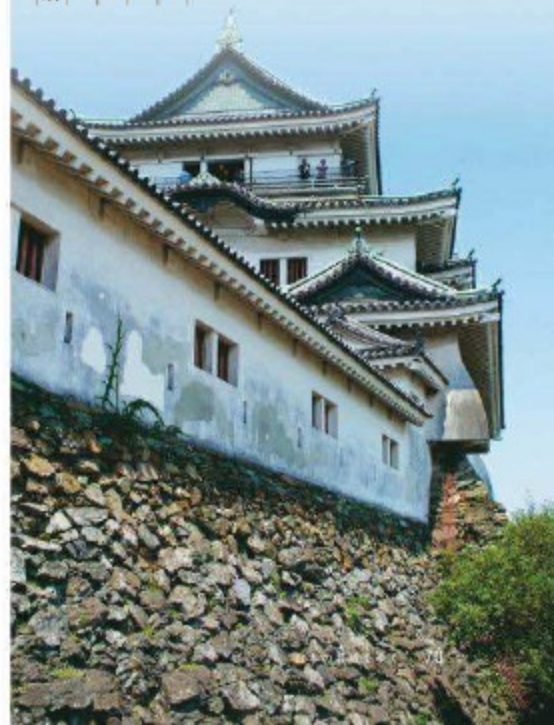
## 高虎が近世城郭へと改修 4棟の櫓が現存する

所在地　愛媛県大洲市
築城年　元徳3年（1331）
別名　比志城、地蔵ヶ嶽城
構造　梯郭式平山城
主な城主　宇都宮豊房、藤堂高虎、脇坂安治、加藤貞泰
遺構　櫓、石垣、堀
再建　天守、多聞櫓

**大洲城**（おおずじょう）
当時、秀吉政権下で宇和島城主だった高虎が、朝鮮出兵での武功を認められ、追加で与えられた城。小城だったが高虎が大規模に修築し、近世城郭へ生まれ変わった。伊予大洲藩の中心地として栄え、明治維新後に城内の多くの建築物は破却されたが、地元住民の努力と嘆願で4棟の櫓が残った。天守も市民たちから集まった寄付をもとに木造で復元されている。

# 和歌山城

## 緑茂る虎伏山に白亜の天守がそびえる

所在地　和歌山県和歌山市
築城年　天正13年（1585）
別名　虎伏城、竹垣城
構造　梯郭式平山城
主な城主　浅野幸長、徳川頼宣
遺構　門、塀、庭園、石垣、堀
再建　天守、櫓、門、橋

# 宇和島城

## 高虎が再生させし古城

所在地　愛媛県宇和島市
築城年　天慶4年（941）
別名　鶴島城、板島城、丸串城
構造　梯郭式平山城（海城）
主な城主　藤堂高虎、伊達宗利
遺構　現存天守、門、石垣

ての地位を不動のものとし、江戸城改築でも普請に携わり、功績を立てた。家康は高虎の才と忠義を高く評価し、外様大名でありながら譜代大名並みに重用。このように有能な人材を僻地に置いておくわけにもいかないと思ったのだろう。慶長13年（1608）、高虎に伊賀一国および伊勢8郡を与え、今治周辺の越智郡2万石を加えての合計22万石に加増移封を命じた。

　高虎は以後、伊勢・津城を本拠地とし、さらに豊臣家と豊臣派の大名を抑える意味で伊賀上野城を築城。ことに伊賀上野城には当時日本一の高さの石垣を積み上げ、諸将を驚かせている。この頃、加藤清正も築城名人として有名になっていたが、清正は石垣の反りや複雑な縄張を重視したのに対し、高虎は石垣をまっすぐに高く積み上げること、深い水堀の設計の巧みさ、単純な縄張に特徴があった。清正が芸術家肌であるのに対し、高虎は基本に忠実なタイプだったといえよう。

　それが堅実なタイプの家康には大いに好まれたのか、天下普請における縄張には、高虎の設計がモデルになることが多かった。

**為政者としても**
**才覚を発揮した晩年**

　慶長19年（1614）、大坂冬の陣が開始されると、当然徳川方として出陣。翌年の大坂夏の陣でも徳川方として参戦する。河内方面の先鋒を志願し、八尾において豊臣方の長宗我部盛親隊と戦った。この戦いでは長宗我部軍の猛攻に後退し、600人あまりの死傷者を出すなど苦戦した。それでも戦後、功績大として32万石に加増されている。この戦いで独断専行で多くの犠牲を出した家臣の渡辺勘兵衛と衝突、勘兵衛は高虎のもとを飛び出していった。高虎は、激昂する勘兵衛に若き頃の自分と同じ影を見たかもしれない。

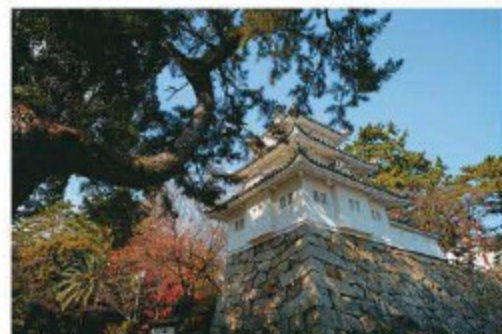
　豊臣家滅亡の翌年、徳川家康が世を去る。高虎は家康の枕元に呼ばれ、後事を託された。そのような厚遇ぶり、家康は他の外様には許していない。この破格の厚遇ぶりは何だろうか。家康とは武人同士、ウマが合ったとしかいいようがない。

　高虎も家康を慕うことを忘れず、寛永4年（1627）には江戸における自分の敷地内に上野東照宮を建立して家康を弔っている。

　徳川家による天下平定の後は、高虎も内政にも取り組み、為政者としての才能を存分に発揮している。上野城と津城の城下町を拡張し、農地開発や寺社復興に力を入れ、藩政を活発化させた。

　晩年、眼病を患って失明している。寛永7年（1630）10月5日、静かに世を去った。享年は家康と同じ75であった。徳川家康を勝利者・成功者とするなら、この藤堂高虎も十分に成功者といえるだろう。

# 津城

## 伊勢は津で持つ、高虎最後の本拠地

| | |
|---|---|
| 所在地 | 三重県津市 |
| 築城年 | 元亀～天正年間（1570～92） |
| 別名 | 安濃津城 |
| 構造 | 輪郭式平城 |
| 主な城主 | 織田信包、藤堂高虎 |
| 遺構 | 石垣、堀 |
| 再建 | 模擬隅櫓 |

三人の築城名人　藤堂高虎

# 伊賀上野城

## 日本一の高石垣が忍者の里に悠然とそびえる

### 伊賀上野城（いがうえのじょう）

豊臣政権初期の天正13年（1585）、郡山城から移ってきた筒井定次が築城。1608年に家康の命令で筒井は改易され、代わりに藤堂高虎が赴任して大幅な改修に着手した。ただ、完成前に豊臣家が滅亡したため築城はその時点で中止されたままとなる。東半分は筒井氏時代のままで石垣がほとんどない。天守は五重天守が建築予定だったが、暴風雨で倒壊し、以後は造られなかった。

| | |
|---|---|
| 所在地 | 三重県伊賀市 |
| 築城年 | 天正13年（1585） |
| 別名 | 白鳳城 |
| 構造 | 梯郭式平山城 |
| 主な城主 | 滝川雄利、筒井定次、藤堂高虎 |
| 遺構 | 石垣、堀、武具蔵 |
| 再建 | 模擬天守（木造） |

# 黒田官兵衛

## 天才軍師にして築城家。天賦の才が随所に見られる

戦国時代の歴史を影で動かしたと言われる黒田官兵衛。その類い稀なる才能は、軍略の面だけではなくじつに多方面へ発揮されていたのである。とくに築城に関しては、同時代の名人であった、加藤清正をも驚嘆させるものがあったという。

**黒田官兵衛（孝高）**（くろだかんべえ（よしたか））

1546～1604年。その祖は近江佐々木源氏から分かれた一族といわれている。官兵衛が生まれたのは播磨の姫路城内であった。隠居した跡は如水を名乗る。秀吉や家康からも恐れられていた。（大分県立歴史博物館蔵）

代表的な城郭

豊前中津城・肥前名護屋城・筑前福岡城

讃岐高松城・安芸広島城・播磨姫路城

播磨妻鹿城・摂津大坂城

大分県立歴史博物館蔵

## 非凡なる才を秘めた男を<br>戦国の世は必要とした

戦国末期に登場した稀代の軍師・黒田官兵衛。彼はその類い稀なる軍略をもって、自らが仕えた羽柴秀吉に天下を取らせた。その比類なき頭脳の持ち主は天文15年（1546）、播磨の大名・小寺政職の家老を務めていた黒田職隆と、室の明石氏の間に生まれた。幼名は万吉。早くに母を亡くし、それからは歌道の本ばかり読みふけっていた少年時代であったと伝えられている。

だが14歳で元服し、官兵衛孝高と名乗るようになると、その才は主君の小寺政職も認めていたようだ。すぐに近習となり、小寺家の本拠である御着城に詰めていた。そして若干22歳にして黒田家の当主となり、同時に姫路城主、さらには小寺家の家老職まで引き継ぐことになった。

もしも時代が戦国乱世でなければ、官兵衛は田舎の小大名家の家老職で一生を終えていたかも知れない。しかし戦国乱世は最終局面に向かって大きなうねりを見せてきた。尾張の小勢力に過ぎなかった織田信長が勃興し、永禄11年（1568）には足利義昭を奉じて上洛。義昭を足利十五代将軍の座に就けたのだ。

天正3年（1575）6月、長篠で織田・徳川連合軍が武田勝頼の軍に大勝したという情報を得た小寺政職は、小寺家の去就に関する対策会議を開いた。この時、古い付き合いの毛利家ではなく、日の出の勢いの織田家に味方せよと進言したのは、官兵衛ただひとりであった。これがその後の運命を拓くことになる。

## 中国大返しの際に見せた<br>あまりに水際立った差配

官兵衛にとって幸運だったのは、織田家の軍司令官級の武将で、その時に担当地域が決まっていなかったのが羽柴秀吉であった、ということかも知れない。秀吉と官兵衛は、すぐにお互いを認め合う。とくに官兵衛は秀吉の飾らない性格と、自分を信頼して何でも話してくれる態度に、すっかり心酔してしまう。

こうして官兵衛は秀吉の帷幕にあって、その戦いを助けていくことになる。官兵衛の献策により、勝利できた戦いも少なくなかった。天正10年（1582）6月2日未明に、秀吉の主君である織田信長が、明智光秀の謀反により横死。

この本能寺の変直後からの、秀吉軍の一連の動きはほとんどが官兵衛の策によるものだったといっても過言ではない。このとき秀吉軍は、毛利方の備中高松城を水攻めにしていた。高松城の近くには、城の救援のため毛利の大軍も対峙していた。このままでは動くことは叶わない。

しかも肝心の秀吉はすっかり放心

天正10年、羽柴秀吉が清水宗治が守る備中高松城を攻めた「備中高松城の戦い」。城の地の利を逆手にとった戦法は、黒田官兵衛が進言したとされる。（『赤松之城水責之図』国立中央図書館特別文庫室蔵）

山崎合戦の舞台となった天王山ハイキングコースには、中国大返しの様子が描かれた解説石碑が建てられている。先頭は秀吉、二番目が官兵衛。（撮影◎佐藤佳穂）

秀吉軍による水攻めにより落城した備中高松城。右手の橋の奥に見える木立のある場所が本丸跡。城将・清水宗治の首塚がある。（撮影◎佐藤佳穂）

状態となってしまった。その様子を見て官兵衛は「運が開けましたな、天下取りの好機到来ですぞ」とささやいた。このひと言で秀吉は我に返り、毛利方と休戦交渉を再開。毛利方が難色を示しそうな条件をなくし、素早く休戦に持ち込んだ。

5日に備中高松城を後にした秀吉は、わずか2日足らずで姫路城まで軍を返した。ここで休息を兼ね、官兵衛の殿軍を待った。官兵衛隊は水攻めの際の堤防を切り、毛利軍が追撃できないようにしたうえで、6日夕刻に高松城を後にする。姫路で秀吉の本隊に合流後、11日には尼崎、12日には富田に着陣した。これが世に言う〝中国大返し〟である。

この素早さにもっとも驚いたのは明智光秀であった。毛利の大軍と睨み合っていた秀吉が、これほど早く畿内に姿を見せることなど、常識的に考えられない。しかも光秀は畿内各地の武将や織田と対立していた有力大名に書状を送り協力を仰いだが、結果ははかばかしくなかった。それどころか光秀麾下の諸将まで、秀吉からの書状を受け取ると、与することを約束している。こうして光秀は態勢が整わぬまま、秀吉との決戦に望んだのである。

**秀吉の天下取り最大の功労者**
**だがそれゆえに恐れられた**

山崎の戦いで光秀を破り、翌年に

# 中津城

## 川を外堀に見立てつつ水運による経済効果も考慮

協力◎中津城（奥平家歴史資料館）

所在地　大分県中津市
築城年　天正16年（1588）
別　名　扇城　小犬丸城　丸山城
構　造　梯郭式平城
主な城主　黒田孝高、細川興秋、奥平昌成
遺　構　石垣、堀
再　建　模擬天守

**中津城**（なかつじょう）

豊前に入国した当初、馬ヶ岳城を居城としたが、山城では城下町形成に不便なので天正16年（1588）に、海に近い山国川と中津川が分岐する三角州地帯に中津城を築城した。川が自然の堀になるだけでなく、水運を発展させることも念頭に置いていたのだ。現在の天守は模擬天守。遺構を残すのは本丸部分のみ。かつては二の丸、三の丸があり、水堀で守られていた。

上／右は黒田時代、左は細川時代に積まれた石垣。下／九州最古の近世城郭の石垣と伝えられる貴重な遺構を見られる。「輪どり」と呼ばれる技法で、石垣上部が緩やかな曲線を描き崩れにくくしている。

官兵衛の築城の特徴は、中津城のように海に近い場所を選び、城域に水を引いて堀としていること。

は賤ヶ岳の戦いで織田家筆頭家老の柴田勝家を撃破した秀吉は、名実ともに信長の後継者に躍り出た。その後、四国、東海、九州という具合に天下統一事業を推し進めていく。その陰にはつねに官兵衛の姿があった。特に九州攻めでは軍監、そして日向方面の先鋒を務めるなど、八面六臂ともいえる活躍を見せる。

九州平定後は秀吉から豊前12万石を与えられた。それとほぼ同時に家督を息子の長政に譲り、隠居願いを出した。とはいえその後も小田原攻めの際の開城交渉、さらには朝鮮出兵にも参加している。まさに秀吉の天下統一における最大の功労者は、官兵衛をおいて他にはいない。

だがその見返りは、あまりにも少なかった。これは秀吉が官兵衛の才覚を恐れ、いずれ自分に代わり天下を我が物にするのではないか、という猜疑心を抱いていたからだ。それは中国大返しの際に官兵衛が発したあのひと言が、秀吉の心に警戒心を植え付けたと思われる。それを知ったからこそ、官兵衛は早々と隠居してしまったのである。

秀吉の死後、徳川家康と石田三成の間の争いが、天下分け目の合戦へともつれ込む。黒田家は徳川方に味方。嫡子長政を家康に従軍させ、自身は東軍方として、九州各地の西軍諸城を切り取り始めた。官兵衛は中央が乱れている間に、九州から西国

# 肥前名護屋城

## 大陸進出を夢見た秀吉の壮大な野望を具現化した巨城

所在地　佐賀県唐津市
築城年　天正19年（1591）
別　名　名護屋御旅館
構　造　梯郭式平城
主な城主　豊臣秀吉
遺　構　石垣、空堀

### 肥前名護屋城（ひぜんなごやじょう）

この城が築城されたのは天正19年（1591）であった。縄張りを官兵衛が担当し、石垣普請の責任者は加藤清正が務めていた。実際の工事には多くの大名が参加していた。これだけの大規模な工事を分担して行ったため、分担した区域の接合部分がうまくかみ合っていない場所も見られる。ごく短期間しか存在せず、随所に破城の跡が見られるのも珍しい。

（唐津観光協会）

海を望む本丸の一画にある天守台の跡。短時間で造られた城とは思えないほど、広大な敷地を有している。

名護屋城周辺には100カ所を越える大名陣屋跡がある。なかでもよく整備されているのが堀秀治のものだ。これは本物の礎石が露出している広間の跡。そのほかに御殿や能舞台もあった。

本丸にある名護屋城跡の碑。

をまとめ、その兵を従え自分が天下に号令をかける目論みだった。

だが、関ヶ原の戦いはたった一日で東軍が勝利し、西軍は一夜にして瓦解。官兵衛の計画はもろくも崩れ去ってしまった。それ以降、彼は天下への野心を捨て、ただ黒田家の先行きに心を配るようになった。

**清正をも驚愕させてしまう**
**実戦本位の城づくり**

軍師としての名声があまりにも大きいため、黒田官兵衛が築城の才にも富んでいたことを、語られることは多くない。しかし戦国の築城名人としてよく語られる藤堂高虎や加藤清正ですら、一目置く存在だったのである。居住した中津城や福岡城をはじめ大坂城、広島城、肥前名護屋城などの縄張りを手がけている。

官兵衛の手による城は、高い石垣を誇るわけでなく、やたらと技巧に走っているものでもない。それでも加藤清正が「自分の城は3～4日で落ちるが、福岡城ならば30～40日は落ちない」と賞賛している。その理由は、本州方面から攻めてくる軍に対する防壁として、博多に面した那珂川に1・5㎞にも及ぶ高石垣を築き、さらに川の上流にはその日でも使える材木が貯蔵されていた。このように、いつでも戦ができるように万全の備えがなされていたからだ。

また官兵衛が築いた石垣には、当時の最高技術である穴太積みの技法が用いられている。石は全て花崗岩の自然石で、ノミで削った痕跡が一切なく、石の本来の特徴を活かして積まれている。石垣の上部は緩やかな曲線を描くという、崩れにくい工夫が凝らされている。

# 姫路城

## 現代の巨大城郭建築以前に官兵衛が城代を務めていた城

| | |
|---|---|
| 所在地 | 兵庫県姫路市 |
| 築城年 | 貞和2年（1346） |
| 別名 | 扇城　小犬丸城　丸山城 |
| 構造 | 渦郭式平城 |
| 主な城主 | 黒田孝高、池田輝政 |
| 遺構 | 天守閣、櫓、門、塀、石垣、堀、土塁、庭園　現存天守 |

**姫路城**（ひめじじょう）

姫路城の歴史は古く、室町初期に赤松氏が築いたのが最初といわれる。戦国期には官兵衛の主であった小寺氏の城であった。その後、官兵衛が城代となり、織田方に味方すると城を秀吉に譲ってしまう。その際に城は大規模改修された。さらに関ヶ原合戦後、播磨一国を手にした池田輝政が近代城郭に造りかえている。秀吉の改修の際、官兵衛が普請を担当していたという。

現在残されている姫路城の遺構の大部分は、池田輝政が築いたものだ。残された城を見ると彼もまた、優れた城郭の専門家であったと思われる。（姫路市）

上／珍しい十字の鬼瓦も見られる。官兵衛がキリシタンだったこととの関連も語られる。中／羽柴秀吉が城主だった時代の石垣も残る。下／池田氏の後に姫路城主となった本多忠政時代に築かれた西の丸の石垣。
（撮影◎野田伊豆守）

# 福岡城

## 52万石の大守にふさわしい壮大かつ堅固な城郭

| | |
|---|---|
| 所在地 | 福岡県福岡市 |
| 築城年 | 慶長6年(1601) |
| 別名 | 舞鶴城 石城 |
| 構造 | 梯郭式平山城 |
| 主な城主 | 黒田長政 |
| 遺構 | 櫓、門、石垣、堀 |

上/那珂川と博多を挟んだ場所に建つ福岡城。天守閣は初期の頃に打ち壊されたという記録が発見されている。現在は城門、櫓が現存している。なかでも多門櫓と二の丸の南隅櫓は国の重要文化財に指定されている。下/現在は大半が公園となっていて、桜の名所としても人気が高い。公共施設やスポーツ施設も点在。

(福岡市)

# 妻鹿城

## 姫路城を秀吉に譲り自らはこの城に移った

| | |
|---|---|
| 所在地 | 兵庫県姫路市 |
| 築城年 | 元弘3年(1333) |
| 別名 | 国府山城、巧山城 |
| 構造 | 山城 |
| 主な城主 | 妻鹿長宗、黒田孝高 |
| 遺構 | 石垣、曲輪 |

妻鹿城(めがじょう)は元弘3年、妻鹿長宗によって築かれた。市川の河口近くに面した場所にある、お椀を伏せたような甲山全体に築かれている城。別名は国府山城。城としての規模は大きくないが、天然の要害であった。城内から瀬戸内海を見渡すことができる。海から姫路まで通じる市川を抑えるための要所でもあった。(撮影◎佐藤佳明)

三人の築城名人 黒田官兵衛

# 広島城

## 軍師らしい深謀遠慮が発揮されている城のひとつ

| | |
|---|---|
| 所在地 | 兵広島県広島市 |
| 築城年 | 天正17年(1589) |
| 別名 | 鯉城 当麻城 |
| 構造 | 輪郭式平城 |
| 主な城主 | 毛利輝元、福島正則 |
| 遺構 | 石垣、堀 |
| 再建 | 外観復元天守 |

朝鮮出兵の前進基地である肥前名護屋城と、畿内との中継地点に好都合だったことから、現在の場所に築かれた。この城の縄張りも官兵衛が担当している。さらに官兵衛は山を選ばず湿地帯に城を築くことを勧めた。山の上だと不便なこともあるが、あまり要害の地に築城すると、あらぬ疑いを受けてしまうから、という配慮もあった。

(撮影◎野田伊豆守)

# 加藤清正

## その縄張りは質実にして剛健 まさに他者の追従を許さず

清正といえば猛将の印象ばかりが先走るが、存命中からその築城術は、高い評価を得ていた。とくに美しい曲線を描いた「扇の勾配」と呼ばれる独特の石垣は、他者の追従を許さないものがある。その真骨頂は家康をも唸らせた、実戦本位の城づくりだ。

**加藤清正**（かとうきよまさ）

1562〜1611年。若い頃から勇猛果敢な若武者、関ヶ原後は豊臣家と徳川家の間に立ち、外交手腕を発揮。豊臣秀頼と徳川家康の対面の折り、秀頼の脇から片時も離れなかった話は有名だ。

**代表的な城郭**

肥前名護屋城・肥後熊本城・尾張名古屋城

肥後佐敷城・肥後八代城・武蔵江戸城

蔚山倭城

清正の生誕地に建てられた日蓮宗の正悦山妙行寺。清正は熱心な法華経の信者であった。これは母からの影響といわれる。戦場にある時も常に頭には法華経の題目を頂いていた。

加藤清正公束帯姿画像（妙行寺蔵）

## 秀吉に小姓として仕え 賤ヶ岳の戦いで頭角を現す

加藤清正は永禄5年（1562）、尾張国愛知郡中村で生まれた。豊臣秀吉とは縁戚にあたり、在所も同じであった。現在、清正生誕の地には妙行寺という日蓮宗の寺が建っている。この寺は清正が名古屋城の普請に加わった際、普請小屋に使われ、築城後は不要になった材料を貰い受け、両親の菩提を弔うために寄進、建立したものだ。

縁戚ということもあり、秀吉が近江長浜の城主となった天正元年（1573）、清正は小姓として秀吉に仕えた。身内に恵まれなかった秀吉は、清正をわが子のようにかわいがり、特別に目をかけていた。清正もまたそんな秀吉から、武将としての生き様など、様々な薫陶を受ける。それは同じく秀吉の縁戚であった福島正則も同じであった。こうした子飼いの武将たちが、その後の秀吉による天下統一事業を支えていくことになるのだ。

天正4年（1576）には170石を与えられ、秀吉の中国攻めにも参加する。そして天正10年（1582）4月の備中冠山城攻めでは一番乗りを果たし、豪の者として知られた竹井将監を討ち取る活躍を見せたのである。だが6月に本能寺の変が起こり秀吉の中国攻めは中断。信長の弔い合戦ともいえる山崎の合戦が起こる。清正はこの戦いにも秀吉に従い参戦している。

そんな清正がその名をおおいにあげたのが、翌年に起こった賤ヶ岳の戦いにおいてであった。この戦いは信長の後継問題で対立した秀吉と柴田勝家の間で勃発したもの。ここで清正は、敵将のひとり山路将監正国を討ち取るという武功を挙げる。

この戦いにおいてとくに華々しい活躍をした七人が、後世〝賤ヶ岳の七本槍〟と呼ばれるようになった。ちなみに七人というのは加藤清正のほかには福島正則、加藤嘉明、脇坂安治、平野長泰、糟屋武則、そして片桐且元である。いずれも後の豊臣政権を担う存在となっている。

清正は恩賞として3000石の所領を与えられた。実際に恩賞を得たのは七人だけではなく、武功を挙げた若武者も14人はいたと記録されている。単純に語呂の良さから七本槍と呼ばれるようになった。

## 抜群の戦功を重ねた結果 一気に肥後半国の大名へ

清正は賤ヶ岳の戦い後も、秀吉に従い各地を転戦し活躍する。天正13年（1585）7月、秀吉は関白に就任した。この時に清正も従五位下・主計頭に叙任されている。そしてその翌年、秀吉の九州征伐に加わった。そのように、つねに秀吉に付き従い、

豊国の筆による「七本槍高名之図加藤清正」。賤ヶ岳の戦いにおける清正らの活躍は、しばしば物語や錦絵、講談の題材となった。
（国立国会図書館蔵）

三人の築城名人

清正公の長烏帽子兜のレプリカ。実物は清正公自筆になる「南無妙法蓮華経」と書いた紙を張り合わせて長烏帽子をつくり黒漆の下地に銀粉を塗ったもの。
［妙行寺蔵］

多くの武功を挙げる。天正16年（1588）、肥後国の領主だった佐々成政が失政により改易されると、代わりに肥後北半国19万5000石の領主となった。ちなみに残りの半国は、清正とは徹底して反りの合わない小西行長に与えられた。

肥後に入った清正は、隈本城（熊本城）を居城に定めた。若干27歳という若さでいきなりの大名への出世であった。しかも佐々成政が統治に失敗したほど治めるのが難しいとされた肥後を、清正は見事な手腕を発揮、難なく治めていく。とくに治水工事、新田開発を積極的に行い、南蛮貿易など商業育成にも力を入れたため、清正の治世で肥後の国はとても豊かになったといわれている。

ちなみに秀吉は清正に恩賞をとらせる際、肥後半国と讃岐一国のどちらか好きな方を選ぶように声をかけたという。その際、つねづね秀吉が「唐天竺まで攻め入る」と言っていたことを思い出し「それがしが唐入りの先鋒を務めますゆえ、それに都合のよい肥後半国で」と答えた。これには秀吉もご満悦であったという。

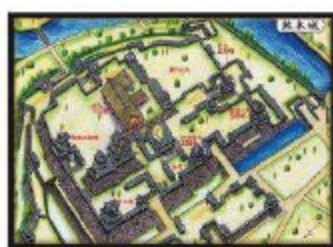
文禄元年（1592）から始まった文禄の役では、清正は2番隊主将を務め鍋島直茂、相良頼房を副将に総勢約2万3000の軍勢を率いて朝鮮へと渡った。そして1番隊の小西行長とともに先鋒を務め、李氏朝鮮の首都であった漢城を目指して先

# 熊本城

## 実戦本位の堅城の出現に天下人家康も肝を潰した

| | |
|---|---|
| 所在地 | 熊本県熊本市 |
| 築城年 | 慶長6年（1606） |
| 別名 | 銀杏城 |
| 構造 | 梯郭式平山城 |
| 主な城主 | 加藤清正、細川忠利 |
| 遺構 | 櫓、門、塀、石垣、堀 |
| 再建 | 外観復元天守、本丸御殿 |

### 熊本城（くまもとじょう）

阿蘇山の火砕流が積もった茶臼山全体を利用し、さらに城の南東を流れる白川を外堀、それと合流する坪井川と井芹川を内堀に利用している。さらに東側が高く、西に向かって低くなる地形を巧みに利用し、東に天守をはじめとする本丸を置いた。城の東と南は坪井川と高い石垣で強固に守られている。出入り口も石垣と櫓が配置された枡形で、鉄壁の守りを形成する。

右／右は加藤時代に築かれた石垣、左は細川時代に増築された石垣。曲線の違いが一目瞭然。左／復元された本丸御殿。ここに豊臣秀頼を迎え入れる計画だったのかも知れない。

左端／焼失する前の熊本城天守。
（現地案内板より）

空堀と30もの高石垣上に聳える宇土櫓。並みの城なら天守閣の大きさだ。

を競った。漢城攻略後も李氏朝鮮の2王子を生け捕りにし、さらにオランカイ（満州）あたりまで進軍。その戦いぶりは朝鮮軍から鬼神のように恐れられ、清正の旗印を見ただけで逃げ出す軍もいたほどである。

しかし補給船が延びきってしまい、次第に食糧不足に陥ってしまう。さらに明からの援軍や朝鮮の義兵によるゲリラ戦などで、次第に日本軍は大苦戦に陥る。清正の軍も例外ではなく、餓死や凍死する者が相次いでしまった。そんななか、明・朝鮮との和平交渉が始まる。だが清正が交渉の邪魔になると考えた小西行長と石田三成は、秀吉に清正のことを讒訴（事実を曲げて報告し、他人を陥れること）した。

怒った秀吉は清正を帰国させ、京で謹慎処分とする。しかし文禄5年（1596）9月に発生した大地震で秀吉がいた伏見城が倒壊。清正は謹慎の身ながら即座に駆け付けたことで、許しを得たのである。

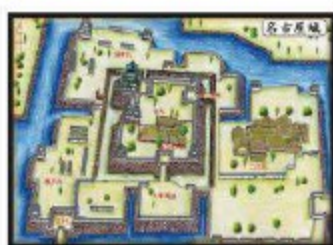
慶長2年（1597）に始まった慶長の役でも先鋒となる。当初の目的を果たした清正は、西生浦倭城の東に新たに築城する蔚山の地に入り、自ら縄張りを行った。その蔚山城が完成する前、明と朝鮮の連合軍5万7000が攻め寄せてきた。清正はこれをわずか1万の兵で迎え撃ち、援軍到着までの10日の間、相手に2万もの損害を与えたのであった。

# 名古屋城

## 自ら申し出て普請した天守台石垣は高度な技術の結晶

所在地　愛知県名古屋市
築城年　慶長14年（1609）
別名　金鯱城、柳城
構造　梯郭式平城
主な城主　徳川義直、慶勝
遺構　櫓、門、庭園、石垣、堀
再建　外観復元天守、本丸御殿

### 名古屋城（なごやじょう）

慶長13年（1608）、徳川家康はそれまで尾張国の中心となっていた清洲城では大軍が収容できないと考え、新たな城を築くことにした。3つの候補地から家康が選んだのは名古屋である。築城予定地の台地は西面と北面の高さが10mの断崖で、下には泥沼が広がり、さらに庄内川や木曽三川が流れる天然の要害であった。しかも東と南に城下町に適した平野が広がる。

右／名古屋城最大の石材。黒田長政の担当場所だが、あまりの巨石のため石垣の名手にあやかり「清正石」と呼ばれる。左／復元中の本丸御殿内部。

昭和初期の名古屋城。
（現地案内板より）

三人の築城名人　加藤清正

天守台の石垣は清正が進んで受け持った。高さ20mもの高石垣で、ここでも清正流扇の勾配が生かされている。

## 多くの技術者を招聘し
## 清正流の石垣を確立する

関ヶ原の戦いで清正は、朝鮮の役でのわだかまりもあり、徳川方に就いた。戦後、熊本で西軍の動きを抑えた功により、肥後一国54万石に加増。そして後に天下の名城・堅城と言われる熊本城を築くのである。それまで清正は古くからある隈本城に入っていた。新たな城の建築場所として目を付けたのは、その隈本城の範囲も含めた茶臼山丘陵一帯であった。総面積は980ha。これは東京ドームが楽に20面以上も入る大きさだ。

城は脆弱な阿蘇山火山灰層の上に建てるため、建造物の重量に耐えられるように頑強な石垣を積む必要がある。そのため弓状の曲線を描いた高石垣が構築された。家康はこの城の縄張り図（平面図）を見ただけで、その堅牢さに唸ったという。そして城の完成とともに、隈本の地名を熊本に変えたのであった。

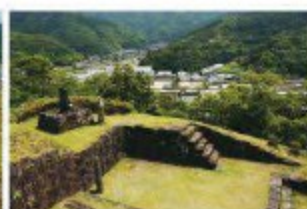
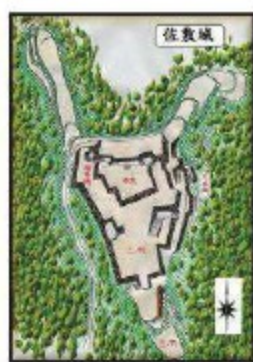
清正が築城名人と成り得たのは、若い頃から秀吉のもとで、様々な城づくりの現場に携わったことが影響している。聚楽第の普請にともない、自らの屋敷を建てたことから始まり、小田原攻めの際の石垣山一夜城、肥前名護屋普請奉行、そして朝鮮での築城で、それぞれの専門職人との関わりを深めた。

# 佐敷城

## 飛び地となっていた領地を確保するために大改修された城

所在地　熊本県芦北町
築城年　南北朝期
別名　無
構造　山城
主な城主　相良義陽、加藤重次
遺構　石垣、曲輪

### 佐敷城（さしきじょう）

南北朝まで遡るほど歴史の古い城だが、現在残されている石垣や遺構は、加藤清正時代のもの。当初、肥後半国が所領であり、佐敷は飛び地であったため、領地支配のためにはしっかりとした城が必要だったわけである。規模自体はさほど大きくはないが、石垣の見事さには舌を巻く。城代の加藤重次はもともと渋谷姓であったが、有能であることから清正に重用された。

右／各曲輪への出入り口はきっちり枡形となっている。近世城郭として完成されている。左／二の丸から望む佐敷駅。その向こうには佐敷川と八代海が望める。（撮影◎金盛正樹）

二の丸付近から本丸を見上げたところ。元和の一国一城令で廃城になり、寛永年間には破城が行われたが、それでも石垣の保存状態は良好。

なかでも石垣に関しては、当時最高の技術を習得していた技術者たちの多くを家中に招聘している。「扇の勾配」と呼ばれる清正流（せいしょうりゅう）の石垣は、こうした技術者らとともに確立した、優れた技法なのである。これは熊本城や名古屋城に残されているので、今も見ることができる。清正の城の特徴は、美しくそして堅牢な石垣に尽きるのである。

# 八代城

## 次世代にも受け継がれていた卓越した石垣の技術

| | |
|---|---|
| 所在地 | 熊本県八代市 |
| 築城年 | 元和8年（1622） |
| 別名 | 白鷺城 |
| 構造 | 輪郭式平城 |
| 主な城主 | 加藤忠広、松井興長 |
| 遺構 | 天守大、石垣、堀 |

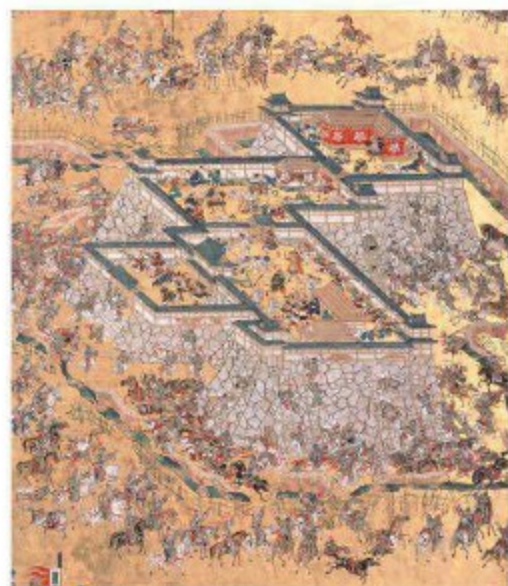
右／二の丸や三の丸も配置されていたかなり大きな城であったが、現存するのは本丸とそれを囲む石垣、水堀のみ。建物は残されていないが、天守台と小天守台は残っている。この城を築いたのは清正の息子・忠広である。その石垣の造りは父譲り。上／水堀に囲まれているのが本丸部分。かつての城域は今の3倍はあった。(八代市)

# 江戸城

## 将軍の居城にも足跡を残す加藤流の美しい石垣

| | |
|---|---|
| 所在地 | 東京都千代田区 |
| 築城年 | 長禄元年（1457） |
| 別名 | 千代田城 |
| 構造 | 輪郭式平城 |
| 主な城主 | 太田道灌、徳川家康 |
| 遺構 | 櫓、門、石垣、土塁、堀 |

江戸城旧本丸の東南隅に位置する富士見櫓からは、品川の海や富士山が見られたという。現存の三重櫓は万治2年(1659)の再建で、江戸城本丸の遺構として貴重な存在だ。石垣は伊豆の自然石で、関東大震災でも崩れなかった。この石垣を普請したのが加藤清正だと言われている。
(撮影◎野田伊豆守)

# 蔚山倭城（うるさんわじょう）

## 明・朝鮮連合軍を2度にわたり撃退した鬼加藤の城

| | |
|---|---|
| 所在地 | 大韓民国蔚山広域市 |
| 築城年 | 文禄元年（1593） |
| 別名 | 烽火城 |
| 構造 | 山城 |
| 主な城主 | 加藤清正 |
| 遺構 | 石垣 |

上／加藤清正が縄張りをした蔚山の城は、完成直前に明・朝鮮連合軍5万7000に攻められる。城を留守にしていた清正は即座に戻り、籠城兵1万の指揮を執ると、援軍が来着するまで城を守った。2度目の攻撃の際、清正は籠城の準備を整えていたため、難なく敵を撃退する。
(「朝鮮軍陣図屏風」[第一図] 鍋島報效会蔵)

COLUMN 2

# 復興への道標「熊本城」の今

**2016年の熊本地震から2年。大部分が被害を受けた「熊本城」の復旧工事は今、着々と進んでいる。最新の復興の状況を熊本城総合事務所に聞く。**

## 一歩一歩進んでいく復旧は街の人々の心の支え

加藤清正が築いた「熊本城」。かつて茶臼山と呼ばれた丘陵地に建ち、黒の板張りが特徴的な威風堂々とした佇まいは、熊本市街地から見てもとても目立つ。街の人々の誇りでもあるその熊本城は、２０１６年４月の熊本地震で大部分が被災した。国の重要文化財に指定されている建造物13棟全てが被害を受け、うち2棟は倒壊。大天守と小天守など、再建または復元された建造物は20棟が被害を受け、そのうち5棟は倒壊した。また加藤清正が築いた石垣を含め９７３面ある石垣は、５１７面が崩落や膨らみ、緩みを来した。

震災から2年が経った今、熊本城では着々と復旧への歩みが進んでいる。国の重要文化財に指定されている宇土櫓や北十八間櫓など13の建造物は、全てが被災した。文化財ということもあり、以前の状態に組み直す必要がある。崩れた石に番号をふり、図面をおこす。気の遠くなるような作業だ。しかし日々着実に、復旧に向けて現在も続いている。

「熊本では現在も仮設住宅で生活されている方々がいます。まずは市民の生活が第一。しかし市民の方からは、『損傷したままの熊本城は痛々しい。一刻も早く復旧し、復興のシンボルとしたい』といった声もいただいています」と話してくれたのは熊本城総合事務所の野本達雄さん。

角石のみで支えられる状況にあった飯田丸五階櫓。崩壊を防ぐために組まれたアーム状の鉄骨が解体され、本格的な復旧作業が始まった。

# 熊本城再建工事の流れ

### 2018年度　天守閣復旧工事

6階建の大天守は最上階を再建。復興のシンボルでもある大天守の再建を優先に、2019年秋頃の大天守の外観復旧を目指す。大天守と同時に、小天守の再建を進める。

### 2019年度　大天守外観完成

秋に大天守外観が復旧予定。現在は二の丸から先は近付けないが大天守の付近まで仮設の見学通路を設置する予定。仮設見学通路から大天守を間近で見られるようになる。

### 2021年度　天守閣の公開

大天守内部、小天守外観と内部の復旧を完了。場内はまだ復旧作業が進むが、建設された仮設の見学通路から見学できる。2021年度中に、天守閣の一般公開を目指す。

### 2023～2027年度　3つの櫓の復旧工事完了

2023年～2027年をめどに、監物(けんもつ)櫓と平櫓、そして飯田丸五階櫓が復旧完了。仮設の見学通路や城の周囲からそれぞれの櫓が見られるように。

### 2028～2032年度　本丸御殿大広間等の復旧

本丸御殿の大広間の復旧が完了し、大広間の中が見学可能に。宇土櫓と重要文化財の櫓群の東十八間櫓なども復旧が完了する。仮設の見学通路などから観覧可能になる。

### 2033～2037年度　復旧完了

天守閣エリアや竹の丸の工事が順次完了し間近には観覧できなかった復旧した石垣や建造物を観覧できるようになる。崩壊した不開門(あかずのもん)などが復旧完了。

### 2038年度　熊本城全てのエリアが公開

2037年度中に、熊本城全体の復旧が完了し、仮設の見学通路や工事足場などが撤去される。2038年度から、全てのエリアに入れるようになる。

２０１８年３月28日に策定された「熊本城復旧基本計画」では、工事完了には20年を要するとされている。つまり復旧した熊本城を見られるのは２０３８年。２０３８年の完成を目指し、目下、城の象徴でもある大天守と小天守、そして飯田丸五階櫓の復旧を最優先とし作業が続けられている。

大天守の外観工事の復旧は２０１９年秋を予定しており、外観復旧後には間近で天守を見られる見学通路も設置される予定だ。復興のシンボルである大天守をぜひ見学したい。また熊本城近くの市役所の14階は一般開放されているので、工事の様子を見ることができる。熊本城を訪れることで、復興支援の一助となれば幸いだ。

震災後に設計図をおこし、一から作り直された大天守の鯱。2018年4月末に、大天守屋根へ設置。

飯田丸五階櫓は、まず櫓部分を解体。石垣の修復を行った後、櫓の復旧に着手する。

解体された飯田丸五階櫓の屋根。一度解体され、使える部材はそのままに再構築される。

## 復興のシンボル 熊本城のこれから

ぜひ熊本城に足をお運びください!!

熊本城総合事務所
副所長・**野本達雄**さん

熊本城は復興のシンボルとして、県民・市民の方から一日も早い復旧が望まれています。以前の熊本城の姿に戻すことはもちろんですが、復旧計画は１００年先を見据えています。耐震補強といった物理的な対処はもちろんのこと、震災の記憶を後世に残していくことも大切です。仮設見学通路など、復旧過程においても見学可能な設備を整備していきます。ぜひ熊本城にお越しください。

本丸御殿にある「昭君の間」。絢爛豪華な壁や襖は被害を免れた。公開が待ち遠しい。

# 三英傑が残した名城を歩く

## 城に秘められた英雄たちの野望

城の天守を初めて築いた織田信長に、農民から天下人に上り詰めた豊臣秀吉。そして泰平の世を実現した徳川家康。戦国時代において抜きん出た傑物たち、彼らが築いた城を巡ってその野望を知る。

天賦の才によって
新しい国造りを目指し
実現まであと一歩で散った
戦国の風雲児

# 織田信長

信長、秀吉、家康。後に戦国時代の三英傑と呼ばれる天下を統一することに腐心した戦国大名だ。なかでも信長は、後世の二人とは違う次元で国造りを目指していた様子がうかがえる。志半ばとなった新しき国の形。それは信長のみぞ知る。

文◎安芸健男　撮影◎佐藤佳穂（一部）

## 天下統一のモデルケースを後世に残した尾張のうつけ者

天正10年（1582）6月2日早朝、明智光秀軍が京都四条の本能寺を包囲。その物音に気づいた小姓・森蘭丸が桔梗の紋のついた旗を見て光秀の謀反と知り、信長に逃げるように勧めたが「是非に及ばず」と、信長自ら槍を持ち反撃を試みた。しかし多勢に無勢で、信長は火の放たれた本能寺で自害した。ここに信長の目指した天下統一、そして新しい国造りは、はかなくも夢幻と消えた。

歴史に「もし」はないが、この本能寺の変がなければ秀吉、家康の天下統一を待たずに、二人を有力な「譜代大名」として数年のうちに天下の平定は成し遂げられていたことだろう。しかし実際は家康が秀吉に従い、信長の家臣だったライバル勢を秀吉が倒すまで

### 織田信長

天文3年（1534）5月12日、尾張国（愛知県）の戦国大名・織田信秀の嫡男として生まれる。若い頃の奇抜な行動によって尾張の大うつけと呼ばれていた。永禄10年（1567）稲葉山城の戦いの後、「天下布武」の朱印を使い始めて天下統一を目指す。足利義昭の室町幕府を滅亡させ、戦国時代を終わらせ天下統一に踏み出した。そのための強力な中央集権体制確立を目前にしたが、その一歩手前で明智光秀の謀反で、本能寺で自害した。享年49。

### 信長ゆかりの城

岐阜城（岐阜県）P90
安土城（滋賀県）P92
小牧山城（愛知県）
清須城（愛知県）
勝幡城（愛知県）
那古野城（愛知県）

PPA／アフロ

およそ9年を費やして天下は統一されたのである。

旧来の秩序を壊し新しい国を造るという高い志を持ち、群雄割拠の時代に颯爽と現れた風雲児信長。しかし比叡山の焼き討ち、一向一揆衆に対する長島の「虐殺」が信長のイメージとなって、評価が大きく分かれる武将の最右翼だろう。

確かにやり方の是非はあるだろうが、信長の見据える先には天下統一、そして新しい国造りという壮大な志があってのことだと思いたい。

戦国時代といえども守護大名は自らの領地の安泰と拡大、そのための隣国とのいさかい、と視点はそれほど広くはなかった。そこに自らの利益ではなく、国の在り方を問う信長が歴史の舞台に登場したのだ。そう考えると、先の比叡山焼き討ちなども、政教分離を図ったという違った見え方にならないだろうか。

また、国造りにおいて後の秀吉、家康と違うのは、権威の象徴、朝廷との関係だ。秀吉が関白になったり、家康が征夷大将軍になったり、権力を持つに至るために両者は旧態依然の形で朝廷の権威を利用しているが、信長は権威と権力を我がものにしようとして、絢爛豪華な神の館「安土城」を造って、この世に君臨しようとしたのだろう。

しかし、本能寺の変後、野望の象徴安土城はあっけなく廃城となっている。遠くを見つめた信長の国造りとともに。

1896年、楊斎延一（ようさいのぶかず）によって描かれた本能寺焼討之図。絵中左には森蘭丸、真ん中に森蘭丸を討った宝蔵院流の槍の名手・安田作兵衛。右に織田信長が描かれている。

昭和31年に鉄筋コンクリート造り3層4階構造で再建された岐阜城の城内に展示されている「木造織田信長坐像」の複製。

長篠の戦いで多くの火縄銃を用い武田軍に圧勝した例など、戦国時代、合戦において効果的に火縄銃を使い始めたのが織田信長だといわれている。

織田信長系譜図

- 信定
  - 信秀
    - 信広
    - 濃姫＝織田信長
      - 信忠 ― 秀信（三法師）
      - 信雄
      - 信孝
      - 秀勝
      - 勝長 ― 勝良
      - 信秀
    - 信行
    - 信包
    - 信時
    - 信興
    - 長益
    - 長利
    - 市
  - 信康
  - 信正
  - 信光

| 年 | 年齢 | 出来事 |
|---|---|---|
| 天文 3（1534） | 1歳 | 尾張の戦国大名・織田信秀の嫡男として生まれる。 |
| 天文 11（1542） | 9歳 | 那古野城主となる。幼少期は「尾張の大うつけ」と呼ばれていた。 |
| 天文 16（1547） | 14歳 | 松平竹千代（徳川家康）が織田の人質となり信長と過ごす。 |
| | | 吉良大浜の戦いで初陣。 |
| 天文 17（1548） | 15歳 | 美濃の斎藤道三の娘、濃姫と結婚。織田と斎藤が和睦。 |
| 天文 20（1551） | 18歳 | 父・信秀急死。織田の家督を継ぐ |
| 天文 23（1554） | 21歳 | 木下藤吉郎が信長の家来になる。 |
| 弘治 元（1555） | 22歳 | 清洲城に本拠を移す。 |
| 弘治 3（1557） | 24歳 | 実弟・信行の謀反を知り清洲城にて殺害。 |
| 永禄 2（1559） | 26歳 | 上洛して足利義輝に謁見。尾張を平定する。 |
| 永禄 3（1560） | 27歳 | 桶狭間の戦いで、5万の今川軍を3千の兵で破る。 |
| 永禄 5（1562） | 29歳 | 三河の家康と清須同盟を結ぶ。 |
| 永禄 6（1563） | 30歳 | 清須城から小牧山城に本拠を移す。 |
| 永禄 9（1566） | 33歳 | 木下藤吉郎秀吉に墨俣城を築かせる。 |
| 永禄 10（1567） | 34歳 | 美濃の斎藤龍興を破り、美濃を平定。井ノ口を岐阜とする。 |
| | | 楽市楽座を始める。 |
| | | 妹・お市の方を浅井長政へ嫁がせる。 |
| 永禄 11（1568） | 35歳 | 足利義昭を擁して上洛。 |
| 永禄 12（1569） | 36歳 | 宣教師ルイス・フロイスと対面、キリスト教布教を許す。 |
| 元亀 元（1570） | 37歳 | 近江・常楽寺で相撲を興行。 |
| | | 姉川の戦いで、浅井・朝倉連合軍を破る。 |
| 元亀 2（1571） | 38歳 | 比叡山焼き討ち。延暦寺を攻める。 |
| 天正 元（1573） | 40歳 | 足利義昭を反乱の罪のより京から追放。 |
| 天正 3（1575） | 42歳 | 長篠の合戦で大量の鉄砲を使用し、武田勝頼に勝利。 |
| 天正 4（1576） | 43歳 | 安土城築城を始める。岐阜から安土に移る。 |
| | | 木津川の戦いに敗れる。 |
| 天正 5（1577） | 44歳 | 秀吉を毛利攻略のため中国地方に派遣。 |
| 天正 6（1578） | 45歳 | 第2次木津川の戦いで毛利水軍を破る。 |
| 天正 7（1579） | 46歳 | 安土城天主完成。 |
| 天正 10（1582） | 49歳 | 天目山の合戦で武田軍を殲滅させる。 |
| | | 本能寺の変起こる。明智光秀の謀反により自刃する。 |

永禄10年（1567）稲葉山城の戦いの後、「天下布武」の朱印を使い始め、天下統一を具体的な形で知らしめるようになった。（岐阜県歴史資料館蔵）

標高329mの金華山の山頂に建ち町のシンボルにもなっている岐阜城天守。現在の姿は昭和31年（1956）に再建された復興天守。

［岐阜県岐阜市］

# 岐阜城

## 美濃、尾張を見渡し天下布武を宣言する

豊かな緑を茂らせて屹立する標高329mの金華山。
その山の頂に存在感を放って白亜の天守が佇む。
戦国の雄・斎藤道三と若き日の織田信長が
国盗りの野望を重ねた美濃の名城・岐阜城。
壮大な眺めと、豪壮だったとされる城の歴史を辿る。

文◎[illegible]　撮影◎[illegible]　協力◎岐阜市、岐阜市教育委員会

所在地　岐阜県岐阜市
築城年　建仁元年（1201）
廃城年　慶長6年（1601）
別　名　稲葉山城
形　態　山城
主な城主　斎藤道三、織田信長、池田輝政
主な遺構　上格子門跡、二の丸門跡、馬場跡、本丸井戸

## 圧巻の景色が広がる「天下布武」の拠点となった城

金華山の頂に建つ白亜の天守。眼下にはたおやかに蛇行する長良川、さらに天守からは恵那山や伊吹山などの山々、そして濃尾の大平野が一望できる。織田信長は、手中に収めたこの城の壮大な景色を前に、「天下布武」を宣言する。

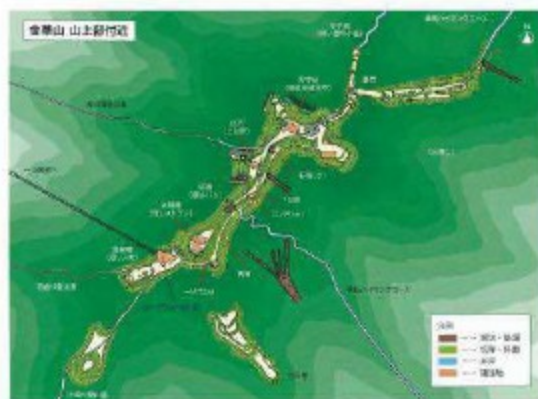
かつては井ノ口城、稲葉山城と称した岐阜城。鎌倉時代に幕府の執事・二階堂行政が初めて金華山に山城を築いたことに始まり、室町時代の天文8年（1539）には、美濃国の実権を握った斎藤道三が入城して軍事・行政の拠点とした。

その後、道三は稲葉山城を長男の義龍に譲ったものの、不仲となった義龍と戦って敗死。やがて義龍から息子の龍興へと城主が移っていくが、永禄10年（1567）、この城を虎視眈々と狙っていた織田信長によって攻め落とされるのである。

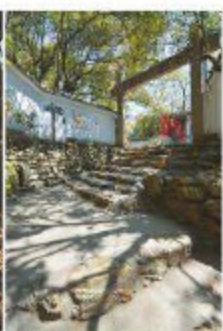
小牧山城にいた信長は居城を移すべく稲葉山城に大規模な改修を加え、城下町造りにも着手。この時、地名を「井ノ口」から「岐阜」に、城も「岐阜城」と改名する。さらに自由な商いを保証する「楽市楽座」を制定したのも岐阜であった。

「美濃を制するものは天下を制する」。それは信長の若い頃からの夢だった。岐阜の意味は、中国の古代王朝・周の文王が拠点とした〝岐山〟、孔子の生誕地〝曲阜〟に因む。

〝天下〟という言葉を好んだ信長は、住まいも人を見下ろす場所にこだわった。岐阜城は金華山の頂の城塞と山麓の館から成っていたが、主な居住は家族共々山頂の城塞だったという。一方、山麓館は客人との対面などに使われたが、こちらは近年の発掘と研究で壮麗な御殿だったことが明らかになりつつある。

岐阜城はその後、信長の嫡男・信忠、池田輝政、羽柴秀勝、信忠の息子・秀信など次々と城主が変遷。しかし、慶長5年（1600）の関ヶ原の戦いで西軍についた秀信が前哨戦で惨敗すると、翌年に廃城となり、天守や櫓は加納城に移された。

右／昭和初期に吉田初三郎が描いた「ながら川の鵜飼」。絵から長良川沿いに町が発展し、金華山が屹立してる様子がわかる（岐阜市歴史博物館蔵）下／岐阜城石垣を利用して、明治43年5月に竣工した模擬城。これは昭和18年に焼失してしまうが、昭和31年に現在の岐阜城が再建された。（岐阜市歴史博物館蔵）上／金華山山頂図　現在は麓からロープウェイで一気に登れるが、大手道の七曲がり登山道、馬の背登山道などの昔からの登城道も整備されている。

右2点／山頂部には二の丸門や城壁が再建されているほか、信長時代の石垣も随所に見られる。左／再建された岐阜城天守からは眼下に長良川が望めるほか、東に恵那山、北東に乗鞍や北アルプス、西に伊吹山や鈴鹿山系、南は濃尾平野や木曽川、伊勢湾までもが見渡せ、そのスケールはまさに天下一の絶景。

岐阜城の案内をお願いした、岐阜市教育委員会事務局の内堀信雄さん。岐阜城入り口の「信長公居館」の発掘調査にあたった。

［滋賀県近江八幡市］

# 安土城

## 琵琶湖を制するネットワークの要
## 豪華絢爛の「神殿」が辿った運命

天下統一を確実なものにするため想像を超える壮大な城を安土の地に築き上げた信長。それは天下人を知らしめ、さらに神の領域に自らを置こうとする行為でもあった。しかし、その先にあったものは……。

文◎岩谷雪美　撮影◎佐藤佳穂

| | |
|---|---|
| 所在地 | 滋賀県近江八幡市 |
| 築城年 | 天正4年（1576） |
| 廃城年 | 天正13年（1585） |
| 別名 | 無 |
| 形態 | 山城 |
| 主な城主 | 織田信長、織田秀信（三法師） |
| 主な遺構 | 大手道、石垣、天主礎石 |

1992年開催の「スペイン・セビリア万国博覧会」の日本館のメイン展示として原寸で復元された、安土城天主の最上部5階・6階部分。今は「安土城天主 信長の館」に保存・展示されている。金箔10万枚を張った外壁や、金碧障壁画など目を見張る豪華な造り（「内藤昌 復元監修 安土城天主 信長の館・近江八幡市蔵）

## 琵琶湖の水運を握り その中核となる城を築く

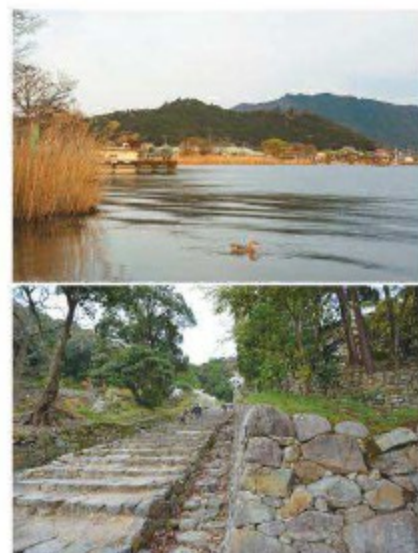
岐阜で「天下布武」を宣言した信長だったが、9年後の天正4年(1576)には城を嫡男の信忠に譲り、自身は近江の安土にて新たな城造りを開始。前年の長篠の合戦で武田勝頼を打ち破り、天下統一をさらに推し進める拠点を造るためだった。当代最高の職人を動員し、琵琶湖畔の安土山に築城したのは前代未聞の高層華麗な城。輝く城を見上げた人々は、信長が天下人であることを思い知らされるのである。

信長がこの地にこだわったのは、琵琶湖の湖上水運が発達しており、京都と岐阜を結ぶ上で重要な場所だったからだ。永禄13年(1570)以降、琵琶湖近くでは宇佐山城、佐和山城などを確保し、水運の権益を固めていった信長。元亀2年(1571)に滋賀郡に影響力のあった延暦寺を焼き討ちすると、直後に明智光秀に命じて坂本城を築城。これにより、岐阜、佐和山、安土、坂本、京都という陸路と水路のルートが信長の意のままになった。琵琶湖の内湖・西の湖に細長く突き出した標高199mの安土山。それまでの城は土塁が主流だったが、安土城では山域全体に大規模な石垣を施した。そして、山頂部に建てたのは木造高層建築〝天主〟。権威を見せつける城となった。

着工から約3年、夢の城はついに完成し、城下の町も楽市楽座の活況が定着。しかし、3年後の天正10年(1582)6月2日、信長は本能寺の変で非業の死を遂げる。そして山崎の戦いの後、何者かの手によって天主や本丸は全焼してしまうのである。その後は秀吉の庇護のもと孫の三法師(秀信)や息子の信雄(のぶかつ)が継ぐものの、天正13年(1585)に小牧長久手の戦いで信雄が秀吉に屈すると織田氏は終焉を迎え、安土城も廃城となる。

安土城は石垣や天守閣を初めて導入した近世城郭の創始ともいわれるが、外観も構造も手がかりが少なく謎を秘めている。しかし、〝幻の名城〟として語り継がれ、今なお様々な想像と浪漫を誘っている。

「江州安土古城図」。手前中心部から大手道が本丸跡と天主跡へと続いている。大手道の両側には伝羽柴秀吉邸と、伝前田利家邸があったとされる。半島のように三方を湖に囲まれている。（国立国会図書館蔵）

琵琶湖の水運を利用した安土の城下町。上の古城図からも往時の様子がうかがえる。湧水が流れる涼やかな風景が楽しめる。また織田信長の旗が揺らめく公園からは春のイベント時に船も出ている。

上／琵琶湖の内湖・西の湖。その先の山並みが標高199mの安土山で、山頂部に安土城の天主が建っていたとされる。下／特別史跡安土城跡の大手道。大手口から真っすぐに約180mの石段が続き、山頂の伝本丸跡や天主へと誘う。道の両側には、伝羽柴秀吉邸、伝前田利家邸の建物跡なども見られる。（協力◎摠見寺）

## 足軽から天下人へ、人間力と智恵で戦乱の世を終わらせた戦国の英雄

# 豊臣秀吉

木下藤吉郎から羽柴秀吉、豊臣秀吉へ。知恵と度胸と愛嬌で、足軽から天下人に駆け上がった。一代の英雄は今も城下町では「太閤さん」と慕われている。人間臭い魅力と知力を兼ね備えた秀吉の生涯とは――。

文◎阿部文枝

秀吉の足跡で確かなものは永禄4年（1561）に始まった美濃攻めでの活躍。続いて、元亀元年（1570）、越前朝倉義景討伐（金ヶ崎の戦い）の際、退却する織田軍の殿軍を務めて追撃を振り切り、秀吉の「金ヶ崎の退き口」として名を上げた。姉川の戦いの後、小谷城に近い横山城、虎御前山の前線基地を任される。その論功行賞として、長浜で初めて一国一城の主となった。天正5年（1577）には中国攻めの総大将に。

秀吉の運命が大きく変わるのが天正10年（1582）の本能寺の変である。

### 豊臣秀吉

足軽から足軽大将になり、美濃攻め、朝倉攻めで戦功を挙げる。天正元年、信長より湖北三郡と小谷城を拝領、長浜で初の築城。天正5年からの中国攻めの最中に本能寺の変が起こり、迅速に戻って山崎の戦いで明智光秀を破る。清須会議で信長の孫を擁立。賤ヶ岳の戦いで柴田勝家を破り、小牧長久手の戦いで徳川家康に戦略的に勝利。翌天正13年に関白宣下を受け、後に天下統一。絢爛な安土桃山時代を築いたことでも知られる。

秀吉ゆかりの城

長浜城（滋賀県）P96
伏見城（京都府）P98
姫路城（兵庫県）P32
山崎城（京都府）
大坂城（大阪府）
肥前名護屋城（佐賀県）

### 天下統一、刀狩、太閤検地 構造改革ができる男

関白、太閤にまで上り詰めた豊臣秀吉の生涯は数々の逸話で彩られている。なかには江戸時代の『太閤記』から生まれたフィクションもある。

豊臣秀吉像部分［長浜八幡宮蔵／協力◎長浜城歴史博物館］

世に言う「中国大返し」で高松より迅速に戻り、山崎の戦いで明智光秀を破って後継者候補に躍り出た。清須会議、賤ヶ岳の戦い、小牧長久手の戦いを経て天下を手繰り寄せた。天正13年（1585）、関白宣下を受ける。以後は四国、九州、関東を次々平定。天下統一を成し遂げた。

天下人となった秀吉は朝鮮出兵を実行した。「これで秀吉は晩節を汚した」という評価もある。残される秀頼と豊臣政権への執着、徳川家康との暗闘……。晩年の秀吉は老残そのものだ。これほど毀誉褒貶が激しい人物も少ないだろう。

しかし、政治家としての秀吉は赫々たる業績を挙げたといってよい。第一の功績は天下統一である。長い戦乱の世に終止符を打ったことは日本史の中で特筆されるべき功績だ。

長浜城歴史博物館の太田浩司館長によれば「この国を〝平和〟にするという時代の課題がわかっていた。その点が他の戦国武将と違う」

次に刀狩と太閤検地を行った。兵農分離と石高制の構築。安定した農業政策を可能にして農本主義を確固たるものにするための政策だった。未来に目を向けて日本の構造改革ができた。それが豊臣秀吉という戦国武将の真価ではないだろうか。

浮世絵『豊臣勲功記』(1886年)から「木下須股城ヲ一夜ニ建築之図」。墨俣一夜城を伝説とする研究者も。

豊臣秀吉系譜図

- 弥右衛門 ＝ なか（大政所） ＝ 筑阿弥
  - 豊臣秀吉 ＝ おね（北政所）
  - 豊臣秀吉 ＝ 茶々（淀殿）（浅井三姉妹：茶々・初・江）
    - 鶴松
    - 秀頼（拾） ＝ 千姫
  - 江 ＝ 徳川秀忠
    - 千姫
- （全て養子）秀俊、於次秀勝、小吉秀勝、秀康、秀次、豪姫

| 年 | 年齢 | 事項 |
|---|---|---|
| 天文 6（1537） | 1歳 | 尾張国（愛知県）の中村に百姓・弥右衛門の子として生まれる。 |
| 天文 20（1551） | 15歳 | 浜松で今川義元の家臣・松下加兵衛之綱の使用人になる。 |
| 天文 23（1554） | 18歳 | 尾張に戻り、那古野（名古屋）城主・織田信長の家来になる。 |
| 永禄 4（1561） | 25歳 | 浅野長勝の養女・おね（後の北政所）と結婚する。 |
| 永禄 8（1565） | 29歳 | 「木下藤吉郎秀吉」と名乗る。 |
| 永禄 11（1568） | 32歳 | 信長の上洛に伴い、明智光秀、丹羽長秀らと京都に行き、京都奉行の一人となる。 |
| 元亀 元（1570） | 34歳 | 金ヶ崎（福井県敦賀市）の戦いで殿（しんがり）を務める。6月下旬の姉川の戦いに出陣。この頃、横山城に入る。 |
| 天正 元（1573） | 37歳 | 小谷城（滋賀県長浜市）の落城で浅井氏が滅亡すると、信長から小谷城と北近江三郡（坂田・浅井・伊香）を与えられる。「羽柴」姓に改める。 |
| 天正 2（1574） | 38歳 | 今浜（滋賀県長浜市）に城を造り始め、地名を「長浜」に改めると共に、城下の整備を始める。 |
| 天正 5（1577） | 41歳 | 織田方として中国（地方）攻めに出陣する。 |
| 天正 8（1580） | 44歳 | 三木城（兵庫県三木市）の別所長治を攻める。姫路城を修復し本拠にする。 |
| 天正 9（1581） | 45歳 | 鳥取城の吉川経家を攻める。 |
| 天正 10（1582） | 46歳 | 備中高松城（岡山県岡山市）の清水宗治を攻める。本能寺の変（6月2日）で信長が自害したことを知って急遽「中国大返し」で戻り、明智光秀を山崎の戦いで破る。「清須会議」で三法師（織田秀信）を信長の後継者に推し、優位に立つ。 |
| 天正 11（1583） | 47歳 | 柴田勝家を賤ヶ岳の戦い（4月20・21日）で破る。普請惣奉行に黒田官兵衛を任命。大坂城建設を9月1日より始める。 |
| 天正 12（1584） | 48歳 | 徳川家康が織田信雄（のぶかつ）を助けて秀吉と対戦した、小牧・長久手の戦いが起こる。家康と講和を結ぶ。 |
| 天正 13（1585） | 49歳 | 関白となる。 |
| 天正 14（1586） | 50歳 | 京都に聚楽第を築く。太政大臣となり「豊臣」姓を名乗る。 |
| 天正 15（1587） | 51歳 | キリシタン禁令を出す。 |
| 天正 18（1590） | 54歳 | 小田原城（神奈川県）の北条氏を攻める。 |
| 天正 19（1591） | 55歳 | 関白職を甥・秀次に譲り、太閤になる。 |
| 文禄 元（1592） | 56歳 | 諸大名に朝鮮出兵を命じる（文禄の役）。 |
| 文禄 2（1593） | 57歳 | 淀殿との間に二男・秀頼が誕生。 |
| 文禄 3（1594） | 58歳 | 京都・伏見に城を築く。 |
| 文禄 4（1595） | 59歳 | 関白を譲った秀次に切腹を命じ、聚楽第を壊す。 |
| 慶長 元（1596） | 60歳 | 2度目の朝鮮出兵を命じる（慶長の役）。 |
| 慶長 3（1598） | 62歳 | 8月18日、伏見城で亡くなる。 |

かつて大阪には豊臣の大坂城がそびえていた。最期は「露と落ち露と消えにし我が身かな 浪花の事も夢のまた夢」と詠んだ秀吉。波瀾の人生を果敢なく夢のようだったと詠う。

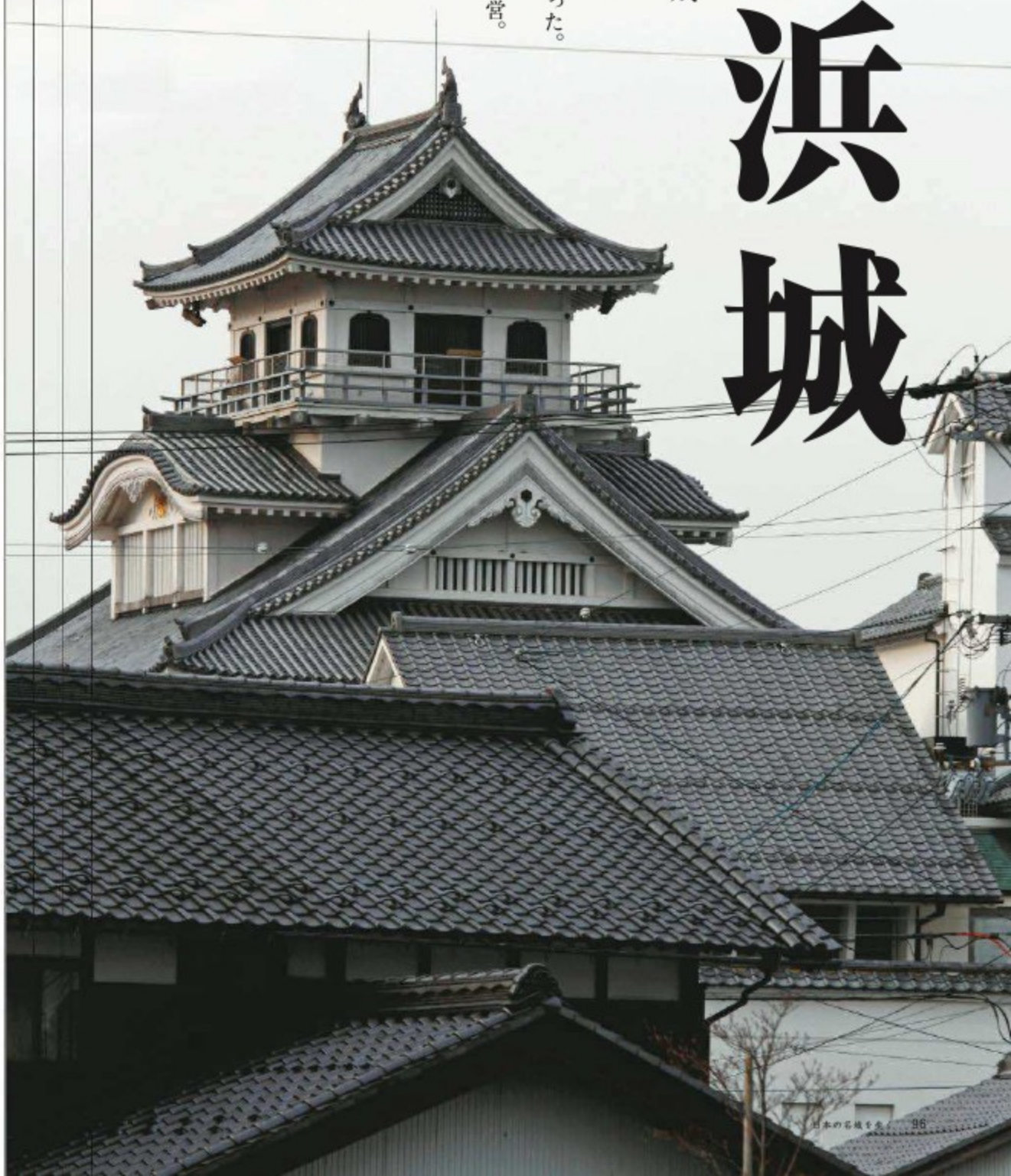
［滋賀県長浜市］

# 長浜城

## 城下繁栄のために湖畔に築城
## 商業政策の拠点になった城

秀吉が最初に築いた城は琵琶湖畔の長浜だった。舟運の港と北国街道が通る要衝の地で、城と城下がともに栄える、新時代の領国経営。湖岸にそびえていたという天守には、理想に燃える若き日の羽柴秀吉がいた。

文◎阿部文枝　撮影◎金盛正樹

所在地　滋賀県長浜市
築城年　天正2年（1574）
廃城年　元和元年（1615）
別　名　今浜城
形　態　水城
主な城主　羽柴秀吉、柴田勝豊、山内一豊、内藤信成・信正
主な遺構　石垣、堀、井戸跡

## 湖畔に本丸と天守
## 城内には港があった

長浜市豊公園。琵琶湖畔に近い、こんもりとした丘に秀吉の銅像が立っている。ここが長浜城の天守台があったという場所である。しかし、これは後の江戸時代の天守だ。実は、秀吉時代の長浜城がどういうものであったか、絵図面も古文書も残っていないので、よくわかっていない。

江戸時代、内藤氏の縄張りは湖に張り出して本丸と天守が建てられ周囲を石垣に守られていた。秀吉と同時代の坂本城も湖岸に天守が建てられていたことから、長浜城も似たような造りと推測される。天守も3層か5層のものだったといわれている。

『信長公記』によれば天正3年（1575）8月13日、信長がこの地を訪れた。「大(小)谷羽柴筑前守所に御泊」。宿泊は小谷城。1年以上経っても長浜城が完成していないことから、この城は時間をかけて造った立派な城であったと考えられる。

秀吉はなぜ小谷ではなく長浜の地に城を建てたのか。天守（長浜城歴史博物館）から周囲を見渡せば、答えは自ずと出てくる。北側の小谷城は典型的な山城である。対する長浜城は琵琶湖東岸に築かれた平城で、城下には北国街道が通る。南側には安土城、佐和山城、琵琶湖南西岸には明智光秀の坂本城、北西岸の高島には大溝城もある。

織田信長が安土城を建てたのは天正4年（1576）。近江を手中に収めた後、安土城を中心にして有力武将の支城を湖岸に点在させた。そう考えると、長浜の選択に信長の意向が働いたことは明白だろう。

秀吉に託されたのは城と城下町の造成だけでなく、長浜の立地を最大限に活用する領国経営であった。

当時の琵琶湖は湖上交通が盛んで長浜城の城内には港があった。城下には北国街道が通り中山道にも近く、交通の要衝であった。

港を持つ城郭と家臣屋敷、商工業が盛んな城下町。三位一体の城と城下町は、その時代にあって最も新しい形態の町だった。

城趾の琵琶湖波打ち際にある太閤井戸。長浜城は山内一豊や内藤信成らも城主に。誰の時代のものかは不明である。

右／天守跡とされる丘の上には石碑と秀吉像がある。左／長浜城の発掘調査で出土した「鬼板」。金箔瓦が多数見つかっているが、江戸時代の遺物の可能性もある。（長浜城歴史博物館蔵）

後代に町絵図や地籍図から判断して描かれた「長浜城図」。「秀吉公弐十八万石在城古輪図ノ写シ」とある。（長浜城歴史博物館蔵）

# 伏見城

［京都府伏見市］

実子の誕生に伴い政権復帰
交通の要衝に築いた秀吉最後の城

築城術に優れていた秀吉が、最後に築いた城が伏見城だ。交通の要衝の地に水陸交通の発達した城下町を築いた。政権復帰も城も町も、全ては実子の秀頼のために。この城で終焉を迎えた秀吉の遺言ともいえる城である。

文◎岡部文枝　撮影◎金盛正樹

所在地　京都府伏見市
築城年　慶長元年（1596）
廃城年　元和9年（1623）
別名　桃山城、木幡山城
形態　平山城
主な城主　羽柴秀吉、徳川家康
主な遺構　石垣、池

# 5層式の天守と12曲輪
# 秀吉の力の大きさを感じる城

豊臣秀吉が築いた最後の城・伏見城は、近代になって明治天皇伏見桃山陵になった。御陵に向かう道がすなわち伏見城に向かう大手筋だ。近鉄桃山御陵駅前の道を東に向かって行くと御陵の参拝口があった。行く手に鬱蒼とした森に覆われた山がある。これが標高約100m、頂上に伏見城を擁した木幡山である。

治部少丸、三の丸の南側の道を上がると、頂上一帯は平地になる。手前が二の丸跡、奥に進むと明治天皇陵がある。ここが伏見城の本丸跡だ。今はすっかり整地されて城の面影はないが、この城があった山の大きさからも、当時の秀吉が持っていた力の大きさを感じざるを得ない。

その縄張りは本丸と12曲輪で構成されていた。二の丸に淀殿、北側の松の丸に京極高吉の娘・松の丸殿、三の丸に織田信長の娘と高貴の側室が住み、空堀で隔てられていた。

城の遺構は北側の外堀、治部池などわずかだが、現在、北側のお花畑山荘跡には模擬天守が建てられている。5層の天守と3層の小天守の連立式天守と櫓門があり、そのありさまからも、秀吉最後の城の荘厳さが感じられる。

伏見は当初、甥の秀次に関白職と聚楽第を譲った後の隠居の地であった。文禄2年（1593）の秀頼の誕生で事情が変わった。また、文禄・慶長の役の後に来日する明の講和大使に、秀吉の威光を見せつける必要も生まれた。そこで、隠居屋敷でなく本格的な城を、伏見の指月に築城する。ところが、指月城は文禄5年（1596）の「慶長の大地震」で倒壊。秀吉はすぐさま木幡山に城を移し本格的な城郭を築いた。ここが政治の中心となり、城の周囲には洛中から大名屋敷が移ってきた。

秀吉の城造りの集大成ともいえる伏見城だけに、多くの曲輪を抱える壮大な城だった。しかし、慶長2年（1597）に完成した翌年、秀吉は伏見城で亡くなる。その後、伏見城は関ヶ原の戦いの時に炎上。秀吉最後の城はあっけなく消滅した。

国立国会図書館蔵

秀吉が築いた伏見城の本丸跡。現在は明治天皇陵になっている。この左手に二の丸があり、連郭式の縄張りだった。右手の下がった場所にある昭憲皇太后の東陵が曲輪の名護屋丸跡だ。

上／秀吉が築いた伏見城と城下町の絵図面。伏見城は宇治川を利用した総構えの本格的城郭だった。図では上が東側になる。

右／慶長年間に製造された伏見城の金箔瓦。秀吉の城と、家康が再建した城では、金箔の張り方が違い、時代がわかるという。中／慶長の小粒、豆板銀、丁銀。伏見は経済の中心地でもあった。左／桃山御陵参道には、伏見城の石垣の残石が置かれ、鑿（のみ）跡などが見られる。

御香宮神社蔵（右2点）

—三英傑の城と城下町—

## 数々の辛苦の末に天下を治め260余年の泰平の礎を築いた大将軍

# 徳川家康

「人の一生は重荷を負うて、遠き道を行くがごとし」数々の辛苦を経て、その頭頂から足先まで金言で形作られたかのような大人物となった家康。誰もが一目置いた人格が、彼を天下人へと押し上げていく。

文◎浅川俊文　撮影◎遠藤純(一部)

### 保守とは何か、保守政治とはいかにあるべきかを今も示す

もしも三英傑が現代に生まれていたら、さしずめ家康は保守政党の党首か大企業の社長に就いたのではないか。先達に学ぶ謙虚な姿勢、思慮深く慎重な性格、人材を活かし組織を束ねる統率力……。王道ともいえる保守気質と器の大きさを備えた家康だからこそ、200年以上の泰平の礎を築けたに違いない。

もちろん生来の気質も大きいが、育った環境も彼を保守たらしめている。

家康が生まれた頃の三河は、山林と田園が広がるのどかな農村地帯で、人々の暮らしも質朴そのものであった。華美を好まず忍耐強く、結束の固い三河人気質を、家康も色濃く受け継いでいる。信長と秀吉が、経済の発達によって進取の気質に富み、派手を好んだ尾

**徳川家康**

岡崎城で生まれたものの人質として尾張、駿府で育ち、岡崎城主となったのは19歳の時。織田信長と同盟を結ぶと三河、遠江を平定、29歳で浜松城を築いて新拠点とする。信長が本能寺の変で倒れると家康も三河・遠江・駿河・甲斐・信濃を領有、駿府城へと移る。しかし信長死後、天下人となった豊臣秀吉から関東移封を命じられ江戸城へ。秀吉死後に天下を取ると64歳で息子・秀忠に将軍職を譲った後、駿府城へ戻り、大御所として目を光らせた。

家康ゆかりの城


岡崎城(愛知県) P102
駿府城(静岡県) P104

名古屋城(愛知県)
浜松城(静岡県)
二条城(京都府)
江戸城(東京都)

『徳川家康画像』東京大学史料編纂所所蔵模写

錦絵「徳川十六善神」(1800年／画・永嶌孟斎)。江戸時代、家康と酒井忠次、本多忠勝、榊原康政、井伊直政ら16人の忠臣を描いた図像は、東照宮信仰に欠かせないものだった。

張出身なのとは好対照である。

しかも家康は、わずか6歳で東隣の強国・駿河へ人質として向かわなければならなかった。当時、松平家は弱小で、源氏の流れをくむ駿河の名門・今川家に従属していた。ところが、護送の途中に立ち寄った田原城で義母の父・戸田康光に裏切られ、西隣・尾張国の織田家へ売り飛ばされてしまう。秩序なき乱世の荒波に翻弄された家康は、織田家で2年を過ごした後、織田家と今川家の人質交換によって駿府へと流寓する。彼の駿府暮らしは、今川義元が桶狭間で戦死するまで10年以上も続くのである。こうした若き日の苦労が、辛抱強く思慮深い家康の人格をより強固で揺るぎないものに鍛え上げたといえるだろう。

それ故、彼は人の命の大切さを知り、人を活かすことを心がけた。三河一向一揆で敵対した本多正信らを後に重用するといった温厚な性格は、一世紀を超える乱世に疲れ果て、安心を求めた諸将に支持されていく。やがて、そのうねりが家康を天下人へと押し上げることとなる。征夷大将軍となった彼は幕藩体制の礎を確立し、泰平の世をもたらすと同時に、李氏朝鮮との国交を回復するなど平和外交にも尽力した。保守とは何か、保守政治とはいかにあるべきかを、今なお家康は示している。

右／関ヶ原の戦いで家康が使ったとされる軍配。団扇(うちわ)は長さ21.7cm、幅22.3cm。鉄に金泥が施されている。(静岡浅間神社・文化財資料館蔵)上／永禄3年(1560)、岡崎城主となった元康(家康)が出した制札。(法蔵寺蔵／一般公開はされていない)

### 徳川家康家系図

健康に気を遣い子宝に恵まれた家康は64歳で秀忠に将軍職を譲る。三代将軍に家光を推したのも家康とされる。三代で幕藩体制を確立した。

- 松平広忠
  - 徳川家康
    - 信康
    - 亀姫
    - 秀康
    - 督姫
    - 秀忠
      - 千姫
      - 家光
      - 忠長
      - 正之
    - 振姫
    - 信吉
    - 義直
    - 頼房
  - 矢田姫
  - 市場姫

| | | |
|---|---|---|
| 天文 11 (1542) | 1歳 | 三河国、岡崎城主・松平広忠の嫡男として生まれる。 |
| 天文 16 (1547) | 6歳 | 駿府の今川家へ人質として送られる途中、戸田康光に捕まり、尾張・織田信秀のもとへ送られる。 |
| 天文 18 (1549) | 8歳 | 織田家と今川家の争いで今川家の捕虜となった織田信広(信長の兄)との人質交換で、駿府へと送られる。 |
| 弘治 元 (1555) | 14歳 | 静岡浅間神社にて元服式が行われる。元信に改名。 |
| 弘治 3 (1557) | 16歳 | 今川義元の姪・瀬名姫(築山御前)と結婚。元康に改名。 |
| 弘治 4 (1558) | 17歳 | 織田方家臣討伐のため、岡崎衆を率いて初陣。勝利を飾る。 |
| 永禄 3 (1560) | 19歳 | 織田軍と今川軍が争った桶狭間の戦いに今川方として出陣。今川義元の死後、故郷・岡崎に戻り、岡崎城主となる。 |
| 永禄 5 (1562) | 21歳 | 家康に改名。信長と清須同盟を結ぶ。 |
| 永禄 9 (1566) | 25歳 | 朝廷から従五位下・三河守に任ぜられる。姓を徳川に改める。 |
| 元亀 元 (1570) | 29歳 | 姉川の戦いで浅井・朝倉連合軍に勝利。岡崎から浜松城へ移る。 |
| 元亀 3 (1572) | 31歳 | 三方ヶ原の戦いに参戦。武田軍に敗れる。 |
| 天正 3 (1575) | 34歳 | 長篠の戦い。鉄砲隊の活躍で武田軍を破る。 |
| 天正 7 (1579) | 38歳 | 信長が妻・築山御前と長男・信康に武田方への内通の疑いをかける。熟慮の末、それぞれの殺害および切腹を指示。 |
| 天正 10 (1582) | 41歳 | 本能寺の変で信長が自害。大阪・堺で訃報を知った家康は、伊賀越えの末、岡崎へ帰還する。その後、信長の治めていた甲斐、信濃を受け継ぎ、東海五カ国の大名となる。 |
| 天正 12 (1584) | 43歳 | 小牧・長久手の戦いで羽柴(豊臣)軍と対戦し、勝利。その後、秀吉と和議を結ぶ。 |
| 天正 14 (1586) | 45歳 | 大坂城で秀吉と会談。臣従を誓う。 |
| 天正 18 (1590) | 49歳 | 秀吉の小田原征伐で、先鋒として出陣。勝利を収めた末、関東へと国替えを命ぜられ、江戸城へ移る。 |
| 慶長 3 (1598) | 57歳 | 秀吉が伏見城で死去。 |
| 慶長 5 (1600) | 59歳 | 関ヶ原の戦いで石田三成率いる西軍に勝利。天下の覇権を握る。 |
| 慶長 8 (1603) | 62歳 | 征夷大将軍に命ぜられ、江戸に徳川幕府を開設。 |
| 慶長 10 (1605) | 64歳 | 徳川家による将軍職世襲を宣言。三男・秀忠に将軍職を譲る。 |
| 慶長 12 (1607) | 66歳 | 駿府城に移る。隠居後も実権を持ち続け、大御所政治を敷く。 |
| 元和 元 (1615) | 74歳 | 大坂・夏の陣で豊臣家を滅亡に追い込む。 |
| 元和 2 (1616) | 75歳 | 駿府城で病死。 |

三方ヶ原の戦いで武田信玄に惨敗後、家康は苦渋の肖像画「しかみ像」を描かせ戒めとした。写真は岡崎公園にある、絵を元にした石像。

［愛知県岡崎市］

# 岡崎城

## 家康が生まれ育った三河の巨城で徳川幕府260余年のあけぼのを知る

誕生から6歳まで、続いて20代を家康が過ごした岡崎城。乱世のもと、松平家と郎党たちは隣国に苦しめられる。ただし、彼らは家康同様、不屈の気概を備えていた。その力強い精神が、後に泰平の世をもたらしたのだ。

文◎浅川俊文　撮影◎遠藤純

所在地　愛知県岡崎市
築城年　享徳元年（1452）
廃城年　明治6年（1873）
別名　龍城
形態　平山城
主な城主　松平清康、徳川家康、田中吉政
主な遺構　井戸、石垣、堀

## 三河岡崎衆の心のよりどころは今も変わらぬ存在意義を持つ

天文11年（1542）、家康は岡崎城主・松平広忠の嫡男として、この城で生を享けた。城とはいっても当時は天守などなく、櫓や門の屋根も茅葺であった。西側には矢作川が流れていたが、この川を渡って織田家がしばしば侵入した。三河国の3割ほどを領有していたにすぎない松平家は、気を抜けば他勢力に蹂躙されてしまう存在にすぎなかった。

そのため、生母の於大は生家が織田家に寝返ったことにより、家康3歳の時に岡崎城を去る。彼自身も6歳で人質に出された。西隣の織田家で2年、続いて東隣の今川家で19歳まで試練の日々が続く。その間、岡崎城代には今川家の侍が就き、城は彼らの前線基地と化した。しかも松平家の郎党は困窮し、農夫となって飢えをしのぐありさま。ただし、彼らは家康同様、忍耐強く困難に屈しない気概を備えていた。元服後の弘治2年（1556）、一時帰郷を許された家康が入城すると、郎党たちは城下に集まって家康に拝謁。留守家老の鳥居伊賀は場内屋敷の奥の蔵に家康を導き、今川家の目を盗んで彼のために蓄えた山積みの米俵と青銭を見せた。

右上／二の丸跡には能楽堂が設けられている。左上／廃城が決まった岡崎城は、明治6年（1873）から翌年にかけて取り壊された。写真は取り壊し前に城を南側から望んだもの（岡崎城にて写す）。写真は入り口。右下／家康の幼少期・竹千代の石像を配したベンチがある。

下／江戸初期、譜代大名の本多家が近世城郭としての形態を整え、正保2年（1645）からは水野家が入城し、規模を絵図のように拡大した。（岡崎市蔵）

再び家康が岡崎城へ戻ったのは、今川義元死後の永禄3年（1560）。それから元亀元年（1570）に浜松城へ移るまで、20代の家康は城主として三河国の平定に力を注いだ。

その後、岡崎城が大きく姿を変えたのは、豊臣秀吉の命により家康が関東へ移封された後のこと。天正18年（1590）に入城した田中吉政は、皮肉にも家康の攻めに備えて城郭を拡張し、総構えの堀を築く。それから関ヶ原の戦いを経て、本多、水野家による城と城下町の整備が施され、260余年にわたる泰平の世を迎えた。残念ながら徳川幕府の終焉とともに城は失われるが、昭和34年（1959）に天守が復興され、現在の姿。城そのものは家康時代から大きく姿を変えたが、しかし、人々の心のよりどころとして当時と変わらぬ存在感を示している。

上／「東照公遺言碑」には「天下は一人の天下に非ず　天下は天下の天下なり」といった家康が残した将軍の心得が刻まれている。下／家康がつかった産湯の水を汲み上げた「産湯の井戸」。隣接した坂谷邸で家康は生まれた。

［静岡県静岡市］

# 駿府城

## 家康が大御所政治を敷いた地
## その城跡に今は亡き天守を偲ぶ

征夷大将軍となった家康は、わずか2年でその職を息子・秀忠に譲ると、駿府城を修築して移り、「大御所」として数々の政策に取り組んだ。この城は新時代の総合指令室であり、象徴でもあった。

文◎浅川俊文　撮影◎遠藤純

所在地　静岡県静岡市
築城年　天正13年（1585）
廃城年　明治2年（1869）
別　名　府中城、正王城
形　態　平山城
主な城主　徳川家康
主な遺構　石垣、堀

右上／二の丸東御門の高麗門。寛永15年（1638）当時の姿を再現。右下／二の丸の石垣には家康時代に積まれた打ち込みはぎの部分が残る（写真左側）。左／「府中御城の図」。外堀の3分の1と内堀（本丸堀）は埋め立てられた。（静岡市蔵）

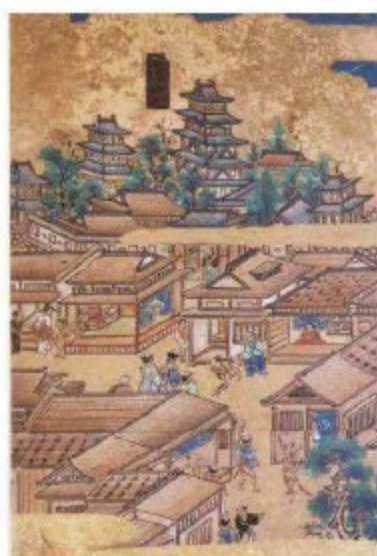
## 家康没後400年を迎え新たな櫓を伝統工法で復元

家康が嗜んだものは数多いが、囲碁・将棋もそのひとつだった。その実力は定かではないが、関ヶ原の戦いで勝利してからの家康は、名人のような絶妙な手を、天下取りにおいて打ち続けた。慶長8年（1603）、征夷大将軍となり幕府を開くと、その2年後、将軍職を息子・秀忠に譲って世襲制を確立してしまう。翌年には江戸城と駿府城の修築に取り掛かっている。諸大名を動員して普請を行わせたが、徳川家の城が堅固になるうえに、豊臣家の息のかかった大名たちの財力を減らすこともできる。まさに一石二鳥の妙手であった。

名古屋市博物館所蔵の「築城図屏風」には、駿府城の修築の様子が生き生きと描かれている。城下には、町を覆い尽くさんばかりの人々が集まり、道端では人形浄瑠璃が興行されている。その横では巨石を運ぶ人足が汗を流し、石垣を積む姿も見られる。かと思えば人足同士の喧嘩まで描写されている。駿府城の修築が、いかに壮大であったかが窺える。

こうして駿府城は、三重の堀を持つ輪郭式平城に生まれ変わった。天守は富士山を背景にそびえ立ち、その天守台は石垣天端で約55m×48mという城郭史上最大のものであった。またさらに、本丸の中にもうひとつの郭を設けて厳重に天守を守る「天守丸構造」であったことが、近年の研究によって実証されている。

まさに「海道一の名城」とも呼べるこの城へ家康は移り、「大御所」としてにらみを利かせ、形式は隠居だが将軍以上の実権を握り続けた。また、東海道や中山道を整備し、貨幣、貿易、外交政策などにも取り組んでいる。そびえ立つ駿府城は、新時代の総合指令地であり、象徴でもあった。その面影は現存する中堀と外堀の石垣にとどめられている。

平成に入り、日本古来の伝統工法によって、二の丸の東御門と巽櫓が復元された。さらに坤櫓も復元され、20 14年春から公開されている。平成27年（2015）には家康の400回忌が営まれた。再び、新たな時代が駿府城に訪れている。

「東海道図屏風」に描かれた駿府城。推定制作年代は元禄以前で、大御所時代の駿府城からそれほど時を経ていないと考えられる。（静岡市蔵）

左／2014年4月から公開が始まった坤櫓。寛永年間の資料を参考に、忠実に復元されている。二層三階構造で、2階の堀側には石落としを備える。右／駿府城公園内にある発掘復元された本丸堀の一部と石垣。中堀の内側にある旧二の丸と本丸は駿府城公園として整備。

# あの合戦と十二城 語り継がれる

八王子城（東京都）
砥石城（長野県）
二俣城（静岡県）
高天神城（静岡県）
長篠城（愛知県）
岩村城（岐阜県）
小谷城（滋賀県）
玄蕃尾城（福井県）
洲本城（兵庫県）
竹田城（兵庫県）
月山富田城（島根県）
岩屋城（福岡県）

## 城主と運命を共にし合戦の舞台となった城跡

武将達の戦の舞台となった城の多くは、戦火にさらされその姿を消したものがほとんどだ。しかし城跡に残る石垣や櫓跡の遺構が、往時の面影を今に伝える。城跡を歩き、歴史の声に耳を傾けたい。

文◎野田伊豆守（P108〜119）
撮影◎佐藤佳穂、島崎信一、野田伊豆守、安芸健男、Nori.k

# 小田原征伐と八王子城

## もっとも凄惨な戦いの舞台となる

天下の兵を相手に少ない兵力で奮闘するも、やがて力尽きて落城。
婦女子を含めた多くの人々が山城の露と消えた。
長い間、山中に埋もれていた城跡は、
掘調査の後、かつての姿を取り戻しつつある。

S 豊臣

**上杉景勝**（うえすぎかげかつ）

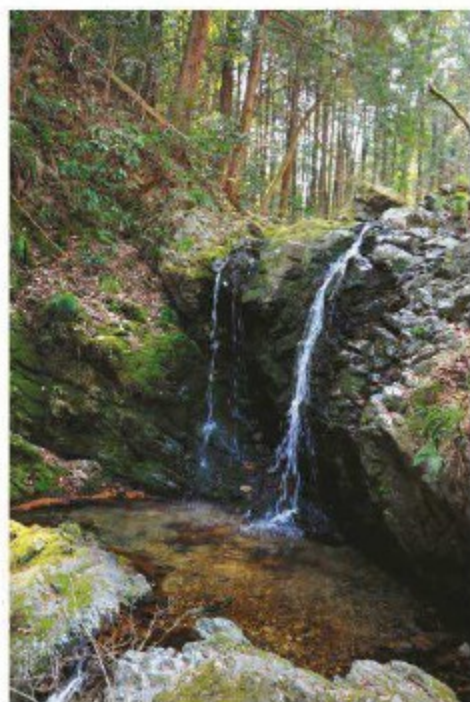
1556〜1623年。名将上杉謙信の実の姉の子で、謙信亡き後に家督争いに勝利し、上杉家を継ぐ。豊臣秀吉とは早くから誼みを通じ、豊臣政権では五大老の地位に就いた。信義に厚い武将であった。

「上杉景勝像」（米沢市上杉博物館蔵）

### 婦女子も自刃して果てた悲しい運命を背負う城

天険の要害と言われている八王子城。この城の築城年は、はっきりとしていない。永禄12年（１５６９）の武田信玄による小田原城攻撃の際、滝山城主であった北条氏照は、滝山城の防御力に疑問を抱いた。さらにその後、中央を制した豊臣秀吉の軍の攻撃に備え、天正年間の中頃に築かれた、という説が一般的である。

そして天正18年（１５９０）、遂に天下統一を進める秀吉の軍を迎え撃つことになった。この年の3月、秀吉自ら大軍を率いて京を進発し、20万もの兵で北条氏の本拠であった小田原城を包囲した。さらに別働隊を各地の北条方支城へと差し向けたのである。八王子城攻略に向かったのは上杉景勝、前田利家、真田昌幸（まさゆき）らに率いられた3万の軍勢。

一方、城主の氏照以下、主立った家臣たちは小田原の本城に駆けつけていた。そのため八王子城内には城代の横地吉信（よこちよしのぶ）、家臣の狩野一庵（いちあん）、中山家範（いえのり）、近藤助実（すけざね）らが、わずか３０００ほどの兵とともに守備に就いて

上／単なる芝生の広場に見えるが、ここが御主殿のあった曲輪。近年になり発掘調査が進められている。
左／落城の際に婦女子が身を投げたとされる御主殿の滝。かつてはもっと水量があり、滝壺も深かったと思われる。
右／主要部には安土城を模範にして野面積みの石垣が用いられていた。現在も苔むした石垣が残されている。

# V 北条

**北条氏照**（ほうじょううじてる）

1540～1590年。関東の雄、北条氏康の三男として生まれる。勇将としてだけでなく優れた外交手腕の持ち主で、上杉氏との同盟や伊達氏との連携を画策。小田原の戦いの際は徹底抗戦を主張した。

いたにすぎない。

攻城軍は夜中に行動を起こし、未明になると各曲輪に一斉攻撃を仕掛けた。城兵たちもおおいに奮戦したが、次々に新手を繰り出す攻城軍に対しては衆寡敵せず、4部将をはじめ1000を超える城兵が討死。城はわずか1日で落城してしまう。

前田利家から戦況報告を受けた徳川家康は狩野、中山の両将が最後まで奮戦し、降伏勧告も受け容れずに自刃した忠節を賞賛。彼らの子息を徳川家に仕官させている。また城に残っていた氏照の正室、比佐をはじめとする城内の婦女子は自刃、もしくは御主殿の滝に身を投げて果てたという。そのおかげで、滝は3日3晩赤く染まったままであったと伝えられている。その後、家康が領主となると八王子城は廃城となった。

## 八王子城（はちおうじじょう）

城は標高445mの深沢山（城山）に築かれている。縄張りは東西、南北とも約3kmもの範囲に及ぶ広大なもので、山の尾根や谷を利用して多くの曲輪を配した、典型的な中世の山城だ。さらに山の地形を利用した縦深防御だけでなく、侵入してきた敵を側面から攻撃するための工夫も随所に見られる。主要部には野面積みの石垣が用いられている。戦国期最後の大型山城。

| | |
|---|---|
| 所在地 | 東京都八王子市 |
| 築城年 | 天正8年（1580）頃 |
| 別名 | 無 |
| 構造 | 山城 |
| 主な城主 | 北条氏照 |
| 遺構 | 石垣、土塁、空堀 |

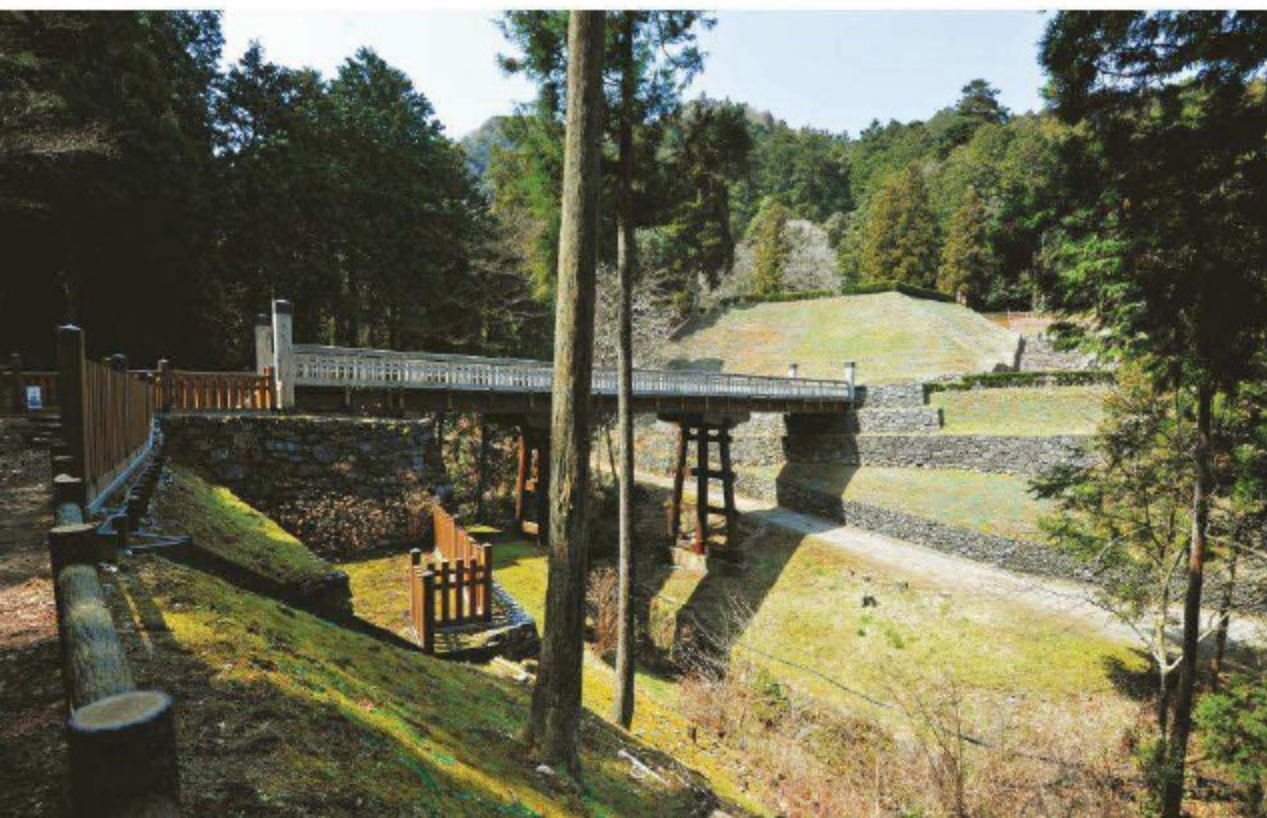
虎口や城壁、石段、曳橋などが復元されている。石垣は当時の野面積みを再現。しかもできるだけ発掘された石が使われている。

# ㊤村上VS武田

## 完膚なき大敗北を喫した武田軍苦渋の地
# 最強軍団の誤算と戸石城

戦国最強と謳われた軍を指揮していた甲斐の武田晴信。同時代の武将たちから恐れられていた男が、北信濃の小城を奪取しようとし、思わぬ大敗を喫する。後世"戸石崩れ"と呼ばれる戦いである。

**村上義清**

1501〜1573年。北信濃の戦国大名。一時期は信濃の東部から北部までを支配し、村上氏の全盛期を築く。武田信玄との戦いでも互角以上の戦ぶりを発揮したが、真田幸隆の謀略により勢力を失う。

真田氏発祥の地である真田本城から見た戸石城。それぞれ高くなっている部分に城名が付いているが、全体で戸石城と考えられている。

### 信玄に生涯最大の負け戦を味合わせた城

戦国時代、最強の武将の名をほしいままにしていた甲斐の武田晴信（信玄）。家督を相続するや父の信虎が同盟関係を結んでいた信濃諏訪領へ進撃。信濃の小領主たちを次々に撃破していった。ところが天文17年（1548）、信濃国の北部に勢力を張っていた葛尾城主の村上義清と上田原で戦い、武田軍は宿老の板垣信方や甘利虎泰らが討死するという敗北を喫してしまった。

この機に乗じて小笠原長時が諏訪に侵入するも、武田軍に撃退されてしまう。逆に天文19年（1550）に晴信は小笠原領に侵攻。慌てた長時は義清のもとへ逃げ込む。こうして武田晴信と村上義清は、再び干戈を交えることとなった。

勢いに乗る武田軍は、村上方の出城のひとつであった戸石城に狙いを定める。武田軍の兵力は7000、戸石城を守る兵はわずか500であった。ところがこの城は小城ではあったものの、周囲は険しい崖に囲まれていて、攻めることができるのは砥石のような南西側の崖しかなかったのである。武田軍の将兵がその崖を登ってくると、城兵は石や煮え湯を浴びせかけて撃退する。

武田軍は攻め手の大将であった横田高松までもが戦死。攻めあぐねている間に村上義清自らが2000の兵を率いて後詰めにやって来た。そのため武田軍は城兵と後詰めの軍に挟撃されてしまう。晴信は撤退を決断するが、村上軍の激しい追撃に遭う。この戦いで武田方は、1200人もの将兵を失う大敗を喫した。

これは信玄の生涯で最もひどい負け戦だったため、世に「戸石崩れ」の名で広まった。城を守っていた兵の半分が、かつて晴信に虐殺された志賀城の残党で、復讐の念が激しかったことも、村上軍勝利の要因だと考えられている。

**武田晴信（信玄）**

1521〜1573年。戦国大名であると同時に、甲斐源氏の嫡流でもある。甲斐の虎と呼ばれ、同時代の誰からも恐れられた。越後の長尾景虎（上杉謙信）とは川中島を舞台に5度にわたる合戦を行う。

**戸石城**（といしじょう）

戸石城は東太郎山の尾根上に築かれていて本城、桝形城、砥石城、米山城という4つの城から構成されている。とはいえそれぞれ独立した城というわけではなく、本丸や二の丸、少し離れた米山城は出丸と考えるのが無難。まとまった広さがある本城は高さが2〜3mの切岸で区画されている。天文20年（1551）、信玄の命を受けた真田幸隆の調略により落城する。

| | |
|---|---|
| 所在地 | 長野県上田市 |
| 築城年 | 不明 |
| 別名 | 砥石城 |
| 構造 | 山城 |
| 主な城主 | 村上義清 |
| 遺構 | 石垣、土塁、堀切、空堀 |

# 徳川VS武田

# 高天神城と遠江攻防

## 徳川と武田の激しい争奪戦の舞台

遠江と駿河の国境に近い場所に立地する高天神城は、どちらの国を治める者にとっても、戦略上とても重要だ。そのため戦国時代も佳境に入った天正年間には、徳川と武田の間で激しい争奪戦がくり広げられた。

**徳川家康**

1542～1616年。三河の豪族・松平家に生まれ、幼少の頃は織田家や今川家に人質に差し出された。後世の忍耐強いイメージは、こうした体験によるところも大きい。武田信玄を軍事の師と仰いだ。

「徳川家康画像」東京大学史料編纂所所蔵模写

三の丸から東南の方角を望むと、平野の遥か先に太平洋を望むことができる。この城は水軍の拠点として使用されていたことがあったのもうなずける。

### この城を落としたことが武田家滅亡の扉を開く

高天神城を築いたのは、遠江と駿河半国の守護大名であった今川貞世（了俊）であったとされる。戦国の御世になると今川氏の勢力は三河を加えた三国にまで及んだ。しかし今川義元が桶狭間の戦いで織田信長に討たれると、今川氏の勢力は衰退する。永禄11年（1568）になると、甲斐の武田信玄が駿河に侵入。時を同じくして三河の徳川家康は遠江に勢力を延ばして来た。

高天神城主であった小笠原長忠は、家康の臣下となることを選択。駿河と遠江の境目を守るという重責を担うこととなった。元亀2年（1571）になると信玄に率いられた2万5000もの大軍が城下まで攻め寄せて来た。そして武田軍の中でも精強で知られた山県昌景、内藤昌豊らの武将が攻め手となったが、多くの死傷者を出したために撤退した。

信玄亡き後の天正2年（1574）に、武田勝頼は2万の軍で攻め寄せ、ついに小笠原長忠を下す。偉大な父である信玄が落とせなかった城を手中に収めたことは、当時の勝頼の武名を大きく上げる結果となった。おかげで勝頼は必要以上に自信を深めてしまう。それが翌年の長篠での大敗につながったとも言える。

勝頼は高天神城の地理的な利点を重視していたため、長篠の戦いに敗れた後も城の拡張を行う。そして城代には戦上手として知られた岡部元信を置いた。一方の家康は城の奪還を目指し、周辺に6つの付城を築いたが、無理な攻めには出なかった。

そして天正8年（1580）9月になり、ようやく高天神城への攻撃を開始する。それも兵糧攻めを交え、じっくりと攻めたため、逃亡する兵も少なくなかった。

翌年3月になり岡部元信以下、多くの将兵が討死したため、城は徳川方の手に落ちた。

**武田勝頼**

1546～1582年。甲斐武田家の二十代当主だが、当初は母方の諏訪氏を継いだため諏訪四郎勝頼と呼ばれた。信玄亡き後、強硬策で領国拡大を図る。そのため国内が疲弊し武田家滅亡の要因となる。

「武田勝頼画像」東京大学史料編纂所所蔵模写

### 高天神城（たかてんじんじょう）

城は菊川下流域に広がる平野部に近い低山地帯の、標高132mの高天神山に築かれている。城域はふたつの峰に渡っている。本丸は細長い曲輪となっていて、東側には三の丸へと続く。西の峰には高天神社が置かれ、その先には馬場と呼ばれる曲輪がある。さほど大きな城ではないが、切り立った崖が天然の防壁となってくれる。家康はこの城を奪還した後、廃城とした。

| | |
|---|---|
| 所在地 | 静岡県掛川市 |
| 築城年 | 応永23年（1416）頃 |
| 別名 | 鶴舞城 |
| 構造 | 山城 |
| 主な城主 | 今川貞世、福島正成、小笠原長忠、岡部元信 |
| 遺構 | 土塁、横堀、竪堀、堀切、土橋、井戸 |

# 武田VS徳川

# 信玄の版図拡大と二俣城

## 難攻不落の城攻略のための奇策

かつてはふたつの川に挟まれた台地上に建っていた天然の要害とも言える二俣城。この城は武田と徳川の激しい争奪戦だけでなく、戦国の悲話の舞台としても知られている。

**武田信玄**

1521～1573年。元亀3年10月3日、足利義昭の呼びかけに応えて西上作戦を開始。信玄と馬場信春に率いられた本隊は青崩峠から遠江に進撃し、二俣城を含む徳川方の城を次々に陥落させた。

「武田晴信（信玄）画像（伝）」東京大学史料編纂所所蔵模写

二の丸と本丸の間にあった枡形門跡付近から本丸の天守台方向を望む。石垣は強固な野面積みで、3層程度の天守台があったと思われる。

### 乱世の悲劇を生み出した 武田と徳川の最前線の城

天竜川と二俣川の合流点に建つこの城は、戦国初期にこの付近を支配していた今川氏によって築かれたとされる。だが今川義元は桶狭間で敗死し、子の氏真が今川氏を継ぐが、勢力は大きく後退。それでも二俣城を任されていた松井氏は今川氏に従った。しかし永禄11年（1568）、二俣城は徳川家康に攻め落とされる。さらに翌年には武田信玄と家康の挟撃により今川氏は滅びた。家康は武田方の攻撃を予想し、二俣城に譜代の家臣である中根正照を置いた。

元亀3年（1572）、武田信玄は遂に大軍を率いて西上作戦を開始した。二俣城の攻略は武田勝頼を大将とする軍が担当。激しい攻防戦が繰り広げられた。この城が落ちると徳川の本拠である浜松城を守るための拠点を失うことになるので、城代の中根以下、死にものぐるいで防戦に努めたのである。

だが城方は水を天竜川側に組んだ櫓から汲み上げていることを知られてしまい、武田方が上流から流した筏によって破壊されてしまう。水の手を失ったことで籠城がかなわなくなり、遂に落城してしまった。

その後、信玄が西上作戦途上で亡くなり、さらに勝頼が長篠の戦いで大敗すると、家康はすぐさま二俣城奪回に動く。二俣城のすぐ隣りの峰に鳥羽山城、そのほかにも付城を築いて包囲網を敷いた。それでもなかなか落ちることはなかったが、天正3年（1575）12月になり、ようやく奪還することができた。

その後も武田軍はたびたび攻撃を仕掛けて来たが、徳川のなかでも武勇を知られた大久保忠世が守っていたこともあり、落城することはなかった。またこの城は、家康の嫡男であった信康が織田信長から武田方と通じたという疑いを持たれ、城内で切腹させられた悲劇の舞台でもある。

**徳川家康**

1542～1616年。信玄の西上作戦の際、浜松城を素通りされたことで、城から討って出た徳川軍は三方原で大敗北を喫した。命からがら逃げ帰った家康は、その教訓を生涯の糧として忘れなかった。

「徳川家康画像」東京大学史料編纂所所蔵模写

### 二俣城（ふたまたじょう）

ふたつの川の合流点にあり、それがそのまま天然の濠の役割を果たしている。さらに山を階段状に整地し、北から南へ向かって北曲輪、本丸、二の丸、蔵屋敷、南曲輪と一直線に並んでいる。慶長年間（1596～1615）に廃城となったが、本丸には天守台の石垣がしっかりと残されている。そのほか、要所要所で石垣が使われているのも特徴だ。

| | |
|---|---|
| 所在地 | 静岡県浜松市 |
| 築城年 | 文亀年間（1501～04）頃 |
| 別名 | 蜷原城 |
| 構造 | 連郭式山城 |
| 主な城主 | 松井宗信、松井宗恒、中根正照、依田信蕃、大久保忠世 |
| 遺構 | 石垣、土塁、空堀 |

# 織田・徳川連合軍 VS 武田

# 長篠籠城戦と設楽原決戦

## 徳川と武田の激しい争奪戦の舞台

戦国史上に残る銃撃戦が行われた長篠の戦い。その始まりは奥三河の豪族が守る、小城からであった。ふたつの川が交わる地点に立地する長篠城は、わずかな兵による奮戦で、大勝利を呼び込んだのである。

**奥平貞昌**（おくだいらさだまさ）

1555〜1615年。三河国作手の有力国人で、祖父の代までは今川家に臣従。後に武田家に従うが、元亀年間に武田家へ属す。しかし再び家康の傘下に加わる。家康の長女亀姫を正室に迎えている。

「奥平信昌肖像」（自性寺蔵）

**武田勝頼**（たけだかつより）

1546〜1582年。長篠の戦いは奥平氏の寝返りに激怒した勝頼が、奥平親子を討伐するために起こした戦い。当初は短期間で攻略できると考えていた。結果は織田・徳川軍との決戦となってしまう。

「武田勝頼画像」東京大学史料編纂所所蔵模写

### 大勢力に挟まれた小領主が意地で守り抜いた城

戦国時代の小領主は生き残りに必死であった。特に大勢力に挟まれていた場合、どちらに味方するかで運命が大きく変わってしまう。古くは武田と今川、後に武田と徳川の争奪戦の舞台となった、奥三河の長篠城も、そんな運命に翻弄された城のひとつである。この城は最初、今川氏親に通じていた菅沼元成によって築かれた。その後、今川氏が没落すると、菅沼氏は徳川に味方する。

元亀2年（1571）、武田軍の圧力に耐えきれなくなった城主の菅沼正貞は、徳川方から武田方へ鞍替えする。しかし信玄が西上作戦の途上で亡くなると、勢いを取り戻した家康の攻撃を受け、菅沼氏は城を捨てて信濃へと逃亡するはめとなった。

そして家康は、以前から味方に就いた奥平貞昌を長篠城へと送り込んだ。天正3年（1575）5月、武田勝頼は1万5000という兵力で長篠城を囲む。対する城兵はわずかに500。200丁の鉄砲を駆使してよく城を守っていたが、兵糧が尽きるのも時間の問題であった。

この時、信長は家康からの援軍要請を受け、3万の大軍を率いて岡崎城に着陣していた。徳川軍も8000の陣容で、長篠城の手前の設楽原に進出、ここに強力な野戦陣地を構築したのである。しかも織田・徳川連合軍には3000丁もの鉄砲が準備されていた。そして設楽原を舞台に織田・徳川連合軍と武田軍による、後詰決戦が行われたのである。

戦いは織田・徳川連合軍による、鉄砲の三段撃ちにより武田騎馬軍団が壊滅。この方面での武田の勢力は激減した。一方、城を見事に守り抜いた奥平貞昌は、徳川家での地歩を確実なものにしたのであった。

右が寒狭川で左が宇連川（豊川）。合流地点上が長篠城跡だ。左に見えるJR飯田線の鉄橋の右手が本丸、川にせり出している部分が野牛曲輪。

### 長篠城（ながしのじょう）

寒狭川と宇連川（豊川上流）が合流する河岸段丘上に築かれた平城で、両川に面した部分は高さ60mの絶壁となっている。崖上には本丸と野牛曲輪、その北東に二の丸、三の丸、北西には弾正曲輪、服部曲輪が並び、城の弱点を補っていた。長篠の戦いの翌年、奥平信昌（戦功により信長から一字賜る）は新城城を築いたため廃城となる。現在は本丸周辺に堀の跡が見られる。

| | |
|---|---|
| 所在地 | 愛知県新城市 |
| 築城年 | 永正5年（1508） |
| 別名 | 末広城　扇城 |
| 構造 | 平城 |
| 主な城主 | 菅沼元成、奥平貞昌 |
| 遺構 | 土塁、空堀、井戸 |

# 織田VS武田

## 難攻不落の山城が骨肉の争いを生む
# 悲劇の籠城戦と岩村城

乱世では様々な悲劇が起こっている。なかでも肉親による骨肉の争いは、何物にも代え難いほどの悲しさを伴うものだ。岩村城を舞台にした戦いも、そんな悲劇のひとつである。

### 城主が病没したことで その妻が城の差配をふるう

岩村城は江戸時代を通じ、ずっと岩村藩の藩庁として使用されてきた。本丸の海抜が諸藩の居城のなかで最も高い海抜717mにあることから、日本三大山城のひとつに数えられている。

この城が築かれたのは古く、鎌倉時代まで遡る。加藤景廉が遠山庄地頭に任じられた際、築いたものと伝えられている。加藤氏はその後、岩村遠山氏となり戦国へと続く。

遠山氏は室町時代には土岐氏の家臣、次いで斎藤氏の家臣となる。織田信長が美濃を支配下に置くとこれに臣従。信長は遠山氏をつなぎとめておくために、自分の叔母を当時の当主であった遠山景任に嫁がせた。

しかし元亀2年（1571）、景任は病没する。跡継ぎがいなかったため、信長は自分の五男である6歳の坊丸を遠山氏の養子とし、景任夫人おつやの方が後見人となる。実際は幼少の坊丸に代わりおつやの方が城の差配をふるったため〝女城主〟と言われた。

元亀3年の武田信玄による西上作戦の際、岩村城は武田方の秋山信友の軍に攻められた。おつやの方の指揮で城方は奮戦するも、援軍が期待できないことから遂に降伏。その後、美人だったおつやの方を見初めた信友が妻にしてしまう。

これを知った信長は激怒。長篠の合戦の勝利で武田方を弱体化させると、嫡男の信忠に命じて岩村城を攻撃させた。この時も城方は猛攻によく耐えたのだが、劣勢はいかんともし難く「開城すれば城兵の命は助ける」という条件をのみ、信友とおつやの方は城を出た。しかしこの約束は反故にされ、ふたりは長良川畔で磔となり、城兵も虐殺されるという悲劇で幕を閉じたのである。その後、森氏、松平氏、丹羽氏などが城主を務め、明治維新を迎えた。

**織田信忠**

1557～1582年。織田信長の嫡男で、信長存命のうちに家督を譲られた。元亀3年に元服し北近江で初陣。以後、多くの戦場を駆け回る。岩村城攻めでは寄せ手の大将となる。本能寺の変で討死。

「織田信忠画像」東京大学史料編纂所所蔵模写

両側の石垣に多門櫓が載せられていた長局埋門の跡。さらに本丸に入るには内枡形状の通路を抜ける。こうして道が何度も曲がるのは、織豊時代の城の特徴のひとつ。

**おつやの方**

?～1575年。織田信定の娘で、織田信長の叔母にあたる。岩村城主の遠山景任の妻となるが、景任は子供がないまま病死する。そこで幼い養子を補佐。最期は信長の手により斬られたとも伝わる。

岩村醸造 清酒「女城主」ラベル

**岩村城**（いわむらじょう）

この城は時代とともに、何度か改修されている。現在の構成は織田氏支配の頃に完成したものだ。さらに大給松平氏と丹羽氏の時代に、高石垣などの特徴的な部分が完成したと思われる。登城道を登って行くと、途中で何度も向きが変わる。敵の侵入に備えたもので、織豊時代の城郭の特徴といえる。本丸は100m四方の曲輪。門は東と北にあり、どちらにも埋門があった。

| | |
|---|---|
| 所在地 | 岐阜県恵那市 |
| 築城年 | 文治元年（1185） |
| 別名 | 霧ヶ城 |
| 構造 | 梯郭式山城 |
| 主な城主 | 遠山景任、河尻秀隆、森長可、田丸直昌、松平家乗 |
| 遺構 | 石垣、堀切、井戸、櫓台 |

# 織田VS浅井

## 女たちの悲劇が後世まで語り継がれた 小谷城と浅井家の最期

戦国時代に築かれた山城は今も無数に残されているが、小谷城は人気の高い城として多くの人を魅了する。それは城の規模、構成の巧みさもさることながら、ここを舞台とした戦国の悲劇が人を寄せ付けるのである。

**織田信長**

1534〜1582年。日本史上、最も傑出した人物のひとりに数えられる。尾張の小大名から身を興し、室町幕府を滅ぼす。その後、強力な中央政権を発足。天下統一も目前という時、本能寺の変で横死。

「織田信長画像」東京大学史料編纂所所蔵模写

小谷城のある山の中腹付近から琵琶湖を望む。湖上に浮かぶ小島は竹生島。秀吉は交通の便を考え小谷から今浜（現・長浜）に城を移した。

**浅井長政**

1545〜1573年。戦国大名浅井氏の三代目にして、最盛期を作り上げた。しかし義兄の信長と争ったために、最後の当主となる。末の娘は徳川秀忠に嫁いだため、三代将軍家光の外祖父になる。

「浅井長政画像」東京大学史料編纂所所蔵模写

### 山の尾根筋にいくつもの曲輪が配置された堅固な山城

小谷城は北近江を三代に渡って支配した、浅井氏の本城であった。城は北国と東海、西国とを結ぶ北国脇往還を扼す位置に聳える、標高495mの小谷山から延びる尾根筋に築かれている。この城が歴史の表舞台に登場するのは、浅井氏三代目の当主・長政の時代。永禄11年（1568）に織田信長の妹であるお市の方を妻に迎えた長政は、織田家と同盟を結び天下布武を目指した。

ところが元亀元年（1570）4月、浅井に無断では攻めないという約定を破り、信長は越前の朝倉義景攻略の軍を起こした。長政は朝倉氏との長年の交誼を重視。越前に攻め入っていた織田・徳川連合軍に背後から襲いかかったのである。こうして同盟はわずか2年で霧消した。

同年6月には姉川を舞台に織田・徳川連合軍と浅井・朝倉連合軍が激突。浅井方は敗れたものの、その後も将軍足利義昭の呼びかけに応じ、本願寺や甲斐の武田などとともに信長包囲網を形成。信長を苦しめた。

しかし天正元年（1573）4月に西上中だった武田軍が突如甲斐に引き上げたのを見ると、信長は同年8月に3万の大軍を率いて北近江に進撃し、小谷城を囲んだ。援軍にやって来た朝倉軍を撃破し、そのまま朝倉氏の本拠である越前一乗谷を落としてしまう。

孤立無援状態となった小谷城だが、堅城のためになかなか落ちない。城を力攻めにすることにした信長は、城の中央付近にある大堀切部分への攻撃を羽柴秀吉に指示。この分断作戦が功を奏し、まず長政の父の久政が自害。続いて最後まで抵抗していた長政の自害により落城した。

城が落ちる直前に、信長の妹のお市の方と三人の娘たちは、織田氏の一族である藤掛永勝らによって救い出され、織田家に引き取られた。

### 小谷城（おだにじょう）

『浅井三代記』によれば、永正13年（1516）の9月に着工し、翌月には完成したことになっている。しかし1カ月でこれだけの城を造り上げるのは無理がある。ただ浅井氏の本城として半世紀は君臨していた。信長の攻撃で落城した後、付近は羽柴秀吉の領地となる。秀吉は不便な小谷を嫌い廃城とした。現在は先駆的に取り入れられた石垣をはじめ土塁、堀切などが残る。

| | |
|---|---|
| 所在地 | 滋賀県長浜市 |
| 築城年 | 永正13年（1516） |
| 別名 | 無 |
| 構造 | 梯郭式山城 |
| 主な城主 | 浅井亮政、久政、長政 |
| 遺構 | 石垣、土塁、堀切、空堀、竪堀 |

# 羽柴VS柴田

## 信長の後継者を決める重大な一戦
# 賤ヶ岳の合戦と玄蕃尾城

長い間、脚光をあびることもなく山中に埋もれていた、そんな山城は日本全国に数多く存在する。賤ヶ岳の合戦の折り、一方の大将・柴田勝家が本陣とした内中尾山の玄蕃尾城もそんな城のひとつだった。

**羽柴秀吉**

1537〜1598年。明智光秀を破った山崎の戦い、そして清洲会議と秀吉のペースで事が運んだ。とはいえ対立する柴田勝家を放置しておけず、勝家が動けない冬の間、反秀吉派を各個撃破する。

「豊臣秀吉画像」東京大学史料編纂所所蔵模写

**柴田勝家**

1522〜1583年。もともとは信長の父、信秀に仕えていた。織田政権の終盤では筆頭家老の地位に就く。武勇に秀でている反面、秀吉のような人心懐柔術は得意ではなく、敗因のひとつとなった。

国立国会図書館蔵

本丸を囲む土塁の上から腰曲輪を見下ろす。写真ではわかりづらいが、案内の杭（中央下の白い物体）が立っている部分は平らに整地されている。

### 土塁で構築された山城の集大成ともいえる完成度

羽柴秀吉と柴田勝家が中心となり、織田信長亡き後の主導権を争った清洲会議。一旦は話し合いで解決したように見えたが、やはり両雄は干戈を交える運命にあった。清洲会議どころか本能寺の変から1年も経たない天正11年（1583）4月、両者は北近江の賤ヶ岳を舞台として、雌雄を決する合戦を演じたのである。

その際、柴田勝家が布陣したのが、玄蕃尾城であった。この城は内中尾山の山頂にあり、甥の佐久間盛政が陣を構えた行市山とは尾根続きとなっている。ちなみにこの尾根は現在、滋賀と福井の県境をなしている。城の規模はそれほど大きくはなく、石垣も用いられていないが、随所に技巧的な造りが見られるのだ。

城跡への道は滋賀県側、福井県側のどちらにもある。というのも峠を越える山道は、昔から畿内と敦賀を結ぶ街道だった。ということで、今回は滋賀県側からかつて刀根越えと呼ばれた道をたどり、城へ向かった。

つづら折れの道を30分ほど登ると、道が交差する倉坂峠に出た。直進すれば敦賀方面、右に登ると玄蕃尾城跡、そして左に登れば行市山へのハイキングコースとなる。そこから急坂を20分ほど登ると城の入口に到達する。この城に初めて足を踏み入れた人がまず驚かされるのが、まるで山の頂や斜面が波打っているように、いたる所に土塁や空堀の跡が見られることだ。こんな山奥でよくこれだけの土木工事が行えたと感心する。

虎口が4カ所、さらに小さな曲輪が付属する馬出しが2カ所に見られる。そして頂上の本丸には8ｍ四方ほどの天守台跡が残されている。こうした玄蕃尾城の技巧的な造りを見れば、織豊時代になって築かれた城だということがわかるだろう。ただ実際の合戦でこの城が活躍することはなかった。

**玄蕃尾城**（げんばおじょう）

現地の案内板には「極めて限定された時期の城郭の遺構である」と記されている。石垣こそ使われていないが、中世城郭から近世城郭へと移行する時代の特徴がよく残されている。400年以上も経過しているにもかかわらず、土塁や堀の状態は極めて良好だ。最も広い曲輪は搦め手側にあるもので、兵站基地になっていた模様。ここにも大手口と同じく虎口が残されている。

| | |
|---|---|
| 所在地 | 滋賀県長浜市、福井県敦賀市 |
| 築城年 | 天正11年（1583） |
| 別名 | 内中尾城 |
| 構造 | 山城 |
| 主な城主 | 柴田勝家 |
| 遺構 | 土塁、土橋、空堀、馬出 |

# 毛利VS尼子

## ひとりの勇将の七難八苦の人生が始まった
# 月山富田城と尼子家再興の夢

山陰山陽に大勢力を張っていた尼子氏は、新興勢力の毛利氏に破れ、月山富田城を後にする。だがそれは、尼子氏を再興させようとする、山中鹿介にとって悲願となった戦いの始まりであった。

**毛利元就**

1497〜1571年。一代で安芸（広島県西部）の小規模な国人領主から、山陰山陽のほぼ全域を支配する大大名となった。智略に富んでいたことから、後世謀将と評されることが多い。長州藩の始祖。

「毛利元就画像」東京大学史料編纂所所蔵模写

**山中鹿介**

1545〜1578年。出自や家系には謎が多いがその武名は在世当時から知られていた。名は幸盛。尼子氏が大名でなくなった後も僧であった尼子勝久を還俗させ、尼子家再興の戦いを12年間続けた。

（国立国会図書館蔵）

多くの居館が建ち並んでいたと伝わる山中御殿跡。近年整備され、遺構がわかりやすくなった。石垣は堀尾氏時代に積まれたもの。

### 中国地方の支配を巡り新旧の勢力が激突す

中国地方を代表する戦国大名といえば、まずは毛利元就の名が挙るであろう。しかし元就がまだ小勢力だった頃、中国地方に君臨していたのは尼子氏であった。最盛期には山陰山陽で11カ国を傘下に治めていたのである。尼子氏は経久と晴久という名将を輩出したが、永禄3年（1560）に晴久が47歳の若さで急死する。跡を義久が継いだが、尼子氏の勢力は急激に衰退した。

その間、西の大勢力であった大内氏を滅ぼした元就は、晴久の死を契機に、尼子氏領内への本格的な進軍を開始した。そして永禄8年（1565）4月、遂に尼子の本拠である月山富田城を約3万の兵をもって包囲した。対する城兵は約1万。だがかつて大内と毛利の連合軍すら寄せ付けなかった堅城であったため、この時も城の三方から攻め寄せる毛利軍の猛攻をよく跳ね退けた。

元就は一度兵を退き、同年9月に体制を立て直して再び城を包囲。今度は力攻めにすることなく、徹底した兵糧攻めの策を取った。この籠城戦の最中、尼子軍の勇将山中鹿介を見つけた毛利軍の豪傑品川大膳（狼之介）が勝負を挑んだ。鹿介も応じて一騎打ちに及んだのである。結果は鹿が狼を勝り、籠城方はおおいに士気をあげたが、毛利軍は目立った動きを見せることはなかった。

結局、この籠城戦は1年以上にもおよび、城の兵糧はすっかり底をついてしまう。永禄9年11月、義久は開城を決意し、その旨を元就に伝えた。すると元就は三男小早川隆景、次男吉川元春の順に義久の身柄は安堵すると記した血判を返した。元就は尼子氏を滅ぼさないほうが、その後の中国平定に有利と考えた。こうして大名としての尼子氏は滅んだが、納得できない山中鹿介らは、その後も尼子再興の戦いを続けたのである。

### 月山富田城（がっさんとだじょう）

この城の歴史は古く、一説によれば平安時代の末期、平景清によって築かれたと伝えられている。その後は出雲守護の山名氏や京極氏が有する、小さな山城であった。大規模な改修を行ったのは尼子経久の時代。山の地形を巧みに生かしていくつもの曲輪を配し、難攻不落の堅城とした。現在残されている石垣は、尼子以降に入城した毛利氏、吉川氏、堀尾氏により築かれたものだ。

| 項目 | 内容 |
|---|---|
| 所在地 | 島根県安来市 |
| 築城年 | 不明 |
| 別名 | 月山城 |
| 構造 | 複郭式山城 |
| 主な城主 | 尼子経久、吉川広家、堀尾吉晴 |
| 遺構 | 石垣、土塁、堀切、横堀、竪堀 |

# 島津 VS 高橋（大友）

## 城兵の玉砕をもって幕を閉じた熾烈な戦い

# 岩屋城と捨て身の玉砕戦

島津氏の九州制覇の夢を打ち砕いたのは、将兵が一丸となって戦い、そして死んでいった、高橋紹運率いる岩屋城の勇士たちであった。

**島津忠長**（しまづただなが）

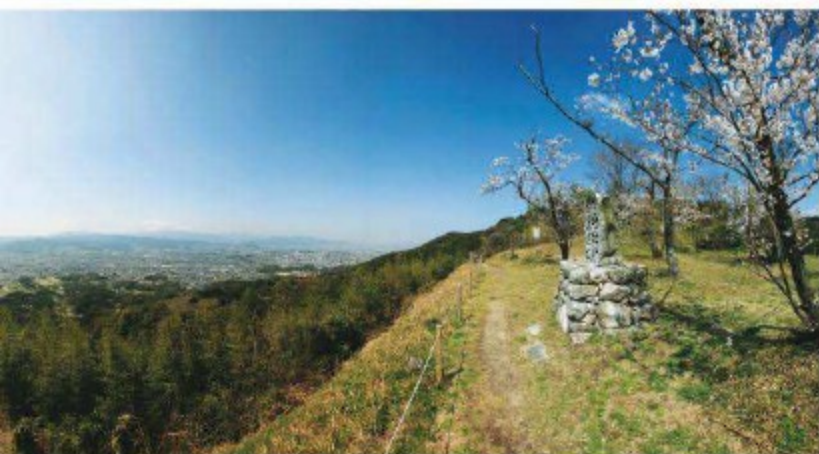
1551～1610年。島津義久に仕え、数々の軍功を挙げる。しかし岩屋城攻略に手間取り、秀吉軍の九州上陸を許してしまう。朝鮮の役では100の兵で1万の朝鮮軍を破り、島津義弘の窮地を救う。

岩屋城の本丸跡には「嗚呼壮烈岩屋城址」と刻まれた石碑が建てられている。ただ近隣の人たちにとっては、手軽なハイキングコースでもある。

### 義と意地を貫き通し 敵将からも賞賛された武将

戦国時代、この城を舞台にした籠城戦ほど壮絶だったものはないであろう。何しろ籠城した将兵はひとり残らず討死したのである。それは天正14年（1586）のことであった。

豊臣秀吉による九州征伐の軍がやって来る直前、それを阻もうと島津軍2万が岩屋城に来襲した。この城は豊臣方に属する大友宗麟の前進基地で、高橋紹運率いる768名の将兵が守っていた。紹運はもともと大友家宿老の吉弘鑑理の二男、鎮理であった。筑後の名家、高橋鑑種が起こした謀反を鎮圧したことで、高橋の名跡と岩屋城を与えられたのだ。

どう考えても勝ち目のある戦ではなかったが、紹運以下の将兵は頑強に抵抗。紹運自らも敵陣に討って出て、島津軍3000余を戦死傷させた。しかし数の差は埋めようもなく、最後に紹運は高櫓上で自刃。将兵も一兵残らず敵陣に突撃、あるいは自刃して果てた。首実検の際、敵将島津忠長は「類い稀なる名将を死なせてしまった」と涙を流したという。

本丸に立つと眼下には筑後平野が広がる。紹運はここで島津の大軍を半月も食い止め、九州制覇の夢を打ち砕いた。

**高橋紹運**（たかはしじょううん）

1548～1586年。豊後の大友宗麟の家臣、吉弘鑑理の子で、後の筑後柳河藩主立花宗茂の実父。大友氏が衰退すると見限る家臣も少なくなかったが、そのような時こそ一命を掛け尽くすものと豪語。

天叟寺蔵　提供／立花家史料館

### 岩屋城（いわやじょう）

城は天文年間（1532～55）に大友氏の武将・高橋鑑種が築城したとされている。標高410mの四王寺山の中腹（標高290m付近）に築かれた。その後、鑑種は主君の大友宗麟の傲慢な振る舞いに憤り、反旗を翻したため城を追われた。あまり広くはないが本丸跡や土塁、堀切などの遺構を見ることができる。

所在地　福岡県太宰府市
築城年　天文年間（1532～55）
別名　無
構造　山城
主な城主　高橋鑑種、高橋紹運
遺構　土塁、堀切

# 太田垣VS羽柴

## 戦国時代の経済戦争勃発の舞台

## 生野銀山と竹田城

秋から冬にかけ、川霧が発生すると雲の上に石垣だけが残された城が浮かんだように見える。そんな不思議な光景が楽しめる竹田城は、生野銀山の管理という、重要な役割を果たしていた。

今では「天空の城」や「日本のマチュピチュ」などと呼ばれている但馬の竹田城。もともとは室町時代、この地に勢力を張っていた太田垣氏の城であった。戦国時代になると、毛利方に属していた。

天正年間になり、織田と毛利の間が悪化すると、信長は羽柴秀吉を派遣し、播磨から但馬を抑えるように命じた。秀吉は軍を二手に分け、自らは上月城を攻略。別働隊は羽柴秀長が率い、但馬の諸城を攻めた。そこには竹田城も含まれている。なぜなら但馬の諸将を制圧するだけでなく、生野銀山を支配下に置くことが、羽柴軍の目的であったからだ。竹田城は銀山を管轄していたのである。

現在の竹田城に建物はないが、山上とは思えない立派な石垣が残されている。これは羽柴秀長が縄張りをして、最後の城主となった赤松広秀が仕上げたものと考えられている。

本丸の下から南二の丸、南千畳方向を望む。建物が一切残っていないから、かえって神秘的な風景にも思える。秋から冬にかけ川霧が発生すると、曲輪の下が一面白くなる。

右／一段高い場所が本丸。さらに右に見えるのは二の丸。
左／南二の丸と本丸の間にある虎口。

### 竹田城（たけだじょう）

山頂に築かれた総石垣の城郭で、最後の城主だった赤松広秀の石高2万2000石では分不相応な城。これだけの石垣と枡形、技巧的な虎口を有する近世城郭への改修は、文禄の頃に豊臣秀吉の資金援助で行われたという。

| | |
|---|---|
| 所在地 | 兵庫県朝来市 |
| 築城年 | 嘉吉3年（1443） |
| 別名 | 虎臥城 |
| 構造 | 梯郭式山城 |
| 主な城主 | 太田垣光景、赤松広秀 |
| 遺構 | 石垣、登り石垣、堀切、竪堀 |

# 安宅VS羽柴

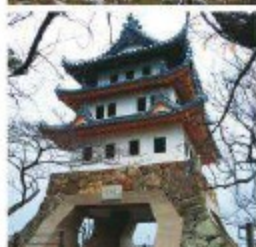
## 日本最古の模擬天守がある城

## 秀吉の淡路侵攻と洲本城

一時期は信長の傘下にあった淡路の安宅氏。城主が代わるとともに、反旗を翻したのである。怒った信長は、淡路攻略を秀吉に命じた。その軍を率いたのは、秀吉の軍師・黒田官兵衛であった。

洲本城を築いた安宅氏は、もともとは熊野水軍の一族であった。室町時代の初期、海賊討伐のために淡路に進出して地頭となった。城が築かれたのは戦国時代の大永6年（1526）になってからだ。

織田信長の力が強くなってくると、安宅信康はこれに従い毛利水軍と戦い、さらには石山本願寺を海上から封じ込めた。ところが信康が急逝すると、跡を継いだ弟の清康は熊野の安宅本家と結び、信長に反旗を翻した。そこで信長は天正9年（1581）に、羽柴秀吉に淡路攻略を命じた。この時、攻略を担当したのは黒田官兵衛だ。官兵衛が安宅河内守を討ち取ったと伝わる、備前長船祐定作「名物安宅切り」が現存する。

瀬戸内海を見下ろすことができ、しかも大坂湾への入口に立地するこの城は、水軍の根拠地に最適の条件を備えている。その後、城主となった仙石秀久や脇坂安治なども、水軍の強化を図っている。

上／石垣は約400年前に積まれたままなので、木の根が張っている場所もある。下／天守台の上に築かれた模擬天守。今は入城できないが、かつては展望台の役割を果たしていた。

### 洲本城（すもとじょう）

洲本城は東の丸から本丸天守台までの斜面の間に、竪堀や登り石垣などの防御施設が施されている。そしてしっかりとした石垣が目を引く。脇坂安治が城主だった頃、天守が造営されるとともに石垣も大改修されている。

| | |
|---|---|
| 所在地 | 兵庫県洲本市 |
| 築城年 | 大永6年（1526） |
| 別名 | 三熊城 |
| 構造 | 山城 |
| 主な城主 | 安宅治興、仙石秀久、脇坂安治、池田忠雄 |
| 遺構 | 石垣、天守台、石段、堀 |

厳選グッズ通販

男の隠れ家

# SELECT SHOP

精密木製模型で知られるウッディジョーから、
姫路城や熊本城などの城模型をご紹介。
その他名築城家に因んだアイテムも。

# 自らの手で名城を築く充実感、達成感を味わおう!

## 製作参考時間は222時間!

### 木製建築模型 1/150 姫路城(完全改良版)

**5万6000円(税抜)** 商品番号 WDJ-4219-OT

白亜の名城を自らの手で組み立てることができるキット。国宝姫路城は、梯郭式(ていかくしき)平山城で姫山(標高約46m)の上に、池田輝政により建てられた。大天守は2重の入母屋造りの建物を基部とする望楼型で、壁面全体が白漆喰総塗籠(しろしっくいそうぬりごめ)で造られ、その姿が白鷺を連想させることから、別名白鷺城といわれる。1993年世界文化遺産に登録され、城郭遺構として軍事的、芸術的にも世界一の白亜の名城として知られている。旧モデルも好評だったが、組み立てやすさをさらに重視して全面的にリニューアルを施した新モデル。着色や装飾に独自の工夫を凝らす楽しみも。

■サイズ/全高347×全幅440×奥行390mm ■製作参考時間/222時間
■付属品/カラー説明書
※塗料とジオラマ材料はキットに含まれておりません。

塗装を施せばまさに白鷺の城に(塗料はキットには含まれておりません)。

## ウッディジョーの精密木製城模型

日本唯一の木製帆船模型メーカーでもある「ウッディジョー」が手掛ける精密木製城模型。ヒノキや神代(じんだい)タモなど厳選した木材を、レーザー加工と職人の手作業による刃物加工で精巧にパーツ化している。一つひとつ組み上げて完成させた城郭模型は、美しい木目と実物さながらの迫力で、達成感もひとしお。

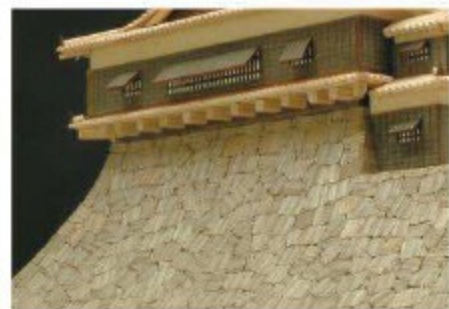
## 天下屈指の名城、熊本城を自らの手で完成させよう

**木製建築模型 1/150 熊本城**

**4万円（税抜）** 商品番号 WDJ-2704-0T

「肥後の虎」加藤清正が7年を費やし築いた名城・熊本城。天守は連結型望楼式天守。緩やかな勾配から上部の急な高石垣は「武者返し」といわれ防御性に優れる。その武者返しも忠実に再現されている。熊本城の復興に思いを馳せながら、少しずつ、少しずつ、組み上げよう。

■サイズ／全高317×全幅500×奥行360mm ■製作参考時間／80時間 ■付属品／カラー説明書 ※城の写真は製作した完成品に着色した完成イメージです。 ※塗料とジオラマ材料はキットに含まれておりません。

見る者を圧倒する"武者返し"も忠実に再現

## 最古の現存天守を持つ犬山城リニューアルモデル

**木製建築模型 1/150 犬山城（改良版）**

**2万円（税抜）** 商品番号 WDJ-4220-0T

■サイズ／全高220×全幅280×奥行280mm ■製作参考時間／30時間 ■付属品／カラー説明書 ※城の写真は製作した完成品に着色した完成イメージです。 ※塗料とジオラマ材料はキットに含まれておりません。

最古の現存天守といわれる国宝犬山城（別名伯帝城）は、天文6年（1537）織田信康により築城された。城は、平山城、複合式望楼型四重（三重四階）地階2階で野面積み石垣の上に建つ。今回リリースされた改良版は、特徴的な天守台の加工精度をさらに上げ、石垣台紙に石垣模様を印刷。飾り台は木製角形台に変更され、より組み立てやすくなった。

## 在りし日の江戸城天守を再現

**木製建築模型 1/150 江戸城**

**4万8000円（税抜）** 商品番号 WDJ-3320-0T

明暦3年（1657）の明暦の大火による焼失以後、ついに再建されることのなかった江戸城天守閣。本キットでは、在りし日の江戸城の雄姿を、寛永度天守の建築図を参考に、図書、文献をもとに細部にわたって1/150スケールで再現。かつての豪壮な江戸城天守を楽しめる。

■サイズ／全高448×全幅400×奥行360mm ■製作参考時間／130時間 ■付属品／カラー説明書 ※塗料とジオラマ材料はキットに含まれておりません。

## 熊本城はくまモンのプレート付き

ki-gu-mi 熊本城（くまモンのプレート付）

**6000円（税抜）** 商品番号 AZN-3883-0T

組み立てる楽しさと飾る楽しさが存分に味わえる木製パズルシリーズ「ki-gu-mi」。こちらは築城の名手と称えられる加藤清正が手掛けた名城・熊本城。日本三大名城のひとつである熊本城の美しさと雄大さを再現すべく、石垣、天守閣、櫓など、こだわり抜いて製作されている。難易度はこちらも嬉しい最高難度の「星5」。くまモンのプレート付き。

■パーツ数／298　■サイズ／幅210×奥行148×高さ155mm　■素材／合板　※着色のための塗料は付属しておりません。市販の塗料をご利用下さい（油絵具でも水彩絵具でも可）。
©2010熊本県くまモン#K26553

## インパクト大の新感覚パズル

ki-gu-mi 姫路城

**6000円（税抜）** 商品番号 AZN-3594-0T

自分だけの特別な時間に、夢中になれる木製パズルシリーズ「ki-gu-mi」。レーザー加工でカットを入れた木製のシートからピースを取り外し、ひとつずつ組み上げていく。「姫路城」の難易度は最高の「星5」で作り応えも充分。完成後に着色すればより迫力が増し、重厚感あるインテリアに。接着剤不要で環境にも配慮。

■パーツ数／345
■サイズ／幅280×奥行220×高さ210mm
■素材／合板　※着色のための塗料は付属しておりません。市販の塗料をご利用下さい（油絵具でも水彩絵具でも可）。

## 官兵衛の名言を記した鉄扇

■サイズ／約24cm（8寸）
■重量／約150g
■材質／鉄（親骨）、竹、紙
■付属品／扇子袋、箱入

鉄扇／8寸　黒田官兵衛

**1万円（税抜）** 商品番号 SWO-3498-0T

扇の親骨部分が鉄で出来ている鉄扇は、戦国の世から護身用の武具として、また舞の道具として数多の武将たちに愛用されてきた。現在では、その「末広がり」の形状もあいまって、武将たちの武運にあやかる縁起物としても人気だ。名軍師であり名築城家でもあった黒田官兵衛。黒地の鉄扇に白字で黒田家の家紋「藤巴」、もう片面には、官兵衛の名言「我、人に媚びず、富貴を望まず」を記している。

## 大帽子造りの豪快な一振り

模造刀／加藤清正　大刀

**1万6000円（税抜）** 商品番号 YOK-4221-0T

「賤ヶ岳七本槍」のひとりに数えられ、豊臣秀吉の子飼いとして数々の武功を打ち立てた加藤清正。築城名人としても有名で、代表作である熊本城のほか、名古屋城などの築城に携わった。こちらはその加藤清正をイメージして製作された模造刀。刀身が大帽子の造りとなっている豪快な一振りだ。

■サイズ／全長:約105cm、刃渡り:約70.5cm　■重量／約1.2kg　■仕様／鍔:竹透かし、鞘:黒地金銀刷毛目塗り（ウレタン塗装）　■材質／刃材:亜鉛合金ダイキャスト、鍔:クロムメッキ、柄材:樹脂、人絹捻巻、鞘材:天然木、下緒:人絹平織　※購入・所持に際しての免許・登録の必要はございません。　※観賞用のため、強度が高くありません。振り回すと破損や事故の原因となりますので、決して行わないで下さい。

## 戦国の覇者、織田信長モデル

**日本刀はさみ 織田信長 宗三左文字モデル 掛台付き**

**3800円（税抜）**

商品番号 NH-3812-OT

織田信長の愛刀がモチーフ。刃体に“宗三左文字”を入れた名刀の風格漂う一品。鞘をイメージしたケースには織田家の家紋“五つ木瓜”入り。上刃と下刃の長さの違いによる「引き切り効果」でスムーズな切れ味を実現。刃物の町、岐阜県関市の職人が一丁ずつ丁寧に刃付けしている。

■サイズ／全長180mm（鞘を含めると185mm） ■重量／55.5g（鞘を含めると70g） ■材質／刃:ステンレス刃物鋼、ハンドル・鞘:ABS樹脂 ■製造国／日本

## 『敦盛』を舞う信長の幻影に酔いしれる

**鉄扇／8寸 織田信長**

**1万1000円（税抜）** 商品番号 SWO-3570-OT

豪華な金地の扇には、「木瓜」の家紋、もう片面には織田信長が旗印に使った3つの永楽通宝と花押が入る。信長は幸若舞（こうわかまい）の『敦盛』を好んで舞ったという。桶狭間の戦いに赴くにあたっても、謡い、かつ舞ったとされる。「人間（じんかん）五十年、化天（かてん）のうちを比ぶれば、夢幻の如くなり」「一度生を享け、滅せぬもののあるべきか」の一節を特に好んだと伝えられている。

■サイズ／約24cm（8寸） ■重量／約150g ■材質／鉄（親骨）、竹、紙 ■付属品／扇子袋、箱入

真ん中は五穀豊穣の福の神大黒天

左には福徳財宝の福の神、弁財天

右には必勝と財運の福の神、毘沙門天

## 天下人、秀吉が生涯所持した念持仏を原寸大で再現

**三面大黒天（原寸大複製）**

**3万5000円（税抜）** 商品番号 MRT-4152-OT

世界史的にも稀に見る大出世を遂げた歴史的英雄・豊臣秀吉は、生涯、一体の仏像を大切に所持していたとされる。その念持仏が秀吉の菩提寺である鷲峰山高台寺圓徳院（京都市東山区、北政所ねねが秀吉を弔うために建立）に今なお祀られる“三面大黒天”だ。本作品は圓徳院の公認を受け、三面大黒天をほぼ原寸大で再現した復刻像。一体一体、圓徳院にて開眼供養のご祈祷を受けた証明書、公認の証となる二枚の御札（姿札と字札）が付属する。三面大黒天は、五穀豊穣の福の神＝大黒天、必勝と財運の福の神＝毘沙門天、福徳財宝の福の神＝弁財天という単独でも強力な天部が三位一体となった最強の福の神。秀吉はそれを生涯、念持仏とすることで実際にも稀に見る勝負運と、ありがたい良縁、そして大きな金運に恵まれた。

■サイズ／本体:約高さ130×幅105×奥行80mm、台座:約高さ35×幅142×奥行100mm ■重量／本体:210g、台座:170g ■材質／桧 ■生産地／日本

圓徳院にて開眼供養のご祈祷を受けた証明書、公認の証となる二枚の御札（姿札と字札）が付属

一体一体、圓徳院にて開眼供養のご祈祷を受けている

まだある！イチオシ商品

SELECT SHOP's

# BEST SELLER

新選組や西郷隆盛、大久保利道などの
維新の志士に関連したグッズをご紹介。
人気のウイスキーフラスコやハンチングもお勧め！

## 大河ドラマ「新選組!!」の続編

DVD／新選組!!
土方歳三 最期の一日

**3900円（税抜）**
通販限定価格

商品番号 PJ-3839-OT

山本耕史演じる土方歳三を主人公に、彼の最後の一日を熱く描いた大河ドラマ史上初の続編。これを見ずに「新選組!!」は終わらない、ファン必見の1枚。近藤勇の死から一年、箱館・五稜郭。新選組副長・土方歳三が北の大地で最後に見た夢とは？

■収録時間／89分 ■仕様／片面二層/ステレオ/16:9 ©2006 NHK 発行・販売元:NHKエンタープライズ

## 西郷の愛刀をモチーフにしたペーパーナイフ

■寸法／全長210mm、刃厚1.8mm ■重量／本体:35g、掛け台他:15g ■ハンドルカラー／黒 ■材質／刃部:ステンレス刃物鋼、ハンドル:ABS＋エラストマー、鞘・掛け台:A.B.S ■製造国／日本

名刀ペーパーナイフ 西郷隆盛　千子村正モデル

**3200円（税抜）** 商品番号 NH-4105-OT

西郷隆盛の愛刀「千子村正」（せんごむらまさ）をモチーフにしたペーパーナイフ。直刃に湾（のたれ）を基調とした刃紋は西郷の威厳を感じさせる。刃物の町・岐阜県関市の刃物職人が丁寧に刃付けを行っており、心地良くカットできる。純和風な黒石目（くろいしめ）調の鞘は風格を醸し出すと共に、刃を剥き出しにすることなく安全性も高めている。

## 薩摩拵えならではの一尺柄

模造刀／西郷隆盛 大刀

**1万6000円（税抜）** 商品番号 YOK-4101-OT

維新三傑のひとり、西郷隆盛は刀剣好きとしても知られるが、自身は13歳の時に負った右腕の重症により、刀が満足に振れなくなったため、剣術の道を諦め、学問に励むようになったと伝えられている。こちらは西郷隆盛の愛刀をイメージした拵え。薩摩拵えならではの一尺柄（約30cm）が特徴だ。

■サイズ／全長:約110cm、刃渡り:約73cm ■重量／約1.2kg ■仕様／刃紋:直刃(国光)、鍔:桜透かし、鞘:大たたき艶消し(ウレタン塗装) ■材質／刃材:亜鉛合金ダイキャスト、鍔・クロムメッキ、柄材:樹脂、人絹捻巻、鞘材:天然木、下緒:人絹平織
※購入・所持に際しての免許・登録の必要はございません。
※観賞用のため、強度が高くありません。振り回すと破損や事故の原因となりますので、決して行わないで下さい。

## 改革者・大久保利通

■サイズ／イラスト:高さ288×幅200mm、額縁:高さ390×幅300×厚さ10mm ■額縁／アルミ製
©諏訪原寛幸／七大陸

額縁入りイラスト／大久保利通

**5000円（税抜）** 商品番号 NNT-3845-OT

車窓に流れる景色に、動乱と未来を見たのか厳しい表情の大久保利通。薩摩藩士であった大久保は、西郷隆盛らと江戸幕府を倒し、近代国家建設を始めようとしたその時、非業の死を迎える。しかしその後、大久保が抱いた構想は、後輩の政治家たちに受け継がれて実を結ぶ。圧倒的な迫力とリアリティで迫る諏訪原作品をお手元に。

## 稀代のイラストレーターが描く無比の世界

額縁入りイラスト／西郷隆盛

**5000円（税抜）** 商品番号 NNT-4100-OT

歴史人物イラストの第一人者・諏訪原寛幸氏の作。西南戦争勃発時に着用していたという陸軍大将の軍服をまとった姿は、まさに威風堂々。写真が無いとされ未だ謎説ある西郷隆盛の姿だが、卓越した創造性と描写によって、激動の時代を牽引した雄々しさと憂いを見事に表現した。

■サイズ／イラスト:高さ200×幅288mm、額縁:高さ300×幅390×厚さ10mm ■額縁／アルミ製
©諏訪原寛幸／七大陸

## お出掛け時のダンディなアクセントアイテム

羊革ハンチング
**6800円（税抜）** 商品番号 SIK-2865-OT

高級羊革を丁寧になめした本格ハンチング。流行を取り入れた少し長めのつばは、お洒落でかつ日差しも防ぐ。両サイドのベルト部分は手仕事ならではのステッチ。

■素材／表地:羊革、裏地:ポリエステル100%　■カラー／ブラック　■仕様／サイド部分:アジャスター付き（つばの長さ:約7.5〜8cm）　■生産国／中国

## 城探訪で歩き疲れたら、ちょっと一杯

ウイスキーフラスコ
1508CL
ブラックレザー　カップ付
**3600円（税抜）**
商品番号 SWO-2756-OT

レザーが手に馴染む屋外仕様のウイスキーフラスコ。ウイスキーなどアルコール濃度の高い蒸留酒を入れるレザー張りのスキットルボトル。携帯に便利なよう薄く湾曲し、ズボンのポケットに入れて持ち歩くことができる。

■サイズ／幅90×高さ155×厚さ25mm　■重量／193g　■容量／8オンス（約230ml）　■材質／ステンレス、合皮レザー

キリトリ線

郵便はがき

料金受取人払郵便

新宿局承認
4408

差出有効期間
平成31年5月
31日まで

切手はいりません

160-8792

873

東京都新宿区四谷 4-3
四谷トーセイビル６階
(株)ジャパンクリエイトワークス
えがおプラス
「男の隠れ家」係行

ご依頼主様

ふりがな
お名前
お電話番号　　－　　－
ご住所 □□□-□□□□
都道府県　市区町村

| 商品番号 | 商品名 | 個数 | 価格 |
|---|---|---|---|
| －　－ | | | 円 |
| －　－ | | | 円 |
| －　－ | | | 円 |
| －　－ | | | 円 |
| －　－ | | | 円 |

## ご注文方法

**インターネット**（24時間受付）
えがおプラス　検索
http://rekishiplus.com

PC、スマートフォン、モバイルからアクセス可能。

**フリーダイヤル**
0120-007-818
受付時間／月〜金曜日、10:00〜18:00
土日祝は休み

**郵送**
切手不要、ポスト投函
左のハガキに必要事項をご記入の上、キリトリ線で切り、ハガキの大きさの厚紙に貼って投函してください。

**FAX**（24時間受付）
0120-002-506
ご希望の商品番号・商品名・数量と、お届け先のご住所・お名前・電話番号をご記入の上、FAXしてください。

左のハガキに必要事項をご記入の上、FAXしていただくこともできます。

### ●お支払い方法について
インターネットでお申し込みの場合は、代金引換、各種クレジットカード決済、コンビニエンスストア決済がご利用いただけます。
フリーダイヤル、ハガキ、FAXでお申し込みの場合は、代金引換のみとなります。

### ●送料について
※2018年6月1日より送料を840円（税込）に改定いたします。
1回のご注文につき648円（税込）の送料がかかります。また、代金引換でお支払いの場合、別途代引き手数料が必要となりますのであらかじめご了承ください。

### ●代引き手数料について
税込合計金額が、1万円以下の場合は324円（税込）、3万円以下は432円（税込）、10万円以下は648円（税込）となります。

### ●その他
商品はお申し込み後、10営業日前後でお届けいたします。メーカー在庫切れの場合、納期までお時間をいただく場合がございますのでご了承ください。お客様のご都合による返品・交換は原則として受け付けておりません。なお特別な理由がある場合には、返品をお受けする場合がございます。その際の送料はお客様にご負担いただきます。

Staff

Publisher
星野邦久 Kunihisa Hoshino

Editor in Chief
栗原紀行 Noriyuki Kurihara

Editor&Writer
中川 梓 Azusa Nakagawa
末松敏樹 Toshiki Suematsu
新井寿彦 Toshihiko Arai
菅 堅太 Kenta Suga
大嶋里奈 Rina Oshima
齊藤加代子 Kayoko Saito

Writer
相庭泰志 Yasushi Aiba
秋川ゆか Yuka Akikawa
浅川俊文 Toshifumi Asakawa
阿部文枝 Fumie Abe
岩谷雪美 Yukimi Iwaya
上永哲矢 Tetsuya Uenaga
笹木博幸 Hiroyuki Sasaki
野田伊豆守 Izunokami Noda

Photographer
遠藤 純 Jun Endo
尾上達也 Tatsuya Onoe
金盛正樹 Masaki Kanamori
菊田香太郎 Kotarou Kikuta
木下清隆 Kiyotaka Kinoshita
佐藤佳穂 Kaho Satou
島崎信一 Shinichi Shimazaki
須貝智行 Tomoyuki Sugai
目黒 MEGURO.8 Meguro Meguro.8

Design
安部孝司 Koshi Abe
久保田りん Rin Kubota
（NOEL DESIGN OFFICE）

Map Design
ZOUKOUBOU

DTP
平塚晴美 Harumi Hiratsuka

Advertising Division
高橋正文 Masafumi Takahashi
湯川克明 Katsuaki Yukawa

Producer
株式会社三栄書房
遠藤和宏 Kazuhiro Endo

日本の名城を歩く

サンエイムック 男の隠れ家ベストシリーズ
「日本の名城を歩く」2018年6月9日発行
発行人:星野邦久　編集人:栗原紀行
発行所:株式会社三栄書房
〒160-8461 東京都新宿区新宿6-27-30 新宿イーストサイドスクエア7F
TEL:03-6897-4611（販売部） TEL:048-988-6011（受注センター）
受注センター　TEL:048-988-6011
編集部:株式会社プラネットライツ
〒160-0002　東京都新宿区四谷坂町2-18
編集部　TEL:03-5369-8780
SAN-EI SHOBO Publishing co.,Ltd.
PRINTED IN JAPAN 図書印刷


岐阜県恵那市にある「岩村城」跡。岩村城の特徴のひとつ、六段壁と呼ばれる石垣。

# 福岡城

## 黒田官兵衛と長政 父子で築いた名城が今甦る!?

天守閣については、その存否をめぐって議論があり、当初から建設しなかった説、一旦は建設されたが何らかの事情で取り壊されたとする説、建造の計画はあったが実行されなかった説、建設の途中で取り壊されたとする説など諸説あります。

黒田官兵衛（如水）の子、黒田長政は慶長六（1601）年、福岡城の築城を始めた。長政は、貿易都市であった博多に隣接する福崎を新たな城の建設地に選び、入江や丘陵などの自然を巧みに生かして、周囲を濠で囲んだ要害の城を築いた。当初、約8㎞離れた名島城から建物や石垣の石を運ばせたと伝わり、地元では「名島引け」と呼ばれている。

城普請にあたっては、すでに隠居していた黒田如水も関わっていたようで、長政から普請担当者に宛てた書状には「たとえ如水の好みにあわなくとも当初の予定通り進めよ」とあり、如水と長政の嗜好に違いがあったことが分かり興味深い。

多聞櫓内部は原則非公開ですが、福岡城さくらまつりの期間中は特別公開されます。またボランティアガイドツアー（不定期開催）に参加すると、内部の見学が可能です。

福岡城跡には今も総延長3㎞を超える石垣が残る。最初に着手した大天守台の石垣は最も緩い勾配を持つ野面積みであり、慶長期としては古い様式になる。様式の異なる雄大な天守台と石垣の連なりはまさに圧巻。近年は春の梅桜、秋の紅葉とともに、石垣が城の見どころとなっている。

江戸時代から現存する唯一の建造物である南丸多聞櫓は、国の重要文化財にも指定されている。地震等の影響で近年は傷みが見られていたが、2年にわたる保存修理工事が終了し、漆喰に下見板張りの美しい姿を取り戻している。福岡城にはこのほか47余の櫓が存在していたが、明治維新後、次第に失われ、残った一部の櫓も福岡大空襲で焼失してしまった。

復元整備に着手した潮見櫓

福岡市では、如水・長政父子が築城した、日本有数の規模を誇る城郭の整備を進めるため、福岡城整備基金を設置し、寄付等の協力を呼びかけている。平成30年度からは当時の古材が残る潮見櫓の復元が着手されるなど、今後の進展に期待がかかる。

## 歴史的建造物復元整備のための寄付金募集中

潮見櫓など、福岡城の歴史的建造物（櫓・門等）の復元整備を目的とした寄付金を募集しています。寄付金は「ふるさと納税」として、住民税等の控除が受けられます。また、1万円以上の寄付者には、城内に芳名板を掲示するほか、金額に応じて福岡の特産品等を進呈します。

寄付額が10万円以上の寄付者は、通常版に比べ約4倍のプレミアム芳名板を掲示します。また、法人からの寄付についても、全額損金に算入することができます。

詳しくは、福岡市ホームページをご覧いただくか、希望者にはリーフレットをお送りいたします。

福岡 太朗　表

寄付之証　裏

芳名板は城内施設
三の丸スクエアに掲示

芳名板・例

（問）福岡市史跡整備活用課　TEL.092-711-4784　FAX.092-733-5537　E-Mail: shiseki.EPB@city.fukuoka.lg.jp

H30.4月 ～ H31.3月
（土・日・祝日及び8月の平日）

2018 April ～ 2019 March
Only Sat,Sun,and national holidays,runs every day in Aug

**直行バス運行　1日2往復**

予約不要です。　直接各乗り場にお越しください。

# 松本 上田 BUS

MATSUMOTO　　UEDA

| 松本バスターミナル Matsumoto Bus Terminal | | 鹿教湯温泉 Kakeyu Hot spring | | 上田駅お城口 Ueda Sta. |
|---|---|---|---|---|
| 10:40 発 | → | 11:30 | → | 12:10 着 |
| 17:15 発 | → | 18:05 | → | 18:45 着 |

| 上田駅お城口 Ueda Sta. | | 鹿教湯温泉 Kakeyu Hot spring | | 松本バスターミナル Matsumoto Bus Terminal |
|---|---|---|---|---|
| 8:15 発 | → | 8:55 | → | 9:45 着 |
| 13:20 発 | → | 14:00 | → | 14:50 着 |

**運賃（片道）**
fare(one way)

| 区間 | 運賃 |
|---|---|
| 上田～松本 Ueda Matsumoto | 1,500円（小学生750円） |
| 上田～鹿教湯 Ueda Kakeyu | 500円（小学生250円） |
| 松本～鹿教湯 Matsumoto Kakeyu | 1,200円（小学生600円） |

◆運賃は車内にてお支払いください。現金のみの対応です。
◆障がい者割引が適用されます。ご乗車の際は手帳をご提示ください。

所要時間 1時間30分 1hr 30min

至長野　別所温泉　上田電鉄別所線　上田菅平 I.C.　上田 Ueda　鹿教湯温泉 Kakeyu　三才山トンネル　至東京　至長野　至白馬　松本 I.C.　松本 Matsumoto　塩尻　中央本線　至新宿　至名古屋　岡谷 J.C.T.　信州まつもと空港

乗車特典
松本城＆上田城など、両市の11施設で利用可能な入場割引券を進呈中！

## 松本市・上田市

◆お問合せ：松本市観光案内所 0263-32-2814（9:00～17:30）　松本市観光情報センター 0263-39-7176（9:00～17:30）
松本市観光温泉課 0263-34-3000（平日9:00～17:00）　松本観光コンベンション協会 0263-34-3295（平日9:00～17:00）
上田市観光課 0268-23-5406（9:00～17:00）


サンエイムック
男の隠れ家ベストシリーズ
日本の名城を歩く

男の隠れ家ベストシリーズ「日本の名城を歩く」2018年6月9日発行　発行人:星野邦久　編集人:東風紀行　発行所:株式会社三栄書房　〒160-8461 東京都新宿区新宿6-27-30 新宿イーストサイドスクエア7F
TEL 03-6897-4611(販売部)　TEL 048-988-6011(受注センター)　編集部:株式会社プラネットライツ　〒160-0002 東京都新宿区四谷坂町12-18　TEL:03-5369-8780

定価 本体815円+税


雑誌 62265-85

SAN-EI SHOBO Publishing co.,Ltd.
PRINTED IN JAPAN 図書印刷

ISBN978-4-7796-3601-1
C9476 ¥815E